

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(203)

県道伊集院蒲生溝辺線改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

き さ き ばる
木佐木原遺跡
(始良市蒲生町)

2020年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡全景（奥には米丸マール）



木佐木原遺跡 出土遺物

序 文

本報告書は、県道伊集院蒲生溝辺線改築事業に伴って、平成27～28年度にかけて実施した始良市蒲生町上久徳に所在する木佐木原遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡では、縄文時代から近世にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。狭小な調査範囲にも関わらず、縄文時代中期後半～後期前半の遺物が大量に出土したことは特筆すべき成果です。遺跡の立地や縄文時代の物流を示す遺物は、南九州における縄文時代中期後半～後期前半の状況を示す良好な資料となりました。

さらに、本遺跡が米丸マールや住吉池などの火山に囲まれた立地であり、調査区全体で米丸マールの噴出物が厚く堆積していることが判明し、中世期には噴出物（岩盤層）を利用した遺構も確認されました。

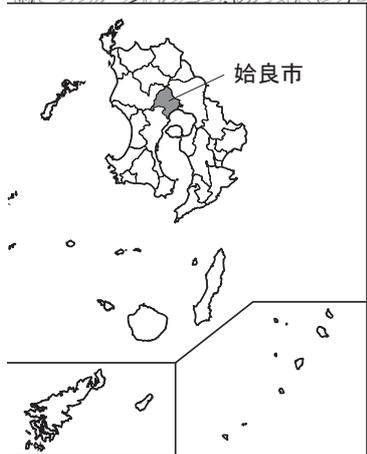
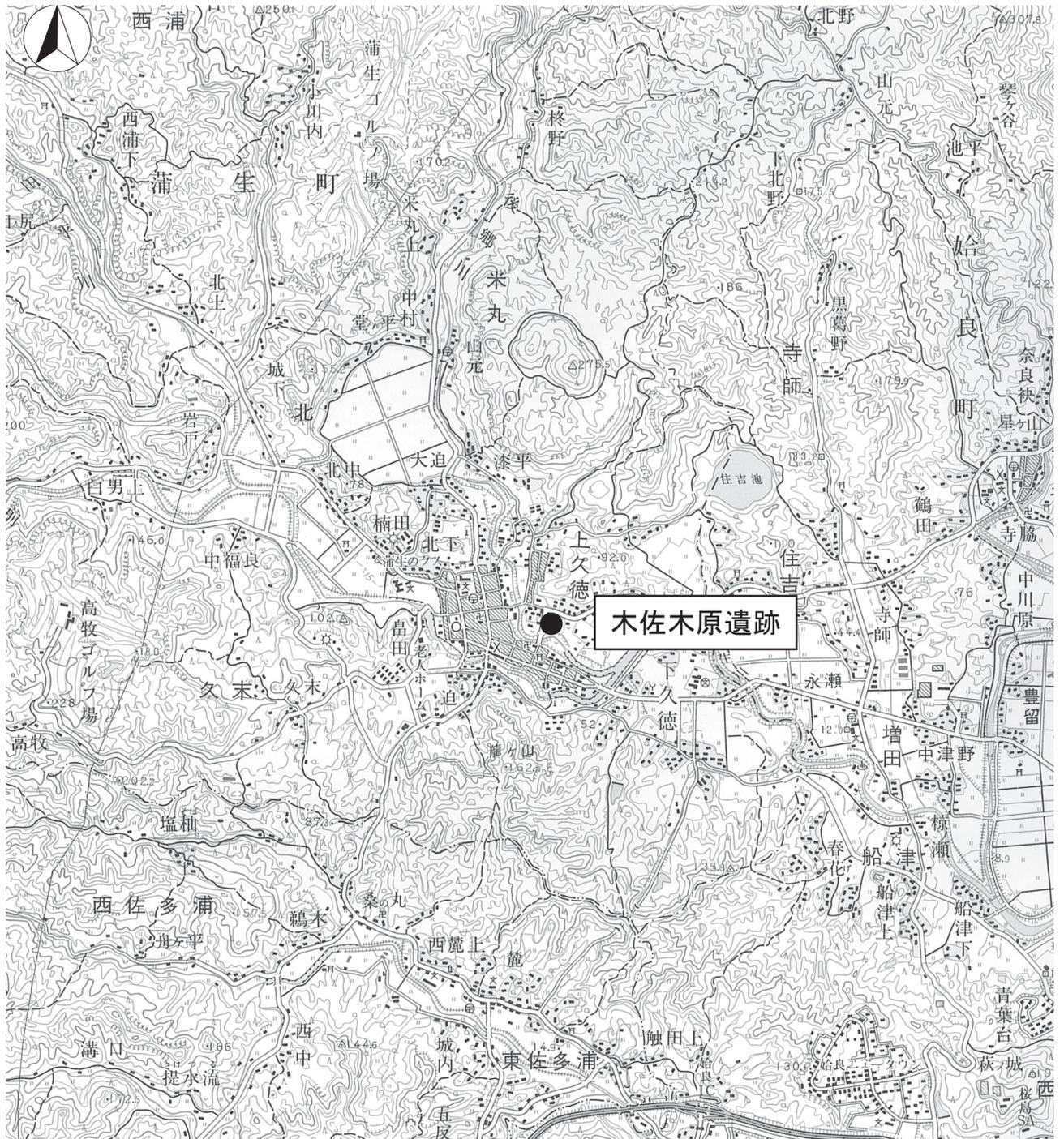
本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値をご理解いただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり、ご協力をいただいた県土木部道路建設課、始良・伊佐地域振興局、始良市教育委員会、ならびに発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

令和2年 3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 前迫亮一

報 告 書 抄 録

ふりがな	きさきばるいせき							
書名	木佐木原遺跡							
副書名	一般県道伊集院蒲生溝辺線改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	203							
編著者名	黒木梨絵・宮崎大和							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2020 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
きさきばる 木佐木原	かごしまけん 鹿児島県 あいらし 始良市 かもうちょう 蒲生町 かみぎゅうとく 上久徳	462250	225-232	31° 76' 149"	130° 57' 740"	確認調査 201402 201407 本調査 20150703～ 20150928 20160509～ 20161111	810 4,740 (計 5,550)	一般県道伊集院 蒲生溝辺線改築 に伴う埋蔵文化 財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
木佐木原	散布地	縄文 縄文中期後半～後期 弥生・古墳 古代 中世 近世	土坑 1 基 炉跡 1 基 炉跡 2 基 掘立柱建物跡 2 棟 竪穴建物跡 1 軒 炉跡（カマド状遺構） 1 基 土坑 7 基 柱穴群 土坑 1 基 溝状遺構（畝間状） 10 条		縄文前期土器（曾畑式・轟式） 縄文中～後期土器（春日式～指宿式） 打製石鏃、石匙、石錐、搔器、 石核、磨製石斧、磨石、敲石、 石皿、軽石加工品 土師器、須恵器、土錘 土師器、青磁、白磁、青花、石塔 陶磁器（薩摩焼ほか）			
遺跡の概要	<p>木佐木原遺跡は、縄文時代から古代・中世・近世にわたる複合遺跡である。</p> <p>このうち、縄文時代では中期後半～後期前半の遺物を主体に、約 20 万点以上の遺物が出土した。中期後半から後期前半までがまとまって出土したことで南九州屈指の豊富な資料が得られた。出土した遺物は土器・石器・軽石加工品などで、特に土器においてはバリエーションが豊富で、縄文時代中期後半～後期前半の様相を示す好例として注目される。</p> <p>そのほか、古代では土師器焼成遺構と考えられる遺構や炉跡が検出されている。中世では米丸マール岩盤層をくり抜いたピット群で構成される掘立柱建物跡や竪穴建物跡が検出されている。近世では岩盤層を掘った畝間と考えられる細い溝状遺構が検出された。</p> <p>なお、本遺跡内では米丸マールの火砕流堆積物も観察、確認できた。</p>							



木佐木原遺跡位置図 (S=1 : 50,000)

例 言

- 1 本書は一般県道伊集院蒲生溝辺線改築に伴う木佐木原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は始良市蒲生町上久徳に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課（始良・伊佐地域振興局）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は平成27・28年度に実施し、整理・報告書作成作業は平成29～31年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は「KSK」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて真北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は（株）ふじた・（有）スカイサーベイ九州に委託した。
- 11 石器の実測は（株）パスコ、（株）九州文化財研究所、（株）島田組に一部委託した。
- 12 遺構図等の作成及びトレースは黒木梨絵が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の実測・トレースは、黒木・宮崎大和が作業員の協力を得て行った。
- 14 出土遺物の写真撮影は、西園勝彦・鮫島えりなが行った。
- 15 本書に係る自然科学分析は、炭素年代測定は（株）加速器分析研究所、（株）古環境研究センターに委託し、樹種同定、テフラ分析、植物珪酸体分析を（株）古環境研究センターに委託した。
また、成尾英仁氏・下司信夫氏に玉稿を賜った。
- 16 陶磁器の分類および編年は以下の文献を参考にした。

中世前期：大宰府分類（太宰府市教育委員会編2000）

中世後期：青磁 上田分類（1982）

白磁 森田分類（1982）

青花 小野分類（1982）

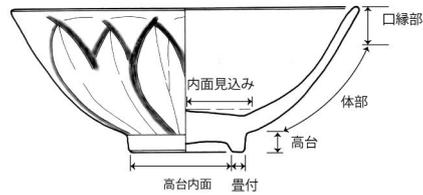
上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」
『貿易陶磁器研究』2, pp.55-70

小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」
『貿易陶磁器研究』2, pp.71-87

大宰府市教育委員会編2000「大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」大宰府市の文化財第49集

森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」
『貿易陶磁器研究』2, pp.10-33

- 17 本書で用いた陶磁器の表現は次のとおりである。



- 18 観察表に記した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』のマンセル記号で表記している。
- 19 本書の編集は黒木が担当し、執筆分担は下記のとおりである。

第1・2章 黒木

第3章 黒木・宮崎

第4章 各分析者、成尾・下司

第5章 黒木

- 20 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。

なお、調査中に行った土層の剥ぎ取りも鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管している。



中央トレンチ土層剥ぎ取り

凡 例

1 遺構名については調査時に遺構名を付与後、欠番にしたものがあり、報告書掲載のため便宜上新たな遺構名を付与し、掲載番号とした。右表を参照にされたい。

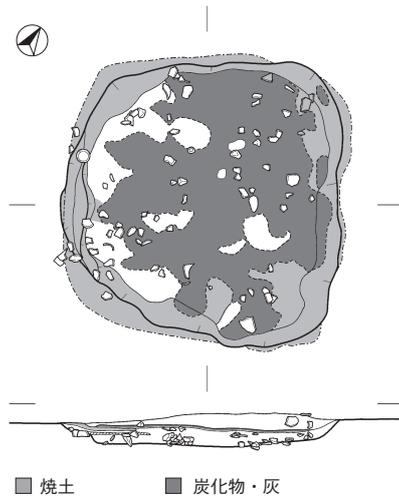
なお、原資料（図面・遺物・写真等）の注記には、調査時の旧遺構名で記載されている。

掲載名	旧遺構名
SK1	SK6.7
SK2	SK11
SK3	SK1
SK4	SK4
SK5	SK5
SK6	SK9
SK7	SK8
SK8	SK10

掲載名	旧遺構名
SL1	SL2
SL2	SL4
SL3	SL5
SL4	SL1
SI1	SI1
SB1	SB1
SB2	SB2

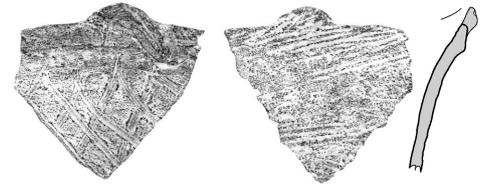
掲載名	旧遺構名
SD1	轍状遺構
-	SD2
-	SD3
-	SD4

2 本書で用いる遺構については次のとおりである。

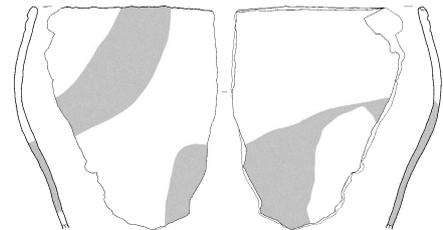


4 土器の表現については次のとおりである。

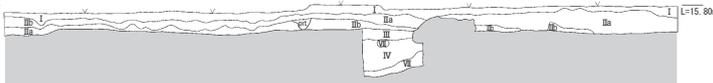
滑石混入土器



赤色顔料付着



3 VIII層（米丸マール岩盤層）はアミカケで表現した。



5 本書で使用した石材は担当者が下記の基準で分類した。下記以外の石材については観察表に記載してある。

石材分類

石材	分類	特 徴
黒曜石	OB	I 不純物を多く含み、漆黒で光を通さないもの。上牛鼻の原産地資料に類似する。
		II 光を通し、不純物を大量に含むもの。三船・長谷・日東などの原産地資料に類似する。
		III 鉛色～黒色を基調とし、不純物をほとんど含まないもの。桑ノ木津留、霧島系の原産地資料に類似する。
		IV 青灰色～黒色で不純物の少ないもの。針尾中町、淀姫、腰岳等の西北九州の原産地資料に類似する。
安山岩	AN	灰色で白色の長石や黒色の輝石の斑晶が入ったもの。
凝灰岩	TU	灰色・灰白色で、火山灰や火山砂などが堆積して凝固したもの。
蛇紋岩	SE	濃緑色で、ぬめっとした肌触りを有し、光沢があるもの。
頁岩	SH	黒色～灰色で、珪質分がなく無光沢で白色の節理があるもの。
砂岩	SA	灰色～ベージュ系の色で、砂粒・石英粒が集合して固まったもの。
ホルンフェルス	HF	硬質化が著しく、鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。
めのう系	CC	めのう・玉髓・石英・タンバク石・鉄石英を含めたもの。
チャート	CH	灰白色で、珪酸を含み光沢感を有するもの。

本文目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の体制と経過	1
第3節 整理・報告書作成	3
第Ⅱ章 歴史的・地理的環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	8
第3節 調査の成果	17
1 縄文時代の成果	17
2 弥生・古墳時代の調査	155
3 古代の調査	155

4 中世の調査	157
5 近世の調査	169
第Ⅳ章 自然科学分析	197
第1節 放射性炭素年代測定	197
第2節 樹種同定・植物珪酸体分析	208
第3節 テフラ分析	218
第4節 木佐木原遺跡の地質	225
第Ⅴ章 総括	229
第1節 縄文時代の成果	229
第2節 古代・中世の成果	231
第3節 遺跡の残存状況等	232

写真図版

挿図目次

第1図 試掘トレンチ配置図	1
第2図 本調査範囲図	2
第3図 米丸マール・住吉マールの形成	5
第4図 周辺遺跡位置図	6
第5図 調査範囲と基本層序対応表	9
第6図 土層断面図(1)	10
第7図 土層断面図(2)	11
第8図 土層断面図(3)	12
第9図 土層断面図(4)	13
第10図 土層断面図(5)	14
第11図 土層断面図(6)	15
第12図 土層断面図(7)	16
第13図 縄文時代遺構配置図	17
第14図 SK1・SL1	17
第15図 土器分布図(1)	19
第16図 土器分布図(2)	20
第17図 土器分布図(3)	20
第18図 土器分布図(4)	21
第19図 1類 轟式・曾加式土器	22
第20図 2類 春日式土器(1)	23
第21図 2類 春日式土器(2)	24
第22図 2類 春日式土器(3)	25
第23図 3類 中尾田Ⅲ類土器(1)	25
第24図 3類 中尾田Ⅲ類土器(2)	26
第25図 3類 中尾田Ⅲ類土器(3)	27
第26図 3類 中尾田Ⅲ類土器(4)	28
第27図 3類 中尾田Ⅲ類土器(5)	29
第28図 3類 中尾田Ⅲ類土器(6)	30
第29図 3類 中尾田Ⅲ類土器(7)	31
第30図 3類 中尾田Ⅲ類土器(8)	32
第31図 3類 中尾田Ⅲ類土器(9)	33
第32図 3類 中尾田Ⅲ類土器(10)	34
第33図 3類 中尾田Ⅲ類土器(11)	35
第34図 4類 大平式土器(1)	36
第35図 4類 大平式土器(2)	37
第36図 4類 大平式土器(3)	38
第37図 5類 並木式土器(1)	39
第38図 5類 並木式土器(2)	40
第39図 5類 並木式土器(3)	41
第40図 5類 並木式土器(4)	42
第41図 6類 阿高式土器(1)	43
第42図 6類 阿高式土器(2)	44
第43図 6類 阿高式土器(3)	45
第44図 6類 阿高式土器(4)	46
第45図 6類 阿高式土器(5)	47
第46図 6類 阿高式土器(6)	48
第47図 6類 阿高式土器(7)	49
第48図 6類 阿高式土器(8)	50
第49図 6類 阿高式土器(9)	51

第50図 6類 阿高式土器(10)	52
第51図 6類 阿高式土器(11)	53
第52図 7類 中津式土器	54
第53図 8類 宮之迫式土器(1)	55
第54図 8類 宮之迫式土器(2)	56
第55図 8類 宮之迫式土器(3)	57
第56図 8類 宮之迫式土器(4)	58
第57図 8類 宮之迫式土器(5)	59
第58図 8類 宮之迫式土器(6)	59
第59図 8類 宮之迫式土器(7)	60
第60図 8類 宮之迫式土器(8)	61
第61図 8類 宮之迫式土器(9)	62
第62図 8類 宮之迫式土器(9)	63
第63図 8類 宮之迫式土器(9)	64
第64図 8類 宮之迫式土器(10)	65
第65図 8類 宮之迫式土器(11)	66
第66図 8類 宮之迫式土器(12)	67
第67図 8類 宮之迫式土器(13)	68
第68図 8類 宮之迫式土器(14)	69
第69図 8類 宮之迫式土器(15)	70
第70図 8類 宮之迫式土器(16)	71
第71図 8類 宮之迫式土器(17)	72
第72図 8類 宮之迫式土器(18)	73
第73図 8類 宮之迫式土器(19)	74
第74図 8類 宮之迫式土器(20)	75
第75図 8類 宮之迫式土器(21)	76
第76図 8類 宮之迫式土器(22)	77
第77図 9類 南福寺式土器(1)	78
第78図 9類 南福寺式土器(2)	79
第79図 9類 南福寺式土器(3)	80
第80図 9類 南福寺式土器(4)	81
第81図 10類 出水式土器(1)	82
第82図 10類 出水式土器(2)	83
第83図 10類 出水式土器(3)	84
第84図 10類 出水式土器(4)	85
第85図 11類 指宿式土器(1)	86
第86図 底部 上げ底	87
第87図 底部 脚台	87
第88図 底部 滑石混入	88
第89図 底部 端部文様・木葉底	89
第90図 底部 網代底(1)	90
第91図 底部 網代底(2)	91
第92図 その他網代底	92
第93図 底部 鯨底(1)	92
第94図 底部 鯨底(2)	93
第95図 底部 無文(1)	94
第96図 底部 無文(2)	95
第97図 円盤形土製品	95
第98図 石器分布図(1)	97

挿 図 目 次

第99図	石器分布図 (2)	98	第167図	SK 2・3・4 (土坑)	164
第100図	石器分布図 (3)	98	第168図	SK 5・6・7 (土坑)	165
第101図	石鎌 (1)	99	第169図	ビット群 (P 1~4)	166
第102図	石鎌 (2)	100	第170図	中世の遺物 (1) (土師器・白磁)	167
第103図	石錐 (1)	101	第171図	中世の遺物 (2) (陶磁器・石塔)	168
第104図	石錐 (2)	102	第172図	近世 遺構配置図	169
第105図	石錐 (3)	103	第173図	SK 8 (土坑)	169
第106図	楔形石器 (1)	104	第174図	SD1 (溝状遺構)	170
第107図	楔形石器 (2)	105	第175図	近世の遺物	171
第108図	尖頭状石器	106	第176図	暦年較正年代グラフ	198
第109図	彫器・異形石器	107	第177図	測定 1 暦年較正年代グラフ	202
第110図	搔器・削器類 (1)	108	第178図	測定 1 暦年較正年代グラフ	203
第111図	搔器・削器類 (2)	109	第179図	測定 2 暦年較正年代グラフ	205
第112図	搔器・削器類 (3)	110	第180図	炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)	206
第113図	石匙・二次加工・使用痕剥片	111	第181図	炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)	206
第114図	二次加工・使用痕剥片 (1)	112	第182図	樹種同定結果 (木材 1)	209
第115図	二次加工・使用痕剥片 (2)	113	第183図	樹種同定結果 (木材 2)	210
第116図	二次加工・使用痕剥片 (3)	114	第184図	試料採取箇所	212
第117図	二次加工・使用痕剥片 (4)	115	第185図	植物珪酸体分析結果 1	214
第118図	二次加工・使用痕剥片 (5)	116	第186図	植物珪酸体分析結果 2	215
第119図	石核 I 類 (1)	117	第187図	木佐木原遺跡の植物珪酸体分析	217
第120図	石核 I 類 (2)	118	第188図	テフラ分析結果 2	221
第121図	石核 II 類 (1)	119	第189図	テフラ分析結果 3	222
第122図	石核 II 類 (2)	120	第190図	テフラ分析結果 4	223
第123図	石核 III 類 (1)	121	第191図	テフラ分析結果 5	224
第124図	石核 III 類 (2)	122	第192図	遺跡の模式地質柱状図	225
第125図	石核 IV 類 (1)	123	第193図	アカホヤ (K-Ah) 直下の砂層 (S)	226
第126図	石核 IV 類 (2)	124	第194図	桜島北岳噴出物 P 5 の対比	226
第127図	磨製石斧 (1)	125	第195図	左: 覆瓦構造 矢印は噴砂脈 右: モールトラック状構造	227
第128図	磨製石斧 (2)	126	第196図	砂層中の火山ガラスの化学組成	228
第129図	磨製石斧 (3)	127	第197図	噴砂脈の平面と断面	228
第130図	磨製石斧 (4)	128	第198図	変容形・折衷形土器	230
第131図	磨製石斧 (5)	129	第199図	木佐木原遺跡の土器変遷・遺跡分布図	231
第132図	磨製石斧 (6)	130	第200図	遺跡の残存状況	232
第133図	磨製石斧 (7)	131			
第134図	磨製石斧 (8)	132			
第135図	磨石・敲石 (1)	133			
第136図	磨石・敲石 (2)	134			
第137図	磨石・敲石 (3)	135			
第138図	磨石・敲石 (4)・台石・石皿 (1)	136			
第139図	台石・石皿 (2)・砥石	137			
第140図	二次加工剥片・使用痕剥片	138			
第141図	その他の石器類	139			
第142図	軽石製品 (1)	140			
第143図	軽石製品 (2)	141			
第144図	軽石製品 (3)	142			
第145図	軽石製品 (4)	143			
第146図	軽石製品 (5)	144			
第147図	軽石製品 (6)	145			
第148図	軽石製品 (7)	146			
第149図	軽石製品 (8)	147			
第150図	軽石製品 (9)	148			
第151図	軽石製品 (10)	149			
第152図	軽石製品 (11)	150			
第153図	軽石製品 (12)	151			
第154図	軽石製品 (13)	152			
第155図	軽石製品 (14)	153			
第156図	弥生・古墳時代出土遺物	155			
第157図	古代 遺構配置図	155			
第158図	SL 2 遺構・出土遺物	156			
第159図	SL 3 遺構・出土遺物	156			
第160図	古代 出土遺物 (1)	158			
第161図	古代 出土遺物 (2)	159			
第162図	中世 遺構配置図	160			
第163図	SB 1 (掘立柱建物跡)	161			
第164図	SB 2 (掘立柱建物跡)	161			
第165図	SI 1 (竪穴建物跡)	162			
第166図	SL 4 (カマド状遺構)	163			

表 目 次

<p>第1表 周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・7</p> <p>第2表 各地点土層注記一覧表・・・・・・・・・・・・・10</p> <p>第3表 縄文時代 土器分類表・・・・・・・・・・・・・18</p> <p>第4表 底部種別総数・・・・・・・・・・・・・89</p> <p>第5表 掲載石器一覧(製品)・・・・・・・・・・・・・96</p> <p>第6表 石器総数一覧表・・・・・・・・・・・・・96</p> <p>第7表 石核分類表・・・・・・・・・・・・・116</p> <p>第8表 縄文土器観察表(1)・・・・・・・・・・・・・172</p> <p>第9表 縄文土器観察表(2)・・・・・・・・・・・・・173</p> <p>第10表 縄文土器観察表(3)・・・・・・・・・・・・・174</p> <p>第11表 縄文土器観察表(4)・・・・・・・・・・・・・175</p> <p>第12表 縄文土器観察表(5)・・・・・・・・・・・・・176</p> <p>第13表 縄文土器観察表(6)・・・・・・・・・・・・・177</p> <p>第14表 縄文土器観察表(7)・・・・・・・・・・・・・178</p> <p>第15表 縄文土器観察表(8)・・・・・・・・・・・・・179</p> <p>第16表 縄文土器観察表(9)・・・・・・・・・・・・・180</p> <p>第17表 縄文土器観察表(10)・・・・・・・・・・・・・181</p> <p>第18表 縄文土器観察表(11)・・・・・・・・・・・・・182</p> <p>第19表 縄文土器観察表(12)・・・・・・・・・・・・・183</p> <p>第20表 縄文土器観察表(13)・・・・・・・・・・・・・184</p> <p>第21表 縄文土器観察表(14)・・・・・・・・・・・・・185</p> <p>第22表 縄文土器観察表(15)・・・・・・・・・・・・・186</p> <p>第23表 縄文土器観察表(16)・・・・・・・・・・・・・187</p> <p>第24表 縄文土器観察表(17)・・・・・・・・・・・・・188</p> <p>第25表 縄文土器観察表(18)・・・・・・・・・・・・・189</p> <p>第26表 縄文土器観察表(19)・・・・・・・・・・・・・189</p> <p>第27表 縄文土器観察表(20)・・・・・・・・・・・・・189</p>	<p>第28表 縄文土器観察表(21)・・・・・・・・・・・・・190</p> <p>第29表 縄文土器観察表(22)・・・・・・・・・・・・・190</p> <p>第30表 縄文土器観察表(23)・・・・・・・・・・・・・191</p> <p>第31表 縄文土器観察表(24)・・・・・・・・・・・・・191</p> <p>第32表 縄文土器観察表(25)・・・・・・・・・・・・・192</p> <p>第33表 縄文土器観察表(26)・・・・・・・・・・・・・192</p> <p>第34表 縄文土器観察表(27)・・・・・・・・・・・・・193</p> <p>第35表 縄文土器観察表(28)・・・・・・・・・・・・・193</p> <p>第36表 縄文土器観察表(29)・・・・・・・・・・・・・194</p> <p>第37表 縄文土器観察表(30)・・・・・・・・・・・・・194</p> <p>第38表 弥生・古墳時代遺物観察表・・・・・・・・・・・・・194</p> <p>第39表 古代・中世遺構内遺物観察表・・・・・・・・・・・・・194</p> <p>第40表 古代・中世遺物観察表(1)・・・・・・・・・・・・・195</p> <p>第41表 古代・中世遺物観察表(2)・・・・・・・・・・・・・196</p> <p>第42表 古代・中世土製品・石塔観察表・・・・・・・・・・・・・196</p> <p>第43表 放射性炭素年代測定分析試料・・・・・・・・・・・・・197</p> <p>第44表 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・197</p> <p>第45表 測定1 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・199</p> <p>第46表 測定1 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・200</p> <p>第47表 測定1 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・200</p> <p>第48表 測定1 炭素・窒素安定同位体比及び含有量・・・・・・・・・・・・・200</p> <p>第49表 測定2 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・204</p> <p>第50表 測定2 放射性炭素年代測定分析結果・・・・・・・・・・・・・204</p> <p>第51表 測定2 炭素・窒素安定同位体比及び含有量・・・・・・・・・・・・・204</p> <p>第52表 樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・208</p> <p>第53表 植物珪酸体分析結果3・・・・・・・・・・・・・216</p> <p>第54表 テフラ分析結果1・・・・・・・・・・・・・219</p>
--	--

写真図版

<p>写真図版1 調査写真1</p> <p>写真図版2 調査写真2</p> <p>写真図版3 調査写真3</p> <p>写真図版4 調査写真4</p> <p>写真図版5 調査写真5</p> <p>写真図版6 調査写真6</p> <p>写真図版7 縄文土器1</p> <p>写真図版8 縄文土器2</p> <p>写真図版9 縄文土器3</p> <p>写真図版10 縄文土器4</p> <p>写真図版11 縄文土器5</p> <p>写真図版12 縄文土器6</p> <p>写真図版13 縄文土器7</p> <p>写真図版14 縄文土器8</p> <p>写真図版15 縄文土器9</p> <p>写真図版16 縄文土器10</p> <p>写真図版17 縄文土器11</p> <p>写真図版18 縄文土器12</p> <p>写真図版19 縄文土器13</p> <p>写真図版20 縄文土器14</p> <p>写真図版21 縄文土器15</p> <p>写真図版22 縄文土器16</p> <p>写真図版23 縄文土器17</p> <p>写真図版24 縄文土器18</p> <p>写真図版25 縄文土器19</p> <p>写真図版26 縄文土器20</p> <p>写真図版27 縄文土器21</p> <p>写真図版28 縄文土器22</p> <p>写真図版29 縄文土器23</p> <p>写真図版30 縄文土器24</p> <p>写真図版31 縄文土器25</p> <p>写真図版32 縄文土器26</p> <p>写真図版33 縄文土器27</p> <p>写真図版34 縄文土器28</p> <p>写真図版35 縄文土器29</p> <p>写真図版36 縄文土器30</p> <p>写真図版37 縄文土器31</p> <p>写真図版38 縄文土器32</p> <p>写真図版39 縄文土器33</p>	<p>写真図版40 縄文土器34</p> <p>写真図版41 縄文土器35</p> <p>写真図版42 縄文土器36</p> <p>写真図版43 縄文土器37</p> <p>写真図版44 縄文土器38</p> <p>写真図版45 縄文土器39</p> <p>写真図版46 縄文土器40</p> <p>写真図版47 縄文土器41</p> <p>写真図版48 縄文土器42</p> <p>写真図版49 縄文土器43</p> <p>写真図版50 縄文土器44</p> <p>写真図版51 縄文土器1 石鏃</p> <p>写真図版52 縄文土器2 石鏃</p> <p>写真図版53 縄文土器3 楔形石器</p> <p>写真図版54 縄文土器4 尖頭状石器・彫器・異形石器</p> <p>写真図版55 縄文土器5 搔器・削器</p> <p>写真図版56 縄文土器6 石匙・搔器・削器</p> <p>写真図版57 縄文土器7 二次加工・使用痕跡片</p> <p>写真図版58 縄文土器8 二次加工・使用痕跡片</p> <p>写真図版59 縄文土器9 石核</p> <p>写真図版60 縄文土器10 磨製石斧1</p> <p>写真図版61 縄文土器11 磨製石斧2</p> <p>写真図版62 縄文土器12 磨製石斧3</p> <p>写真図版63 縄文土器13 磨石・敲石1</p> <p>写真図版64 縄文土器14 磨石・敲石2</p> <p>写真図版65 縄文土器15 その他</p> <p>写真図版66 縄文土器16 赤色顔料付着石器</p> <p>写真図版67 縄文土器17 台石・石皿</p> <p>写真図版68 縄文土器18 軽石製品1</p> <p>写真図版69 縄文土器19 軽石製品2</p> <p>写真図版70 縄文土器20 軽石製品3</p> <p>写真図版71 縄文土器21 軽石製品4</p> <p>写真図版72 弥生・古墳, 古代の遺物</p> <p>写真図版73 古代の遺物</p> <p>写真図版74 古代の遺物</p> <p>写真図版75 中世の遺物</p> <p>写真図版76 中世の遺物</p> <p>写真図版77 中世・近世の遺物</p>
--	--

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

一般県道伊集院蒲生溝辺線改築については、事業実施に先立つ照会により対象地に木佐木原遺跡が所在することが判明し、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）と鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）はその取扱いについて協議を行った。

この結果をもとに、道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、県立埋文センター）で協議した結果、対象区域内の遺跡の有無、範囲と性格を把握するために当該地域において試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、平成26年2月と平成26年7月の2回、県文化財課が実施した。試掘トレンチは6か所を設定し、内2か所（3T・5T）のトレンチで遺物を確認した。

そこで、道路建設課・県文化財課・県立埋文センターは再度協議を行い、記録保存のための本調査を行うこととなり、平成27・28年度に実施した。

平成27年度の調査は、7月3日～9月28日（実働45日）の3か月実施した。当初計画では、表面積680㎡（延面積2,040㎡）の調査を行う予定であったが、①旧地形が非常に複雑で層堆積や地形の把握に時間を要したこと、②縄文時代中・後期の包含層の層厚が想定より1.3倍厚く、遺物密度が非常に高かったことから、県文化財課と協議を行い、表面積680㎡（延面積810㎡）の調査計画に変更した。

平成28年度は平成27年度の続きから調査を行った。平成28年度の調査期間は5月9日～11月11日（実働103日）である。調査計画では、表面積2,050㎡（延面積5,940㎡）を行う予定であった。調査範囲の確認のため、調査初期段階で、E・F-13・14区に確認トレンチを設定し、試掘を行ったところ遺物・遺構が確認されなかったことから、調査区を表面積1,650㎡、延面積4,740㎡に変更し、本調査を実施した。

第 2 節 調査の体制と経過

1 試掘調査

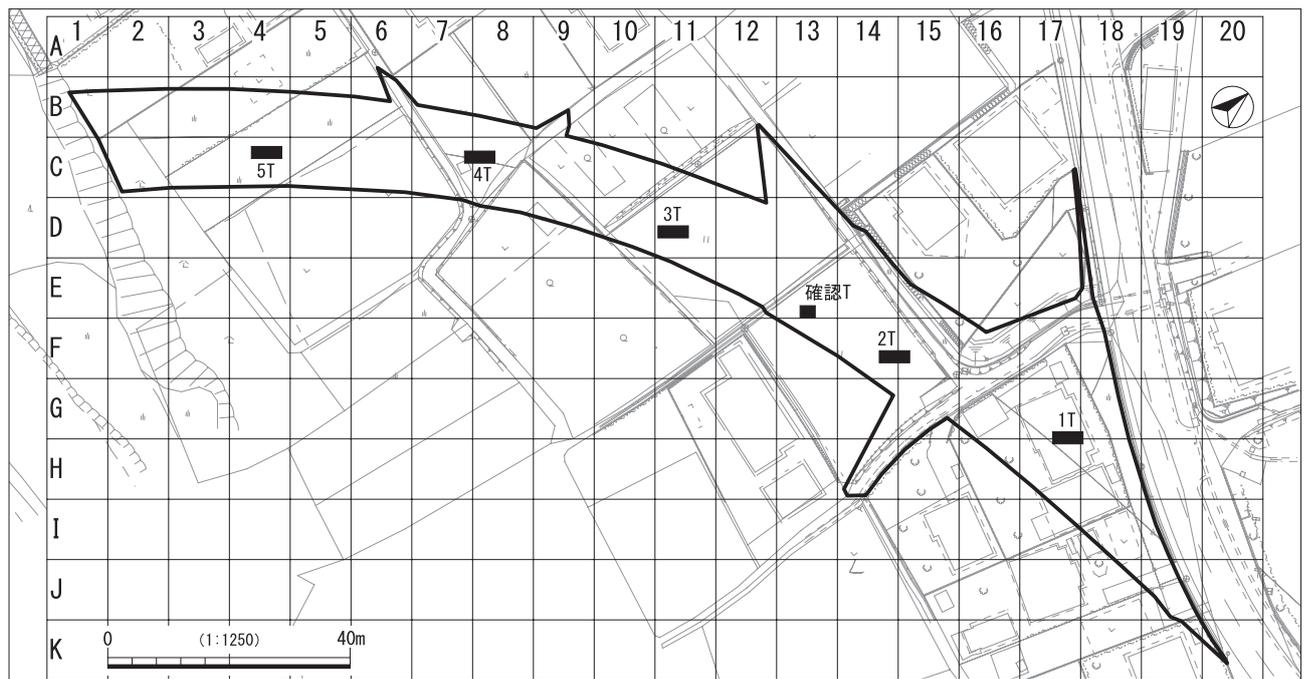
平成25・26年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 始良・伊佐地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査担当	県教育庁文化財課 文化財主事	馬籠 亮道
	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事	吉元 輝幸
調査協力	始良市教育委員会社会教育課 主任主査	深野 信之
	始良・伊佐地域振興局 土木建築課技術主査	脇 俊一

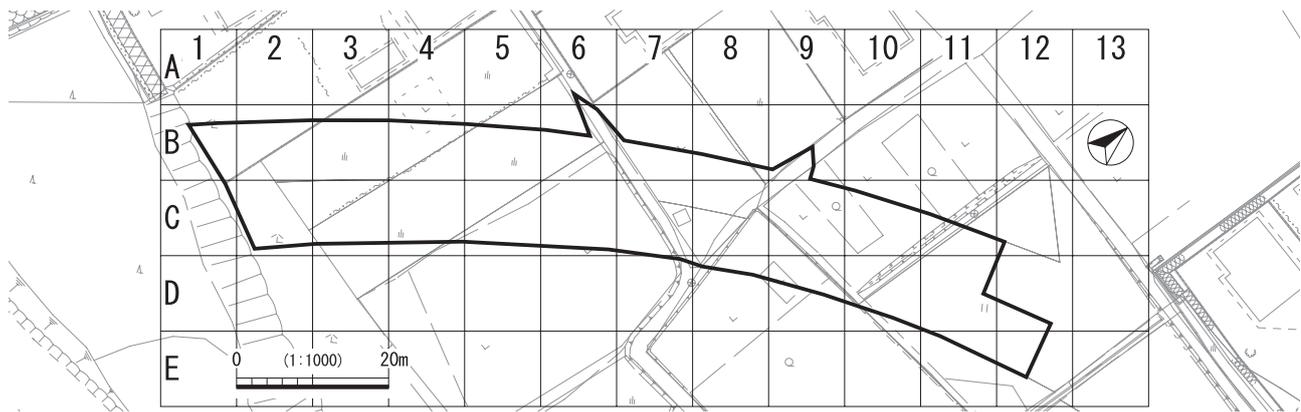
2 本調査

平成27年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 始良・伊佐地域振興局
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター



第 1 図 試掘トレンチ配置図



第2図 本調査範囲図

調査企画	所長 鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼調査課長 総務課長 第二調査係長	福山 徳治 前迫 亮一 高田 浩 今村 敏照	ンチ設定・掘り下げ、B-5区炉跡遺構検出状況写真撮影、インターンシップ（5日）、埋蔵文化財職員養成講座：初級講座（19日）、始良地区小・中学生発掘体験・始良地区新規採用教職員現場見学（26日）
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 文化財研究員	本高 謙治 眞邊 彩	9月 小グリッドメッシュ設定、B・C-2区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、B・C-2・3区東西先行トレンチ掘り下げ、C-4区遺物集中区周辺精査、遺物取上、B・C-2区SK01~03、C-3区SK04~07検出状況写真撮影・調査、空撮
事務担当	総務係長 主 事	脇野 幸一 丸野 将輝	

平成28年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 始良・伊佐地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査企画	所長 次長兼調査課長 総務課長 第二調査係長	福山 徳治 前迫 亮一 高田 浩 今村 敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 文化財研究員	本高 謙治 黒木 梨絵
事務担当	総務係長	脇野 幸一
調査指導	鹿児島大学名誉教授	大木 公彦

平成28年度

4月	表土剥ぎ
5月	環境整備、B・C-3~6区小グリッド設定、Ⅱc・Ⅲ層掘り下げ、遺物取り上げ、SL01検出・掘り下げ・実測、SI01掘り下げ、E-12区確認トレンチ調査、C-4・5区ピット調査
6月	B・C-3~6区Ⅱc・Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺物取り上げ、C-4・5区ピット群調査・実測、SK07・08検出・調査・実測、SL01掘り下げ・実測・写真撮影、SI01掘り下げ・実測・写真撮影・埋土ウォーターセパレーション、B-5・6区溝状遺構検出・実測
7月	B・C-7・8区Ⅱb層掘り下げ、B・C-3~6区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺物取り上げ、C-4~6区下層確認Tr掘り下げ、SI01炭化木取り上げ作業、B-4・5区土層断面図実測、B・C-7~9区グリッド杭打設、D・E-9~12区表土剥ぎ、Ⅱ層掘り下げ

3 調査の経過

平成27年度（7月3日~9月28日）

7月 環境整備、測量杭打設、B・C-1~5区Ⅱa・Ⅲ層掘り下げ、精査、遺物取上、C-3~5区先行トレンチ（下層確認）掘り下げ

8月 B・C-4・5区Ⅱa・b層掘り下げ、遺物取上、C-5区ピット1検出状況写真撮影、調査区範囲測量、C-5区Ⅳ層上面掘り下げ、米丸スコリア堆積状況確認、B-4区先行トレンチ焼土検出、C-5区下層確認トレ

8月 B・C-4~6区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺物取り上げ、D・E-9~12区Ⅲ・Ⅱ層取り上げ、遺物取り上げ、B・C-6区南北ベルト土層断面図、B・C-5区中央トレンチ延長掘り下げ、SK10・11検出・調査・実測、D・F-9~13区グリッド杭打設、B・C-4~6区地形図実測、調査区全景写真撮影、始良市体験発掘、イン

ターンシップ（5・18日）

9月 B・C-7・8区Ⅳ層掘り下げ，遺物取り上げ，
C・D-9～12区Ⅲ・Ⅱ層取り上げ，遺物取り上げ，グ
リッド杭打設，SK11実測，C-10区表土剥ぎ，B・C
-4区噴砂跡実測，SL04検出・調査・実測

10月 C・D-9～11区Ⅱ・Ⅲ層取り上げ，遺物取り上
げ，SK11実測，SL04・05検出・調査・実測，C・D
-8・9区地形図測量，蒲生小学校見学（6日），空撮
（7日），土層剥ぎ取り（13日）

11月 B・C-8～11区調査区全景写真撮影，Ⅱ・Ⅲ
層取り上げ，遺物取り上げ，土層断面図実測（調査区北
壁・南壁・中央トレンチ）

第3節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成29
～31年（令和元年度）にかけて県立埋蔵文化財センター
で行った。

出土遺物の水洗い，注記，包含層遺物の仕分け，接合
作業，遺物の実測，図面のトレース・レイアウトや遺物
写真の撮影，原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報
告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

1 作成体制（平成29年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 堂込 秀人
調査企画	次長兼調査課長 大久保浩二
	総務課長 高田 浩
	調査課主任文化財主事
	兼第一調査係長 中村 和美
作成担当	文化財主事 山崎 克之
	文化財主事 池田裕一郎
事務担当	総務係長 草水美穂子
整理指導	国立歴史民俗博物館名誉教授 春成 秀爾

2 作成体制（平成30年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 堂込 秀人
調査企画	次長兼調査課長 大久保浩二
	総務課長 高田 浩
	調査課主任文化財主事
	兼第二調査係長 宗岡 克英
作成担当	文化財研究員 黒木 梨絵

	文化財研究員 宮崎 大和
事務担当	総務係長 草水美穂子
整理指導	鹿児島県考古学会会長 本田 道輝
	志布志市教育委員会 相美伊久雄

3 作成体制（平成31年度・令和元年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間口 誠
	調査課長 中村 和美
	調査課主任文化財主事
	兼第一調査係長 宗岡 克英
作成担当	文化財主事 黒木 梨絵
	文化財研究員 宮崎 大和
事務担当	主幹兼総務係長 草水美穂子
整理指導	熊本大学埋蔵文化財調査センター 大坪 志子
	准教授

報告書作成指導委員会

令和元年6月11日
中村課長ほか7名

令和元年8月6日
中村課長ほか7名

令和元年10月2日
中村課長ほか7名

令和元年11月26日
中村課長ほか7名

報告書作成検討委員会
令和元年11月27日
前迫所長ほか6名

第Ⅱ章 歴史的・地理的環境

第1節 地理的環境

木佐木原遺跡が所在する始良市蒲生町は、鹿児島湾奥の西部の鹿児島県本土の中央部にあたる。始良市の最西部にあり、北緯31° 45' 32"、東緯130° 34' 17"に位置し、東西11.7km、南北15.0km、総面積79.47km²である。

町の地形はほぼ三角形を呈し、三方を川に囲まれている。西北には標高400~500mの山岳が連なり、東南に向かってなだらかに傾斜して平地が続く。東南の平地は前郷川や別府川が流れ、それらは下久徳で合流し、錦江湾に続いている。

蒲生町の山地・丘陵の間の台地は、複数の火砕流堆積物から構成されている。地表面は、最も新しい入戸火砕流堆積物である。蒲生町東南部の地質は、角閃石安山岩や国分層群が主であり、標高150m以上は軽石層で形成されている。俗に「イワ」といわれる岩層が山岳の間どころどころに露出しており、この層は蒲生層と呼ばれる海成層である。

また、始良市は始良カルデラ火山区の一部で構成されており、蒲生地区とその周辺は約8,100年前に噴火した米丸マール、住吉池マール、これらより古い更新世に噴火した青敷山火砕丘からなる単成火山群が分布している。木佐木原遺跡の北西に位置する米丸マールは蒲生町米丸にある直径約1kmの火口跡で、現在は円形の窪地で平坦な盆地となっている。北東に位置する住吉池マールは、蒲生町住吉にある直径550m、周囲3.2km、面積0.15km²の火口湖である。

蒲生町の中心部は、米丸マール・住吉池マール噴出物からなる低台地上にあり、これらの火山周辺にはメサ状（卓状）地形がみられる。どちらのマールもランクCの活火山として指定されている。

これらの堆積物は、蒲生町南東部の川東、北下、漆下、大迫、中郷、堂ノ平、上畑南部付近および住吉池周辺に分布している。一般に粗粒火山灰および径3cm以下のスコリアからなっており、蒲生八幡神社東の露頭では約10m堆積している。木佐木原遺跡の基盤層も米丸マール噴出物堆積層であった。アカホヤ火山灰層より下位に堆積しており、粗粒火山灰の上に硬いスコリア層が厚く堆積して岩盤層のようにになっている（詳細は第三章第2節層序を参照）。

この米丸マールと住吉池マールは、約8,100年前に噴火しており、当時の海域の汀線近くにマールがあったために、マグマ水蒸気噴火が起こったとされている。縄文海進のピークは約6,000年前だが、湾奥部沿岸域はその後約10m隆起したとされる（森脇ほか1986、大木ほか2001）。

第2節 歴史的環境

始良市の遺跡は旧石器～近世まで幅広く分布している。

旧石器時代～縄文時代草創期にかけては、蒲生町漆に所在する竹牟礼遺跡で槍形尖頭器が出土している。また草創期の集落遺跡として始良市西餅田に所在する建昌城跡があり、南九州初期の縄文文化を解明する上で重要な遺跡である。

縄文時代は蒲生町漆に所在する嶺前遺跡が畑耕作時に貝殻条痕文系土器が出土しており、楠ヶ宇都遺跡では石斧と早期貝殻文円筒土器（前平式・桑ノ丸式）や山形押型文土器が出土している（新東1989）。竹牟礼遺跡でも縄文早期・前期・中期・晩期土器が出土している。出土量は少ないが、前期土器（曾畑系）の一部に滑石混入土器片が含まれていたり、中期の阿高式の大片が出土している。

古墳時代では、蒲生町下久徳に所在する下原田遺跡で成川式土器や丹塗の高坏等が出土している。春花遺跡では多量の成川式土器（辻堂原～笹貫式段階）が出土しており、6世紀代の集落跡の可能性が指摘されている。

古代では、古代駅家と推定されていた下久徳に所在する藤坂・禁中遺跡で掘立柱建物跡2棟、溝3条が検出されたほか、鞆の羽口や墨書土器が出土している。

また、別府川の東岸に位置する始良市船津の春花地区遺跡群（柳ガ迫遺跡、城ヶ崎遺跡、外園遺跡）は、古代蒲生駅家もしくは桑原郡衛の関連遺跡という可能性が指摘されている。

城ヶ崎遺跡では、路面幅3.7~4.7m、道路幅5.9~6.6mの道路状遺構が検出された。土師器や越州窯系青磁碗、石製腰帯具、鞆の羽口、北宋銭が出土している。外園遺跡では、掘立柱建物跡や井戸のほか、土師器焼成遺構（8世紀後半～9世紀前半）が検出されており、官衛に付属する土器生産工房であった可能性が指摘されている。

柳ガ迫遺跡は、掘立柱建物跡を構成する柱穴の規模が大きいことや、「足」などのヘラ書き土師器の多量出土、希少な中国陶磁器（越州窯系青磁、白磁、長沙窯系水注）のほか石製腰帯具、焼塩土器等遺物の出土から、一般的な集落ではなく官衛跡の可能性が高いと推定されている（8世紀前半期～10世紀代）。

中世では、蒲生町の長緑遺跡で溝状遺構が検出され、土師器、紡錘車、須恵器、青磁等が出土している。

下久徳に所在する三池原遺跡では、鎌倉時代の溝状遺構と土坑のほか、土師器、須恵器、青白磁等が出土した。古代官衛跡でもある外園遺跡では、掘立柱建物跡とともに8世紀末～16世紀後半までの遺物が出土しているが、おおよそ13世紀中ごろから遺物が減少傾向にある。

また、後郷川南岸の標高162.5mの龍ヶ山にある蒲生城跡は、山頂付近に本丸、北尾根に二の丸、麓に三の丸

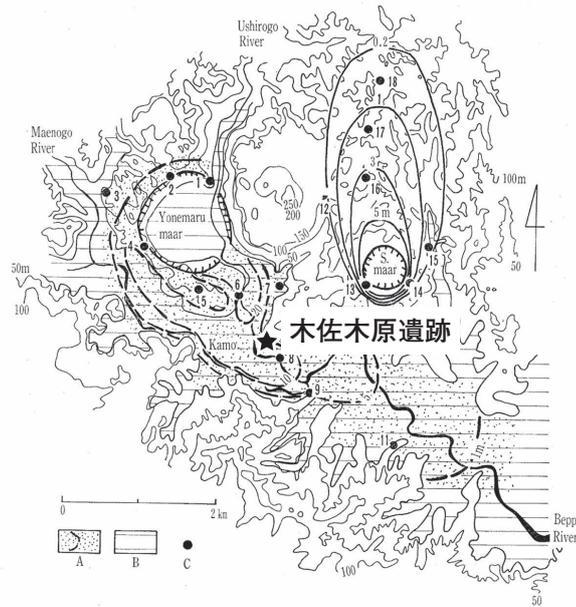


Fig. 2 Distribution of Yonemaru and Sumiyoshi-ike tephra formations.
 A: Distribution and isopachs in m of Yonemaru base surge deposit, B: Lowland,
 C: Localities of columnar sections shown in Fig. 3, S. maar: Sumiyoshi-ike maar.

第3図 米丸マール・住吉マールの形成 (森脇ほか1986引用・改変)

を配し、その周辺に複数の曲輪群が構成される中世城郭である。急崖の阿多火砕流堆積物や入戸火砕流堆積物（シラス）の崖を利用して築城しており、城の東部には溶結凝灰岩の切り立った崖に多くの梵字が刻まれている（「竜ヶ城磨崖一千字梵字仏蹟」（市指定史跡））。

蒲生城は、1123（保安4）年蒲生舜清によって築城され、蒲生氏は代々蒲生城を居城とした。18代蒲生範清は、渋谷祁答院良重と結んで島津貴久と戦ったが、1556年（弘治2）島津貴久によって、蒲生城が攻められ、籠城していた蒲生氏は城に火を放って祁答院氏を頼って逃亡した。

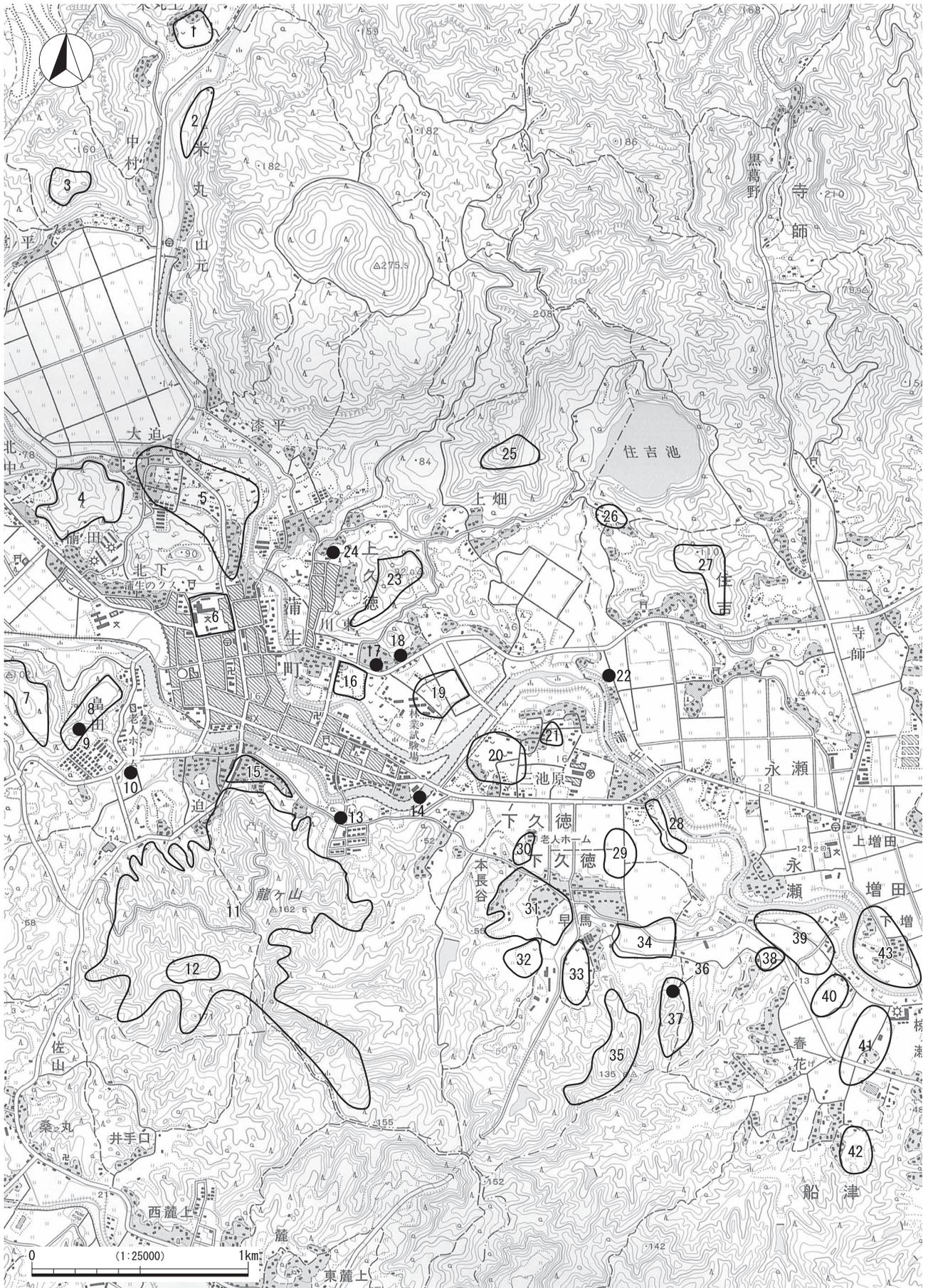
元和の一国一城令後は、薩摩藩の外城制度下に置かれた。蒲生範清・蒲生家臣団が宮之城に逃れた後は、島津義弘が腹心の部下を88人、漆に50人移したとされる（『蒲生野史』、『三国名勝図会』）。慶長～寛永期には現在の蒲生武家屋敷の場所に地頭所・地頭仮屋が置かれ、麓（武士集落）が形成されたといわれる。1699年（元禄12）には『蒲生総廻縄引帳』、1726年（享保11年）には『蒲生衆中屋敷帳』が作成されている（『蒲生御仮屋文書』）。なお、2019年（令和元）5月20日には蒲生麓を含む市内9つの文化財（蒲生麓、蒲生城跡、蒲生御仮屋門、御仮屋犬楨（一ツ葉）、蒲生八幡神社、蒲生のクス、太鼓踊り、蒲生の紙漉き、掛橋坂）が日本遺産（「薩摩の武士が生まれた町—武家屋敷群『麓』を歩く—」）に選定された。

1877年（明治10）の西南戦争時には、蒲生は戦場となる。4月29日には官軍が蒲生郷・重富郷・帖佐郷が入り、白煙硝90樽が住吉で見つかり、住吉池に投げ込まれてしまった。また、米丸村に薩軍の砲弾製造所があり、臼砲を製造していた。6～9月にかけて蒲生で攻防戦が繰り返

らされたが、薩軍が城山で籠城を決め、最終決戦を行ったことで、蒲生は焦土とはならなかったとされる。

【参考文献】

- 始良市誌編集委員会2019『始良市誌 第1巻先史・古代編・自然編』
- 始良市教育委員会2011『柳ガ迫遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 始良市教育委員会2012『城ヶ崎遺跡・外園遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 鹿児島県始良町教育委員会2004『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 森脇 広・町田 洋・初見祐一・松島義章(1986)「鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気噴火とこれに影響を与えた縄文海進」『地学雑誌』95
- 森脇 広・松島義章・町田 洋・岩井雅夫・新井房夫・藤原治 2002「鹿児島湾北西岸平野における縄文海進最盛期以降の地形発達」『第四紀研究』41-4
- 大木公彦・奥野充・三木靖・二之宮ますみ・桑代勲2001「『続日本紀』の噴火記録と隼人三島」『日本第四紀学会講演要旨集』31
- 新東晃一1989「蒲生町の縄文土器」『南九州縄文通信』2, 南九州縄文研究会
- 蒲生郷土誌編さん委員会1991『蒲生郷土誌』
- 蒲生町教育委員会1994『藤坂・禁中遺跡』
- 蒲生町教育委員会1995『竹牟礼遺跡』
- 蒲生町教育委員会1999『長緑遺跡』
- 蒲生町教育委員会2001『三池原遺跡』
- 蒲生町教育委員会2001『下原田遺跡』



第4図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な出土遺物	備考	遺跡GIS
1	山口田	蒲生町米丸・山口田	台地	古代,中世,近世			H25-225-203-0
2	平之城跡	蒲生町米丸・米丸上	丘陵	中世			H25-225-188-0
3	堂ノ平	蒲生町米丸・堂ノ平	山地	中世			H25-225-189-0
4	菱刈陣跡	蒲生町米丸・大迫～北・陣ヶ丘	丘陵	中世			H25-225-187-0
5	宮内	蒲生町上久徳・宮内	丘陵	古墳時代,古代			H25-225-205-0
6	永興寺跡	蒲生町上久徳・宮内	平地	中世,近世			H25-225-173-0
7	平城跡	蒲生町白男・上之段	丘陵	中世			H25-225-186-0
8	向城跡	蒲生町白男・上之段	丘陵	中世			H25-225-185-0
9	竜譚寺跡	蒲生町久末・島田	台地	中世			H25-225-178-0
10	重栄寺跡	蒲生町下久徳・迫東	台地	近世			H25-225-179-0
11	竜ヶ城跡 (蒲生城跡)	蒲生町久末・迫上～下久徳・早馬	山地	古代,中世	青磁器, 土師器・皿	蒲生町教育委員会 1992 『竹牟礼遺跡/蒲生城二ノ丸跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書1	H25-225-180-0
12	荒平陣跡	蒲生町久末・迫上	山地	中世			H25-225-181-0
13	千手院跡	蒲生町上久徳・迫東	平地	中世			H25-225-174-0
14	蛙ヶ城跡	蒲生町下久徳蛙ヶ城	平地	中世			H25-225-216-0
15	蒲生麓集落跡	蒲生町久末字松木田	平地	近世			H25-225-233-0
16	木佐木原	蒲生町上久徳字木佐木原	平地	縄文時代(中後期),古代・中世・近世	縄文時代中・後期土器(春日式, 大平式, 並木式, 阿高式, 南福寺式, 宮之迫式), 石器, 古代・中世, 土師器, 中国陶磁器ほか	本報告書	H25-225-232-0
17	正孝庵跡	蒲生町上久徳・川東前	台地	中世			H25-225-175-0
18	神護院跡	蒲生町上久徳・川東前	台地	近世			H25-225-176-0
19	剣御前	蒲生町上久徳・川東前	山地	古墳時代,古代			H25-225-206-0
20	三池原	蒲生町下久徳・三池原	平地	古代	土師器, 須恵器, 青磁器, 陶器	蒲生町教育委員会 2001 『三池原遺跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書5	H25-225-207-0
21	三池原Ⅱ	蒲生町下久徳字三池原	平地	古代,中世			H25-225-230-0
22	住吉	住吉字竹下	平地	縄文時代,古墳時代			H25-225-103-0
23	貝皿陣跡	蒲生町上久徳・川東前	丘陵	中世			H25-225-184-0
24	法寿寺跡	蒲生町上久徳・川東中	台地	中世			H25-225-172-0
25	馬立陣跡	蒲生町上久徳・川東上	山地	中世			H25-225-183-0
26	山下	住吉字山下	山地	古代,中世,近世			H25-225-154-0
27	高城跡	住吉字上高城・下高城	山地	中世			H25-225-120-0
28	下川原	蒲生町下久徳字下川原	平地	中世			H25-225-229-0
29	下原田	蒲生町下久徳・原田	平地	古墳時代,古代	成川式土器, 丹塗り高杯, 土師器, 土鏡, 須恵器, 陶器	蒲生町教育委員会 2001 『下原田遺跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書6	H25-225-214-0
30	下久徳	蒲生町下久徳・下久徳	台地	弥生時代			H25-225-170-0
31	樋之口	蒲生町下久徳字樋之口	平地	古代			H25-225-231-0
32	藤坂・禁中	蒲生町下久徳・早馬	台地	古代			H25-225-213-0
33	長緑	蒲生町下久徳・長緑	台地	古墳時代	土師器, 土師甕, 紡錘車, 須恵器, 青磁器, 陶器	蒲生町教育委員会 1999 『長緑遺跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書4	H25-225-208-0
34	平田	蒲生町下久徳字平田及び笛竹	平地	古代,中世			H25-225-228-0
35	尼ヶ城跡	蒲生町下久徳・下久徳下	山地	中世			H25-225-182-0
36	下久徳下	蒲生町下久徳・下久徳下	平地	弥生時代			H25-225-171-0
37	城ヶ崎跡	蒲生町下久徳・下久徳下	丘陵	中世			H25-225-200-0
38	城ヶ崎	船津字城ヶ崎	台地	古墳時代,古代,中世,近世	土師器, 須恵器, 越州窯系青磁, 白磁, 石製腰帯具, 鉄製品, 銭貨(銅銭「景□□宝」)	古代駅路 始良市教育委員会 2012 『城ヶ崎遺跡・外園遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書3	H25-225-142-0
39	外園	船津字外園	台地	古墳時代,古代,中世	土師器, 須恵器, 越州窯系・龍泉窯系・同安窯系青磁, 白磁, 青白磁, 鉄製品, 焼埴土器, 銭貨(銅銭「崇寧重宝」)	古代駅路・別府川に面して営まれた集落跡 始良市教育委員会 2012 『城ヶ崎遺跡・外園遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書3	H25-225-227-0
40	柳方迫	船津字柳方迫	台地	古代	土師器, 須恵器, 越州窯系青磁, 白磁, 長沙窯系水注, 石製腰帯具ほか	工房跡 始良市教育委員会 2011 『柳方迫遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書1	H25-225-226-0
41	春花	船津字下宮田・一町島ほか	台地	古墳時代,古代,中世,近世			H25-225-144-0
42	二俣	船津字二俣	山地	古墳時代,古代,中世,近世			H25-225-145-0
43	川畑	船津字川畑・郷屋ほか	平地	古墳時代,古代,中世,近世			H25-225-143-0

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査グリッドは、センター杭No. 58 (X=-137254.639, Y=-40080.316, B・C-2・3のグリッド杭)とNo. 59 (X=-137238.822, Y=-40068.084, B・C-4・5のグリッド杭)を基準に10m間隔のグリッドを設定した。

表土除去は、重機(バックホウ)を使用し、遺物・遺構の検出や精査は人力による掘削を行った。平成27年度は、B・C-1～5までの表土を除去し、掘削を行ったが、土層の堆積状況が複雑(米丸マールスコリア層(Ⅷ層)の堆積状況や旧地形の把握が困難)であったことから、調査区中央にトレンチを設定し、先行して掘削を行い、層堆積や旧地形の把握を行うこととした。その結果、基盤層としてⅧ層が調査区に広く堆積し、B・C-2・3区とB・C-2・3～5区にかけて米丸マールスコリア層(Ⅷ層)が深く窪んだ谷部に遺物包含層が堆積していることを確認した。

特にⅢ・Ⅳ層(縄文時代包含層)が厚く、遺物密度も非常に高かったため、平成27年度の調査は表面積680㎡、延面積810㎡で調査を終了した。

平成28年度は、平成27年度の続きから調査をはじめ、B・C-2～5区のⅢ・Ⅳ層の掘り下げおよびB・C-5～8区の表土除去を行った。B・C-2～5区は、地点によって層堆積が異なったため、調査区の北・南壁沿いに下層確認トレンチを設定し、包含層の厚さを確認しながら、掘り下げを行った。B・C-1～8区の調査終了後、C・D-9～12区の表土を除去し、包含層の調査を行った。

当初、調査区は14区までを予定していたが、試掘調査でF-14・15区の1～8区の調査終了後、C・D-9トレンチ(2T)で包含層が確認されなかったこと、さらに調査前にE-13区に確認トレンチを設定し、確認を行ったところ遺物・遺構が確認されなかったことから、本調査の範囲をC・D-12区までとした。

Ⅲ・Ⅳ層の遺物包含層から出土した遺物の取り上げについては、基本的にはトータルステーションでの点上げを行ったが、出土量が膨大であったため、B・C-3～5区では、1グリッドに1×1mの小グリッド、C・D-9～11区は5×5mの小グリッドを設定し、各小グリッド内で層位別一括して取り上げた。B・C-5～8区はⅡ～Ⅳ層が浅く、表土下約50cmでⅧ層が検出されたことから、層ごとにグリッド一括で取り上げた。

また、調査区の層堆積が複雑であったため、各地点の各層位の土壌サンプルを採取し、分析資料とした。

2 遺構の認定と調査方法

検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出さ

れた順で遺構名と遺構番号を付与した。調査の過程で遺構でない判断されたものについては欠番とした(本報告掲載番号については凡例を参照)。

B・C-1～5区では、Ⅱc層(中世)およびⅣ層上面(縄文)、C・D-9～11区ではⅢ層上面で遺構検出(古代)を実施した。各地点での層堆積や包含層の時期が異なっていたため、遺物の取り上げを行いながら、慎重に遺構の検出を試みた。

遺構は検出された段階で写真撮影・実測を実施した後、土坑や柱穴については半截、竪穴建物跡・カマド状遺構などは土層観察用のベルトを十字に設定し、4分の1区画ずつ掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて出土遺物の記録作成や取り上げ、土層堆積状況の断面図等の記録を行った。遺構の認定については埋土の状況や床面の状態、遺物出土状況等を基に判断した。遺構内から出土した有機物(炭化木等)は出土地点を記録し、コンタミネーションがないように慎重に取り上げ、アルミホイルで梱包した。また、有機物が出土した遺構の埋土はベルトで区分けされた箇所ごとにサンプリングし、フローテーションで微細な有機遺物の検出を試みた。

B・C-3～5区の中央トレンチではⅧ層をつき破る噴砂等が確認されたことから、北壁・南壁ともに土層の剥ぎ取りを行い、記録を保存することとした。

3 整理作業の方法

遺物の水洗作業は、平成29・30年度に行い、土器や陶磁器、石器類はブラシで水洗いを行った。

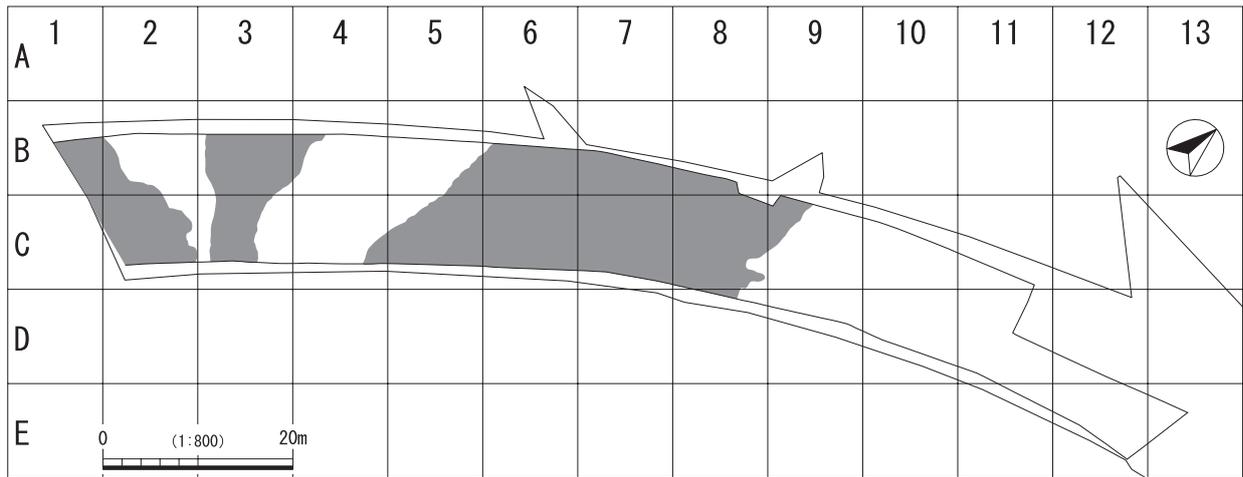
注記は注記記号「KSK」を頭に「区」、「層」、「小グリッド」、「取り上げ番号」を記入した。遺構内出土遺物については、「KSK」の次に「区」、「遺構名」、「取り上げ番号」を記入した。なお、土器の小破片や摩滅が激しいものは注記を省略した。

遺物接合は、平成30年度に行った。土器に関しては区ごとに時期・種類ごとに分類した後、文様や胎土等の特徴を基に再分類を行い、各部位ごとに接合を試みた。なお、出土量が膨大であったため、口縁部・底部の接合を優先的に実施し、胴部や各部位同士での接合は十分な作業ができなかった。

各時期の遺物の分類基準は、時期ごとに異なるため、凡例または各節を参照されたい。

第2節 層序

遺跡の立地が、米丸マールの噴出物堆積層(Ⅷ層)の上に立地していることや旧地形が起伏に富んでいたことから、調査区内での層堆積は一律ではない。よって、遺跡を東西方向に3地点にわけて基本層序を第5図のように整理した。



1～5区			6～8区			9～12区		
層位	色調等	層厚	層位	色調等	層厚	層位	色調等	層厚
I	表土：黒色砂質土	20～60cm	I	表土：黒色砂質土	20～90cm	I a	表土：褐灰色砂質土	15～20cm
II	黒褐色・暗褐色砂質土 弥生～近世：遺物包含層	50～70cm	II	黒褐色・暗褐色砂質土 弥生～近世：遺物包含層	20～40cm	Ib～e	褐灰色・灰黄褐色砂質土（鉄分含） 近現代～近代：旧水田層	60～80cm
III	にぶい黄褐粘質土 縄文時代：遺物包含層	10～20cm	IV	暗褐色土（P5バミス含む）	20～30cm	II a～d	黒褐色・暗褐色土 古代～中世：遺物包含層	50～100cm
IVa	暗褐色土（P5バミス含む） 縄文時代：遺物包含層	20～30cm	VIIa	暗灰黄色砂質土（米丸マール風化土）	20cm	III a～e	にぶい黄褐色・灰褐色・暗褐色粘質土 縄文時代：遺物包含層	50～100cm
IVb	黒褐色砂質土	10～20cm	VIIb	米丸マール スコリア岩盤層	6m+	IVa	暗褐色土（P5バミス含む） 縄文時代：遺物包含層	80～150cm
V	黒褐色土	10～20cm				IVb	黒褐色砂質土	30～50cm
VI	アカホヤ火山灰（2次堆積）	15～20cm				V	黒褐色土	20～30cm
VII	黒褐色土（白色バミス多く含む）	10cm				VI a・b	アカホヤ火山灰（2次堆積）	10cm
VIIa	暗灰黄色砂質土（米丸マール風化土）	20cm				VII	黒褐色土（白色バミス多く含む）	10～20cm
VIIb	米丸マール スコリア岩盤層	6m+				VIIa	暗灰黄色砂質土（米丸マール風化土）	10cm
						VIIb	米丸マール スコリア岩盤層	6m+

第5図 調査範囲と基本層序対応表

本遺跡は旧地形として1～5区、9～12区の2つのⅧ層の落ち込み部があることが大きな特徴である。遺構・遺物はこの2か所から確認された。

後郷川沿いの1～5区に関しては、Ⅷ層の落ち込みが2か所確認された。表土下からすぐにⅧ層が確認された箇所は層堆積が非常に薄い。落ち込み部はⅧ層まで達しており、遺物包含層（Ⅲ層）も良好に残存し、多量の遺物が出土した。Ⅱ層は厚いが様々な時期が包括された層であり、出土遺物も少ない。縄文時代以降については、後世の削平や造成が行われた可能性が高いと考えられる。

6～8区は堆積層が非常に薄く、Ⅱ層除去後はⅧ層の表面が見えるほどであった。そのような層堆積もあり、Ⅷb層（岩盤層）を掘りぬいたピットや溝状遺構が検出された。なお、Ⅱ層（包含層）での出土遺物を非常に少ない。

9～12区は、1～5区よりⅧ層が深く広く落ち込んでいることもあり、本遺跡の中では層堆積が明瞭であった。

他区と比して旧水田層（Ⅰ層）が厚く堆積していた。さらにはⅡ層が厚く残存しており、古代の包含層と遺構が確認された。出土遺物はさして多くない。また旧地形が東に向かって、C・D区にかけて傾斜しており、D-

11区が最もⅢ層が厚く堆積していた。そのⅢ層から大量の遺物（縄文）が出土した。また、D-11区は水分を多く含んでいる粘質土（Ⅲ下層～）が堆積しており、Ⅵ層（Ah）が水性作用により白色を呈していた（箇所によっては湧水もみられた）。Ⅲ層下位で出土した土器は焼成があまりものが粘土状に溶けて出土したものも多く散見され、それ以外の遺物も表面が磨滅したものが多かった。

遺跡の形成に関わる地質的な特徴として、米丸マール噴出物の堆積とその後の層堆積は注目される。

詳細については第4章を参照されたいが、Ⅷ層の上には硬い黒褐色土（Ⅶ層）は珪藻土に近く、当時干潟のような地質であったと考えられる。その後堆積したⅥ層（アカホヤ）には二次堆積層の下に砂層（Ⅶb層）しており、津波の痕跡の可能性が指摘されている。

また、噴砂がB・C-4区で検出されている。噴砂はⅧ層を突き破る状態でⅡc層まで噴出している。噴砂の時期については中世の造成面までは確認できなかったことから、弥生～古代の間のものと考えられる。

第2表 各地点土層注記一覧表

1～5区

層位	色調等	遺物	層厚
I	表土：黒色砂質土	現代	20～60cm
II a	黒褐色砂質土	古代～中世	20～30cm
II b	暗褐色砂質土		20cm
II c	黒褐色砂質土		10～20cm
III	にぶい黄褐粘質土	縄文中期後半～後期前半	10～20cm
IV a	暗褐色土 (P5バミス含む)	無遺物層	20～30cm
IV b	黒褐色砂質土		10～20cm
V	黒褐色土		20cm
VI	アカホヤ火山灰 (2次堆積)		10～20cm
	アカホヤ (褐灰色砂)		5cm
VII	黒褐色土 (白色バミス多く含む)		10cm
	暗灰黄色砂質土 (米丸マール風化土)		20cm
VIII b	米丸マール スコリア岩盤層		+

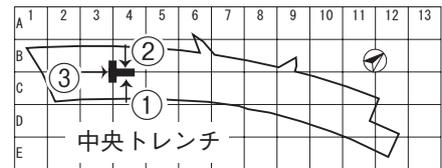
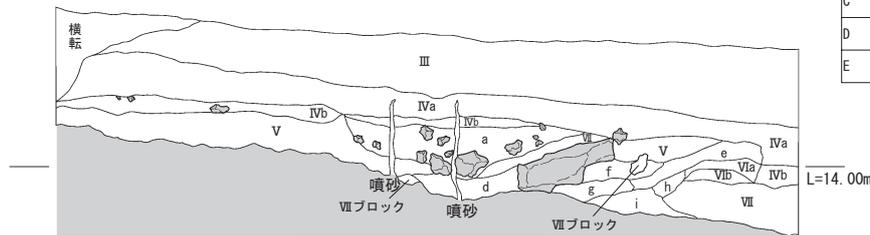
6～8区

層位	色調等	遺物	層厚
I	表土：黒色砂質土	現代	20～60cm
I b	にぶい黄褐粘質土	近世	20～30cm
II a	黒褐色砂質土	古代～中世	10～20cm
II b	暗褐色土 (P5バミス含む)	無遺物層	10～20cm
VII a	暗灰黄色砂質土 (米丸マール風化土)		20～30cm
VIII b	米丸マール スコリア岩盤層		+

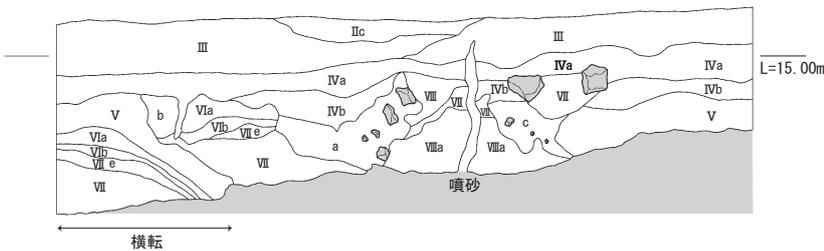
9～12区

層位	色調等	遺物	層厚
I a	表土：褐灰色砂質土	現代	15～20cm
I b	旧表土：褐灰色砂質土 (鉄分含)	近現代～近世 (旧水田層)	30～40cm
I c	旧表土：灰黄褐色砂質土 (鉄分含)		10cm
I d	旧表土：灰黄褐色砂質土 (鉄分含)		10cm
I e	旧表土：灰黄褐色砂質土 (鉄分含)		10～20cm
II a	黒褐色砂質土		古代～中世
II b	黒褐色土		10～30cm
II c	黒褐色粘質土		20～35cm
II d	黒褐色粘質土		10～15cm
III a	にぶい黄褐粘質土	縄文中期後半～後期前半	20～30cm
III b	にぶい黄褐粘質土		10～30cm
III c	灰褐色粘質土		20～40cm
III d	暗褐色粘質土		20cm
III e	暗褐色粘質土		15～30cm
IV a	暗褐色土 (P5バミス含む)		30～50cm
IV b	暗褐色土 (P5バミス含む)	無遺物層	20～30cm
V	黒褐色粘質土		10～20cm
VI a	アカホヤ火山灰 (2次堆積)		10cm
VI b	アカホヤ (褐灰色砂)		5～10cm
VII	黒褐色土 (白色バミス多く含む)		20～40cm
VII a	暗灰黄色砂質土 (米丸マール風化土)		10cm
VIII b	米丸マール スコリア岩盤層		+

①中央トレンチ南壁土層断面図 (C・D-4区)

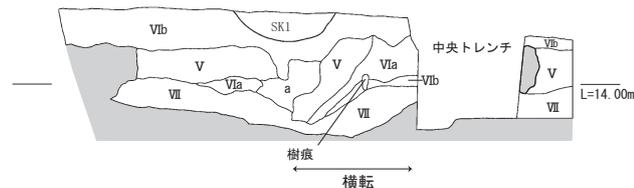


②中央トレンチ北壁土層断面図 (C・D-4区)



南壁噴砂跡

③中央トレンチ西壁土層断面図 (B・C-4区)

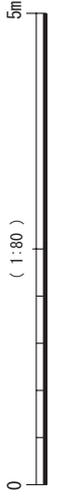
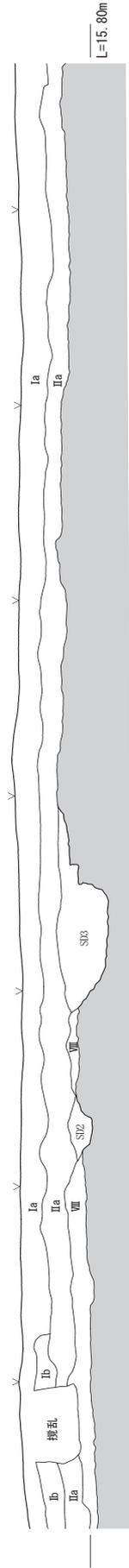
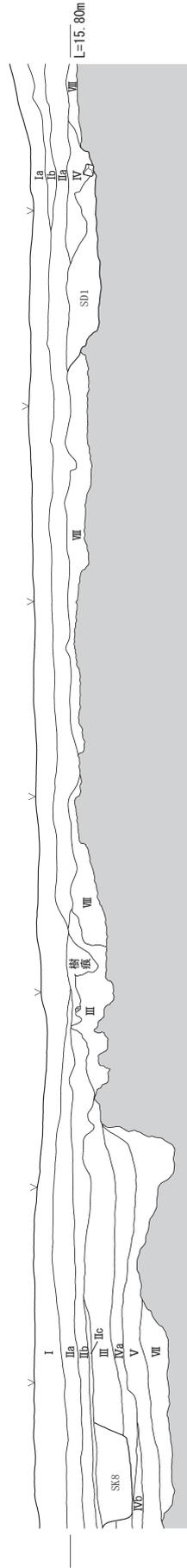
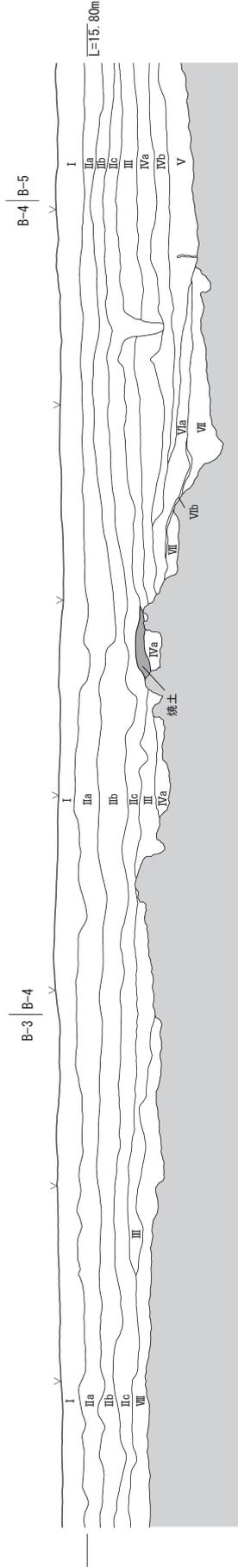
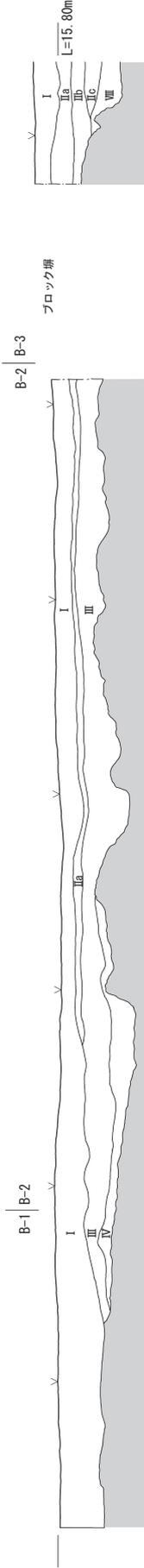
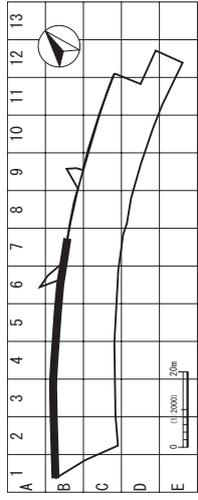


a: 黒褐色土(10YR2/3), φ0.5mm大の白・黄色バミス多く含む, しまりややあり, VIb層由来



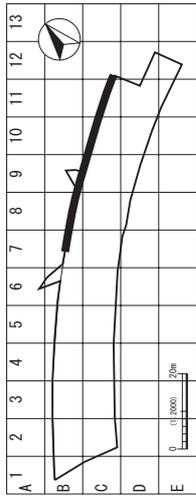
第6図 土層断面図 (1) (中央トレンチ)

北壁土層断面図 1

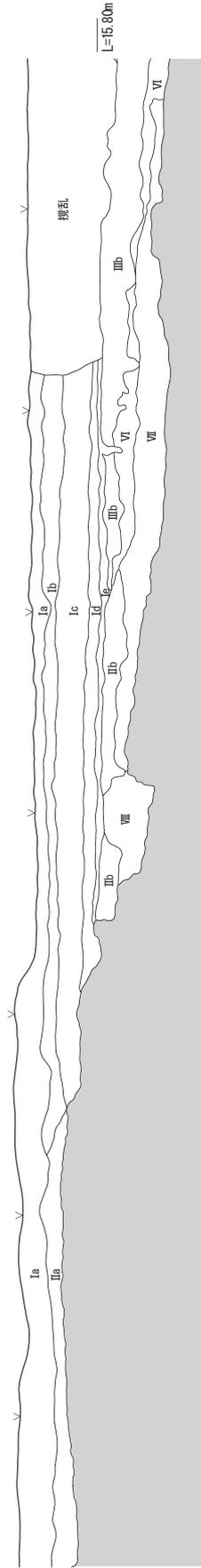


第7図 土層断面図 (2)

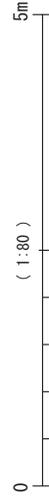
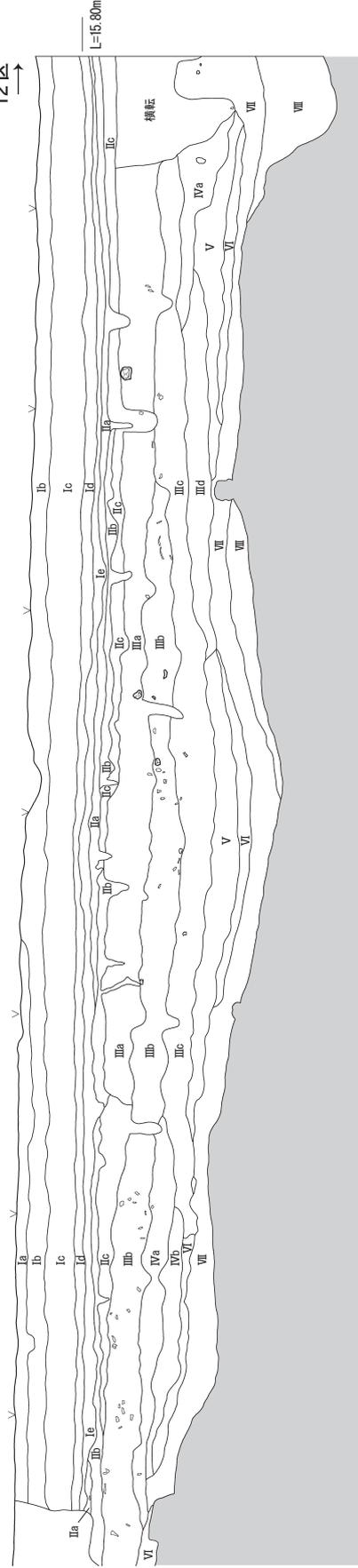
北壁土層断面図2



7区 ←

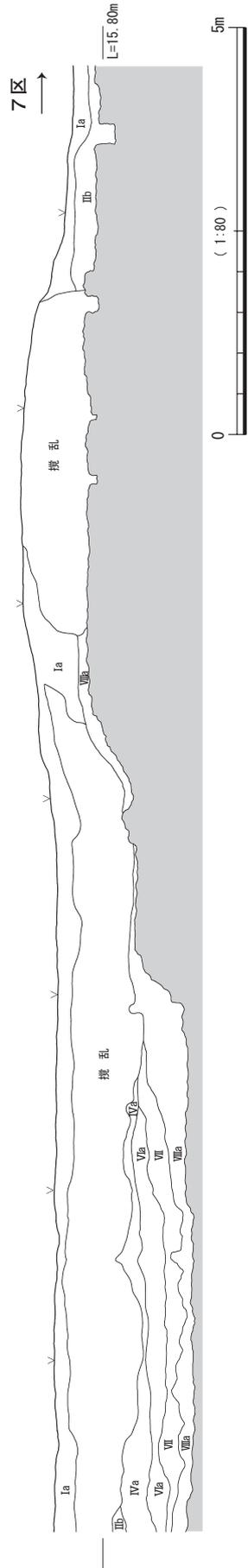
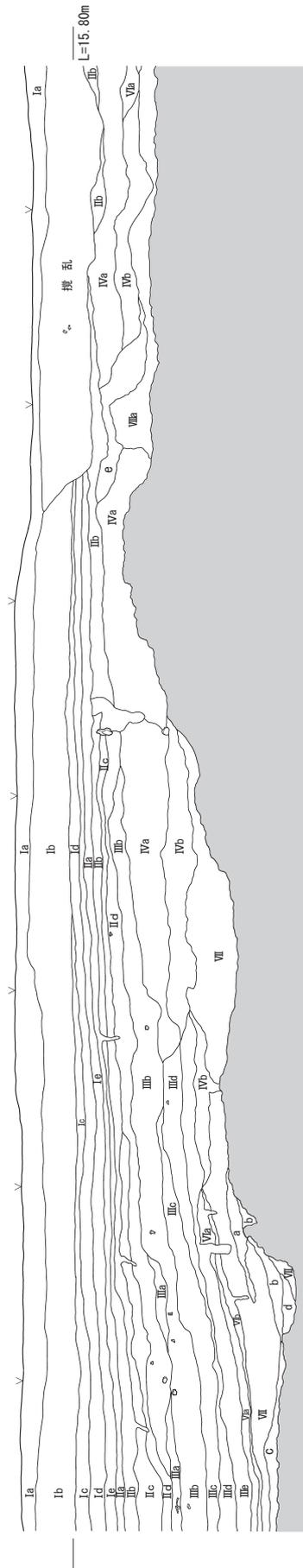
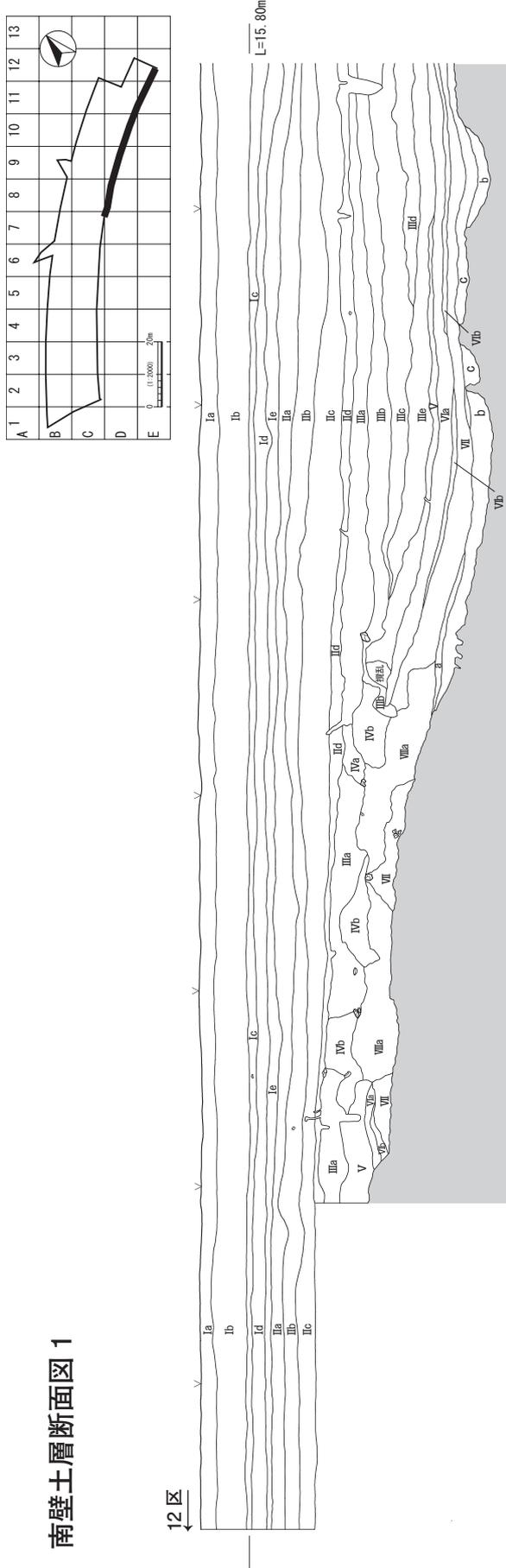


12区 →



第8図 土層断面図 (3)

南壁土層断面图 1



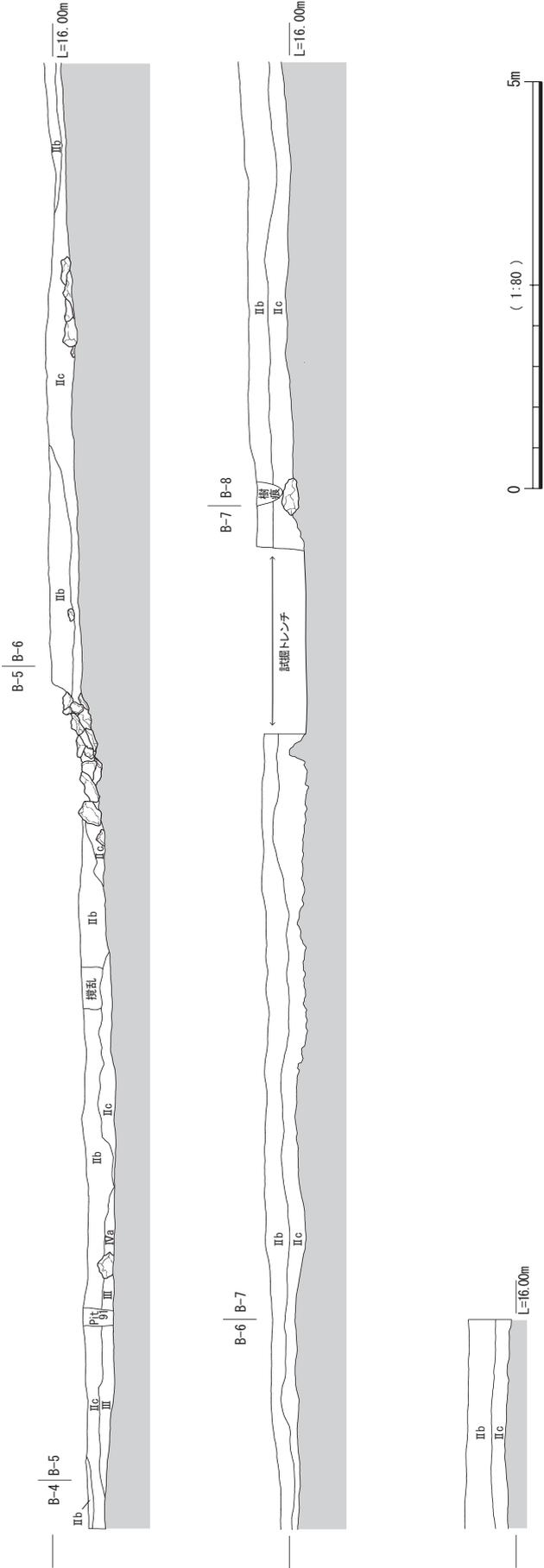
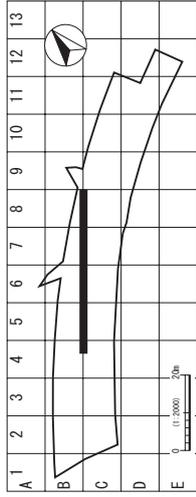
第9图 土層断面图 (4)

南壁土層断面図2

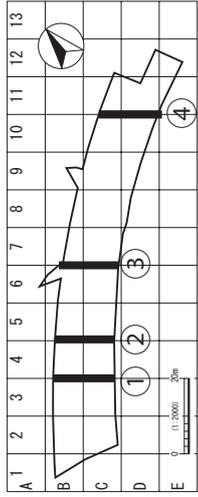


第10図 土層断面図 (5)

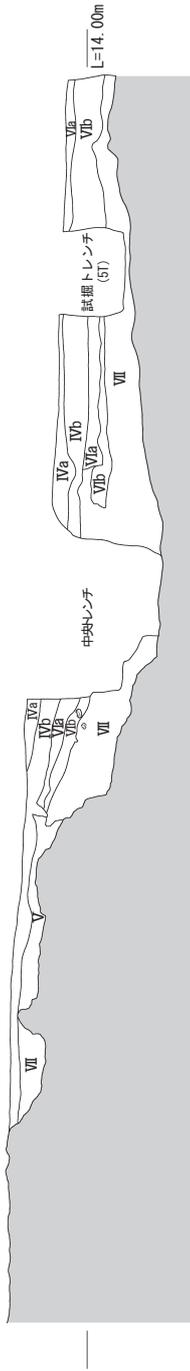
B・C-4～8区 東西土層断面図



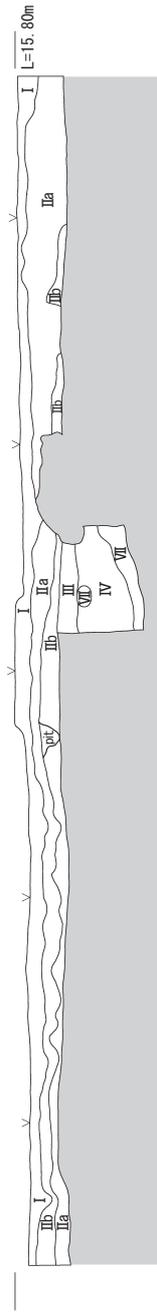
第11図 土層断面図 (6)



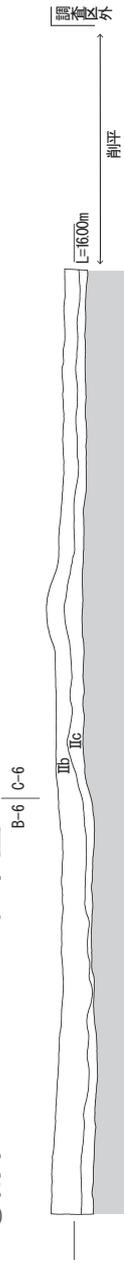
①南北 B・C-3・4 区北壁



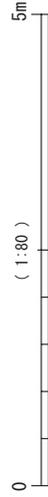
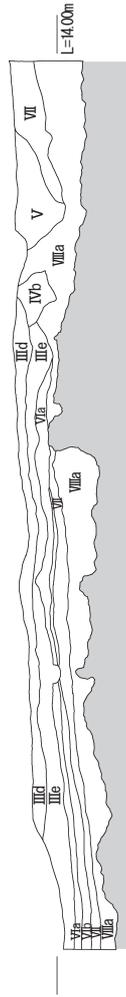
②南北 B・C-4・5 区北壁



③南北 B・C-6・7 区北壁



④南北 C・D-10・11 区北壁



第12図 土層断面図 (7)

第3節 調査の成果

1 縄文時代の成果

縄文時代の遺構はB・C-3・4区でⅢ・Ⅳ層上面で2基検出された。また1～5区、9～12区では、Ⅱc～Ⅳ層上面（縄文時代包含層）にかけて約20万点近くの遺物が出土した。その大半は縄文時代中期～後期前半の範疇に入る遺物群（土器・石器）である。

前述したが、調査区内では米丸マール岩盤層（Ⅷ層）の落ち込みが2か所確認されている。遺物もその落ち込み部分に集中して出土した。特に、B・C-4区中央部に向かって地形的に傾斜しており、最も地形的に落ち込んでいることが確認された。遺物の量もこの部分を中心に広がっている。

C・D-10・11区も遺物が多量に出土したが、D区にかけて傾斜する旧地形が確認され、傾斜に沿って遺物が出土する状況であった。

(1) 遺構

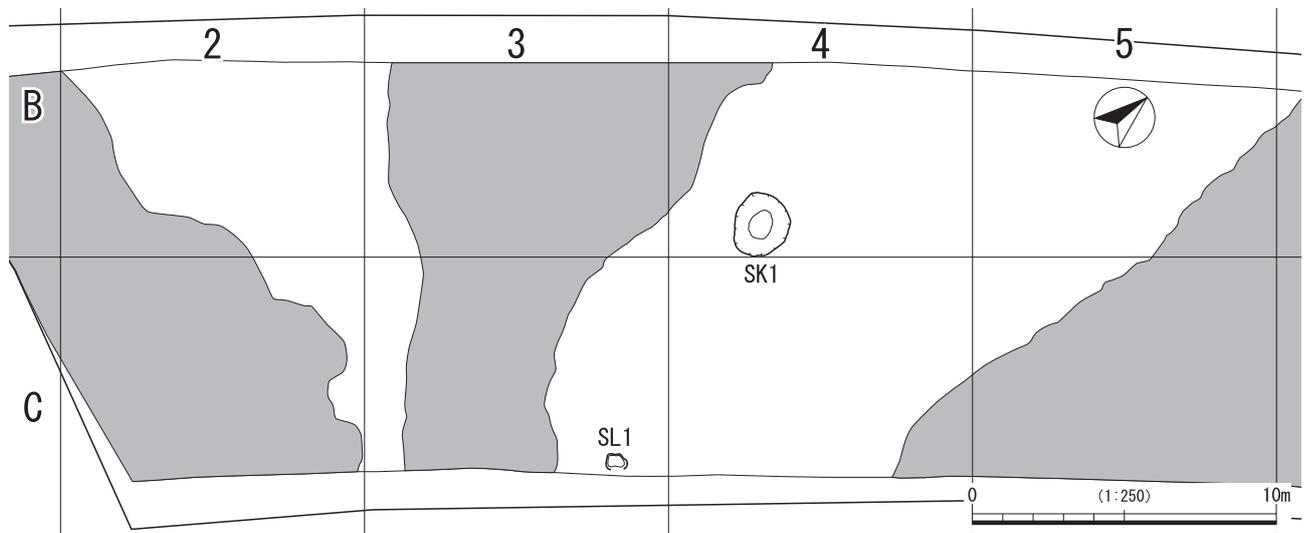
SK1（土坑1号）

検出状況 B-4区のⅣ層上面で検出した。

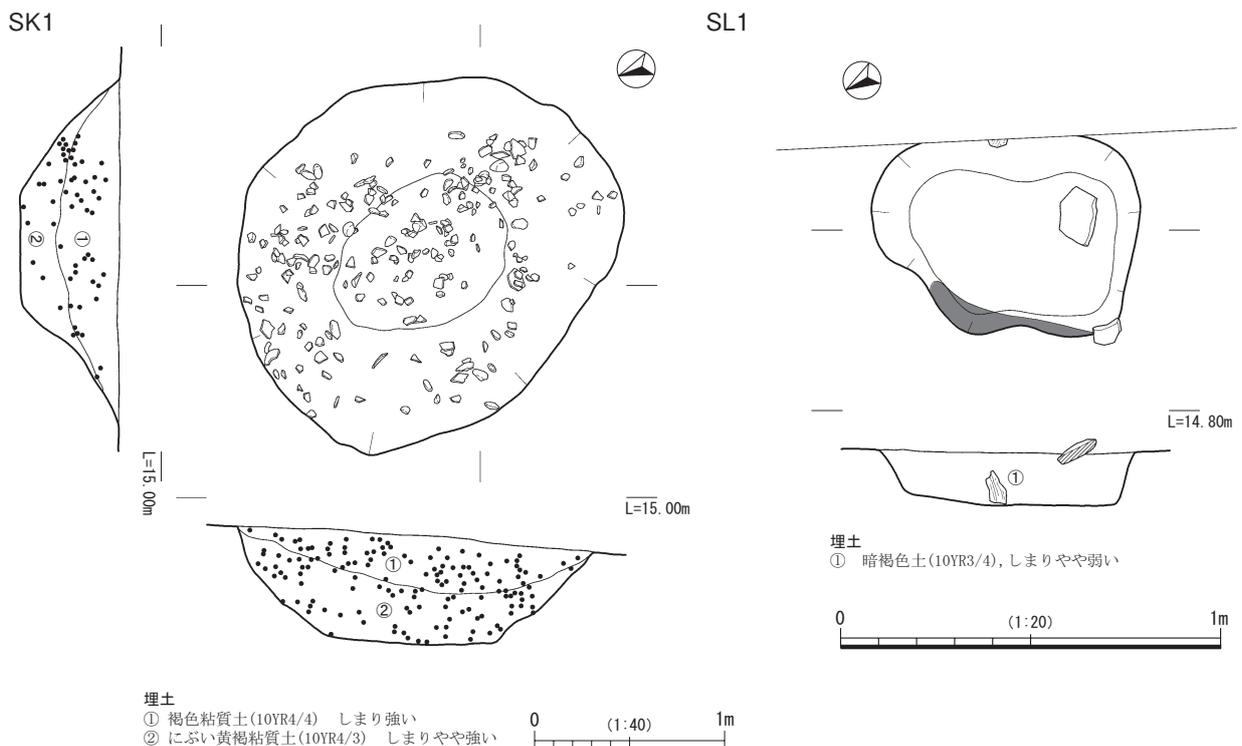
形状・規模 径約200cmの円形状を呈し、床面はⅥ層であった。SK1の南側には横転があったことから遺構ではなく、横転の可能性もある。

埋土 粘質土が挿鉢状に堆積していた。

出土遺物 土坑からは多くの遺物が出土したが、いずれも磨滅が激しく小片が多いため、図化しなかった。



第13図 縄文時代遺構配置図



第14図 SK1・SL1

S L 1 (炉跡1号)

検出状況 C-3区のIV層上面で検出した。

形状・規模 約70×50cmの掘り込みを有し、西縁辺部には焼土の広がりがみられた。

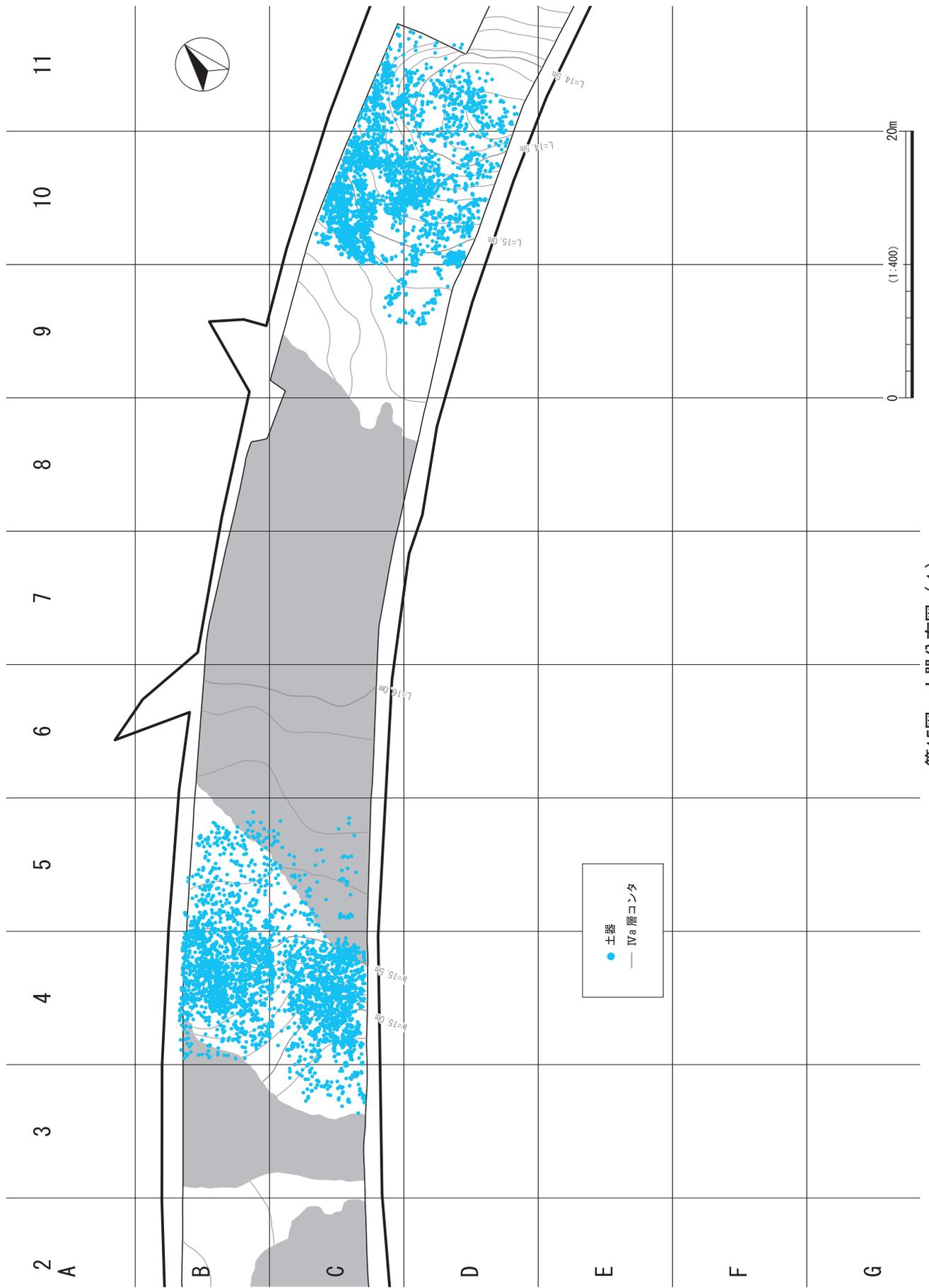
埋土 暗褐色土で焼土片・炭化物を多く含む。

出土遺物 土坑中央部の床面直上から炭化木が出土した。

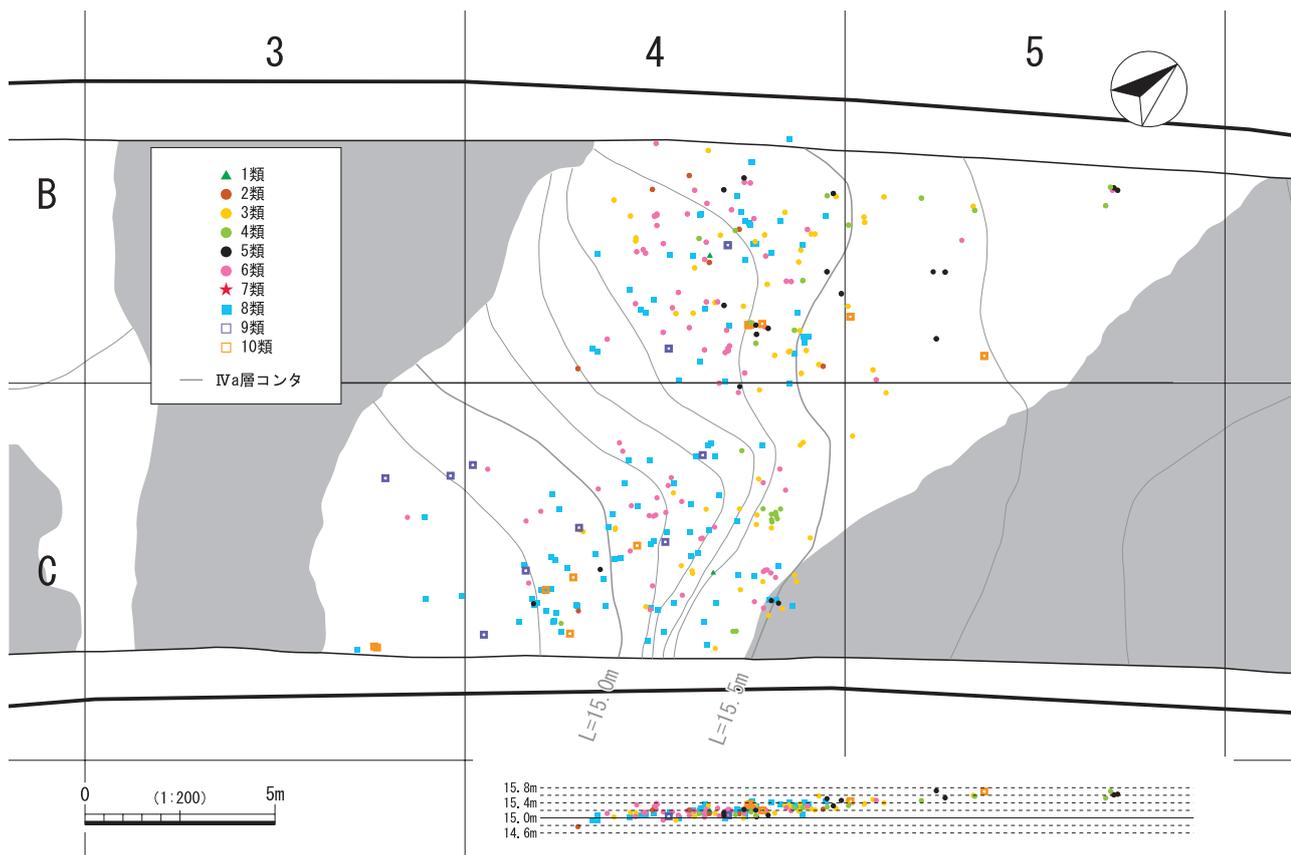
年代測定の結果ではBP2975±25(縄文晩期)という結果が得られており、本遺跡主体の中期後半～後期前半の範疇には収まらない(第IV章参照)。炭化木以外は出土していないため、本遺構の時期については晩期相当としておく(なお、縄文晩期の遺物はIII層からごく少量、小片で出土している)。

第3表 縄文時代 土器分類表

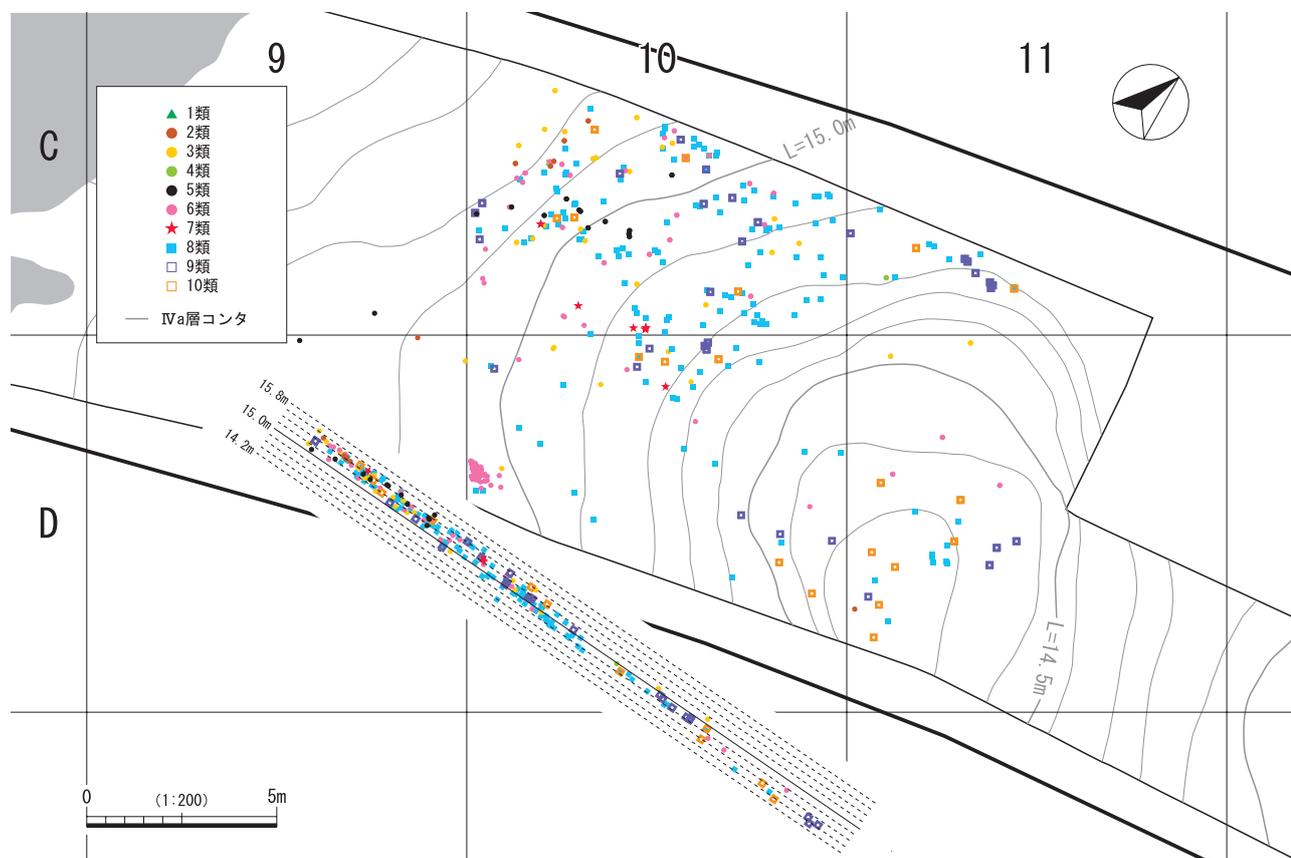
分類	特徴		滑石	相当型式	相当時期	掲載番号		
1	貝殻条痕文系		-	曾畑式・轟C・D式	前期	1	14	
2	1	キャリパー形、滑石混入(轟木ヶ迫段階)	○	春日式	中期中葉～後半	15	47	
	2	突帯貼付(轟木ヶ迫・南宮島段階)	-			48	70	
	3	口唇端部突帯貼付(南宮島段階)	-			71	88	
3	1	突帯+沈線文	-	中尾田Ⅲ類		89	97	
	2	口縁部肥厚(幅狭)線描・貝殻押引:山形文・格子文など				98	198	
	3	口縁部肥厚(幅広)線描・貝殻押引:山形文・格子文など				199	274	
	4	全面施文,線描山形文・格子文など				275	288	
4	1	口縁部下位に段幅広の施文帯,線描幾何学文,山形文など	-	大平式	中期後葉～末	289	304	
	2	口縁部下位段なし施文帯なし,口縁～胴部:線描幾何学文,山形文など				305	311	
	3	胴部中半に突帯幅広の施文帯:太形凹線文など				312	315	
	4	胴部中半に突帯幅広の施文帯,口縁～胴部:線描幾何学文,山形文など				316	320	
5	1	口縁部下位:幅狭文様帯(横位)刺突文+凹線文	○	並木式		321	324	
	2	口縁～胴部下位:文様帯刺突文+凹線文,凹線文(入組文)+刺突文等	○			325	371	
6	1	文様:凹線文,文様帯2分割施文帯:胴部上半～全面	○	阿高式		372	404	
	2	文様:凹線文,文様帯1or2単位施文:口縁部上半・文様帯1分割	○			405	514	
7	文様:磨消縄文 中段階相当		-	中津式		515	523	
8	1	文様:凹線文	-	宮之迫式	後期初頭～前半	524	581	
	2	文様:縦位短凹線文+凹線文(入組文など)				582	600	
	3	文様:縦+横:区画文				601	609	
	4	文様:横平行文				610	627	
	5	文様:縦線文+横平行線文				628	679	
	6	文様:口縁部肥厚風				680	691	
	7	文様:貝殻刺突+凹線文				692	708	
	8	擬似縄文				連点文+凹線文	709	726
	9					C字文・短沈線+凹線文	727	772
	10	文様:無文				773	829	
9	1	深鉢	-	南福寺式		830	849	
	2	浅鉢				850	875	
10	1	深鉢	-	出水式		876	923	
	2	浅鉢				924	930	
11	細沈線幾何学文		-	指宿式		931	944	



第15図 土器分布図 (1)

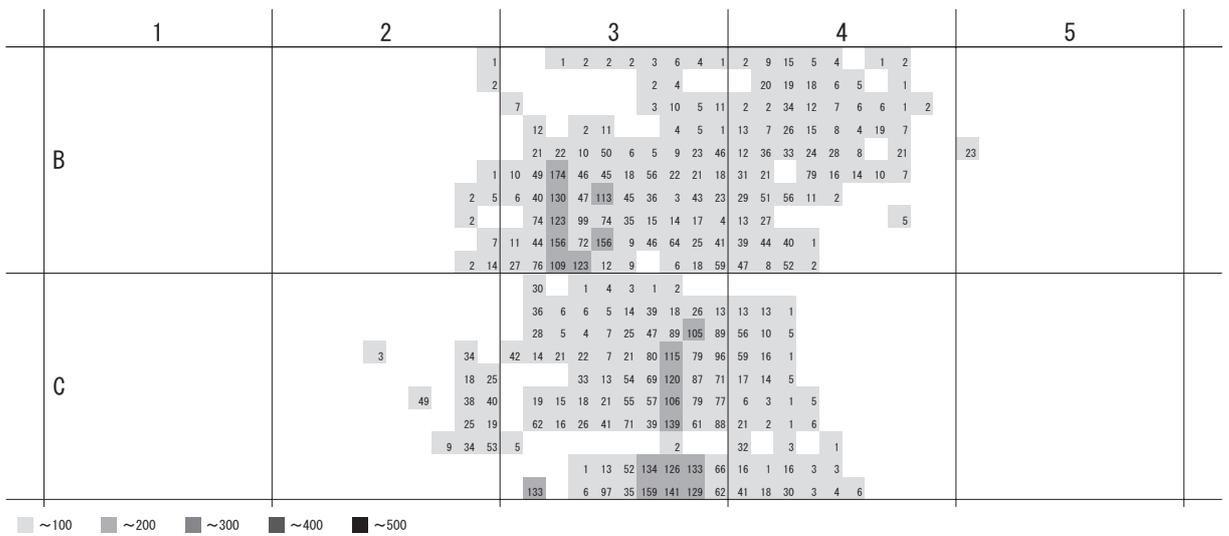


第16図 土器分布図 (2) B・C-3~5区

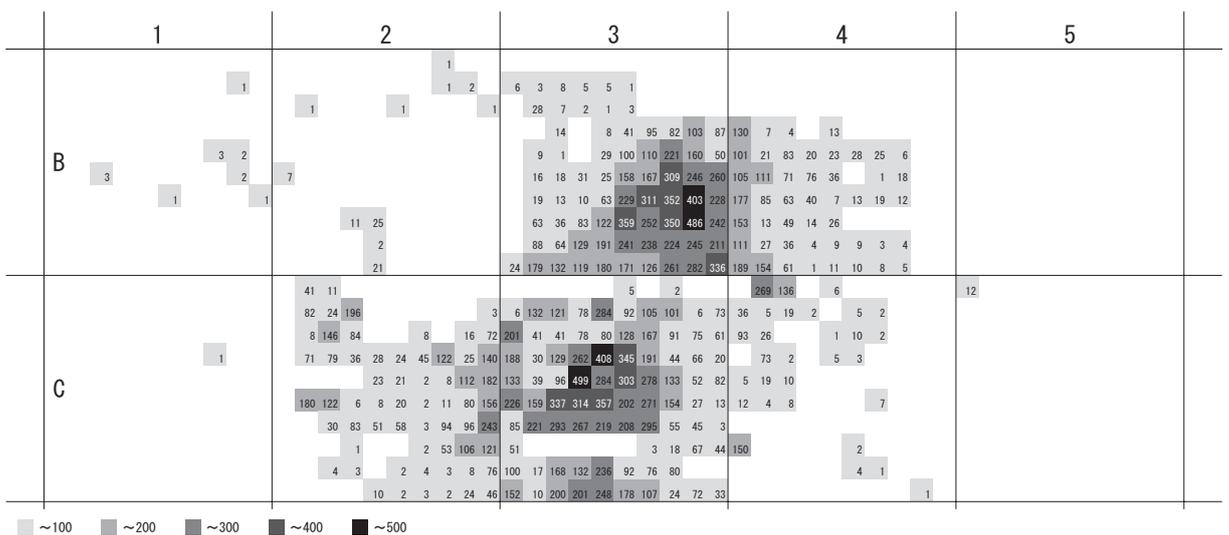


第17図 土器分布図 (3) C・D-9~11区

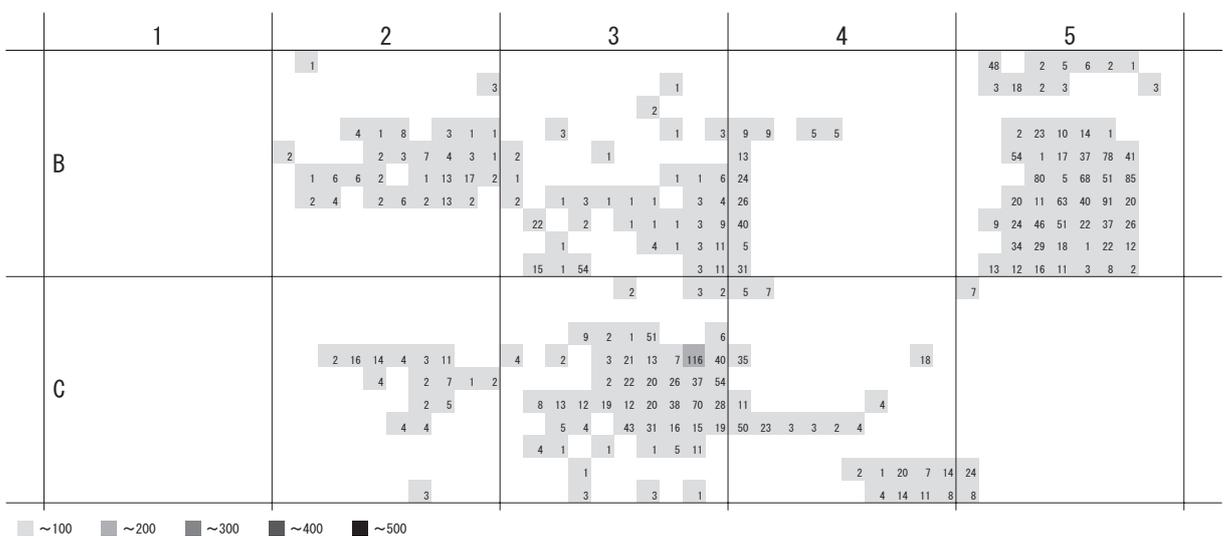
II層



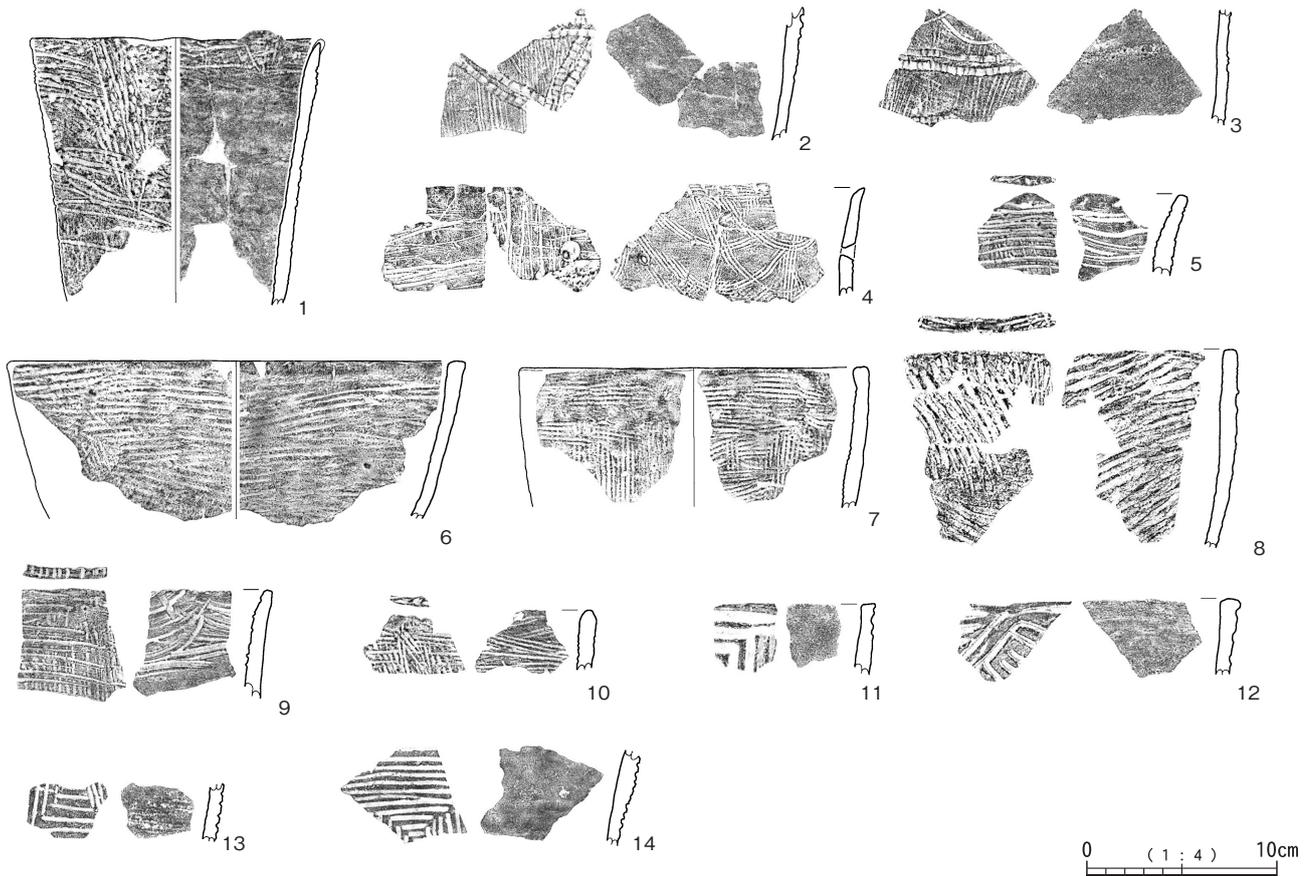
III層



IV層



第18図 土器分布図(4) 出土密度



第19図 1類 轟式・曾畑式土器

(2) 遺物（土器）

IIc～IVa層にかけて、多量の土器片が出土した。縄文時代中期後半～後期前半の範疇の土器群を中心に出土している。縄文土器総数としては約15万個体以上が出土しており、遺物出土はⅧ層落ち込み部の4・5区、9～12区に集中する。

出土量が多い4・5区は小グリッドを設定し取り上げを行った。出土量ごとにグラデーションマップ（第18図）をみると、グリッドの中心部（最も地形的に落ち込む部分）に出土が集中していることがわかる。

各型式ごとの分布図と垂直分布（第16・17図）を確認すると、各型式ごとに明確な層位的な差は認められなかった。出土した土器型式には数量差はあるが、いずれの型式も一定量存在していることから、中期後半～後期前半にかけての一定期間遺跡が存続していたことが窺える。型式ごとの出土量の傾向としては、最も多いのは3・6・8類であった。層位的な年代差が確認できなかったことも考慮すると、地形の落ち込みからの多量の遺物の出土する状況は、廃棄という性格が想定される。詳細については、第V章の総括を参照されたい。

出土した土器は、型式が多岐かつ、バリエーションも多いことから便宜的に一定の特徴をもつ群で分類を設定した（第3表）。型式分類は従来様々な考えが提示されているが、本報告では型式については、一般的に使用さ

れている基本的な型式名を採用し、報告することとした。

1類 前期：轟・曾畑式（1～14）

1～10は条痕文土器で、轟C・D式相当と考えられる。1は砲弾形で、横位の沈線文を基調として、縦位の沈線や沈線間に刺突を施文している。口縁部内面上部にも横位の沈線と刺突を巡らす。2・3は横・斜位の押引文と沈線文をもつ。4～10は、内外面に縦・横位の明瞭な貝殻条痕と沈線文が施文されている。

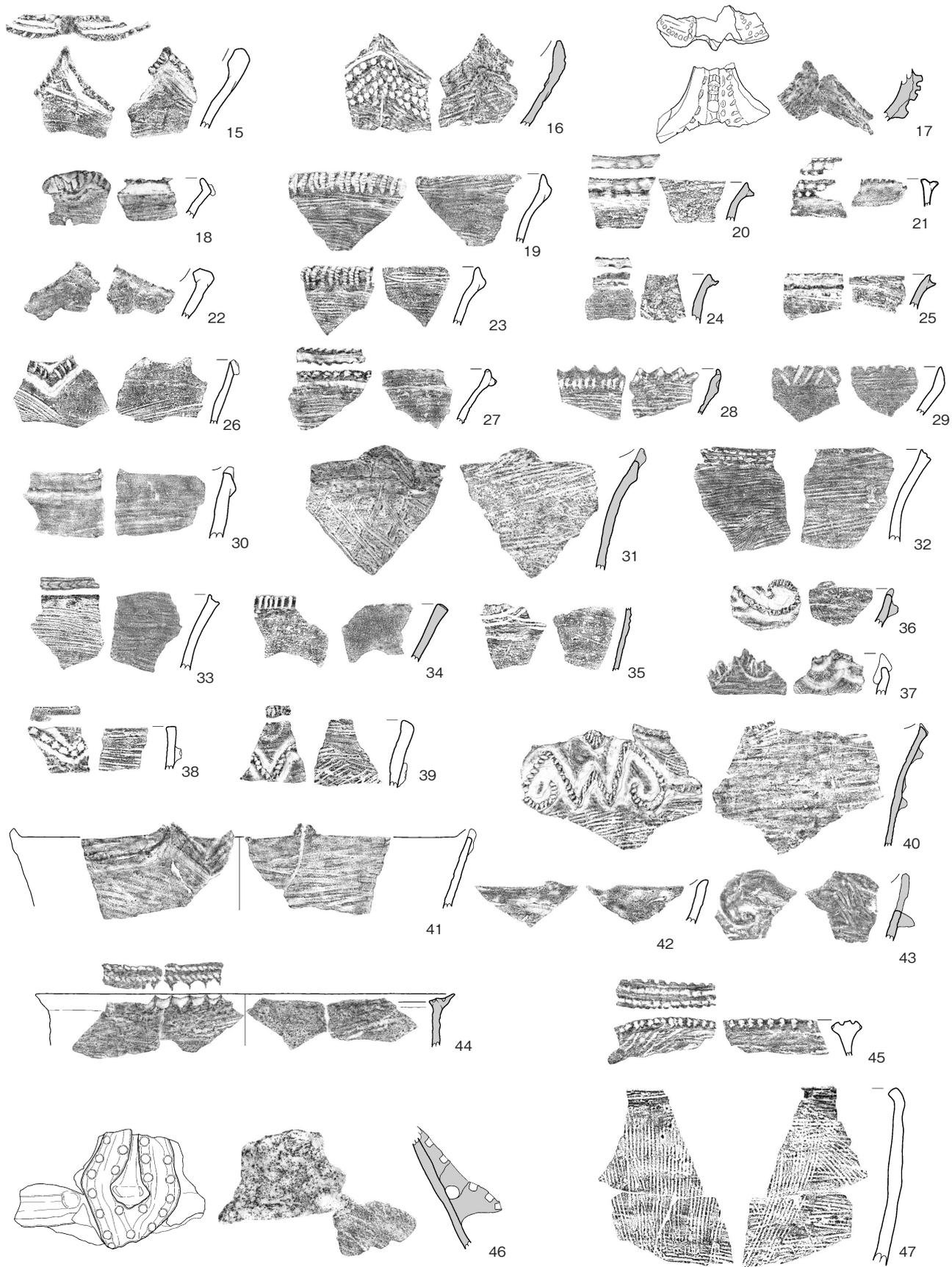
11～14は、沈線文土器で曾畑式に相当する。沈線文による四角形の折帯文が施文される。

2類 春日式：轟木ヶ迫・南宮島段階（15～88）

2-1類 キャリパー形・滑石混入（轟木ヶ迫段階）

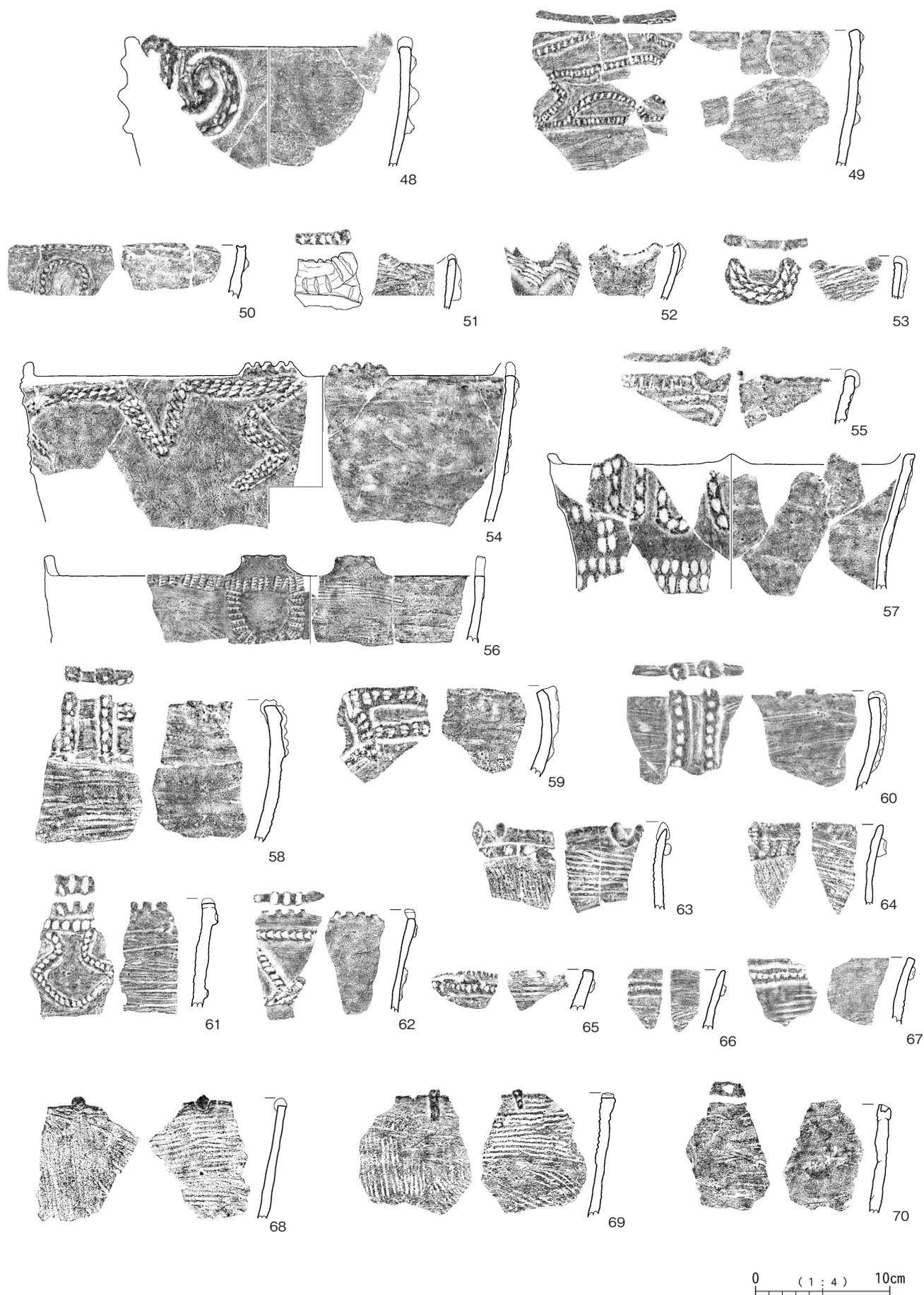
15～46は、春日式に相当の土器群で、滑石混入土器が多い。口縁部のみ内傾させる弱いキャリパー形を呈す。文様は口縁部に集約され、口縁部には貝殻刺突や細い刻目突帯が貼付される。基本的には口縁部は外反するが、44・45のように口唇部を平坦で、連続刺突文をもつものもある。

46は特殊な馬蹄形の把手をもつ。刺突文の間に凹線文が施文されており、特徴的には5類（並木式）に類似する。形態としては、壺の可能性も考えられる。滑石の混入の程度から本類に入れたが、5類の可能性も想定さ

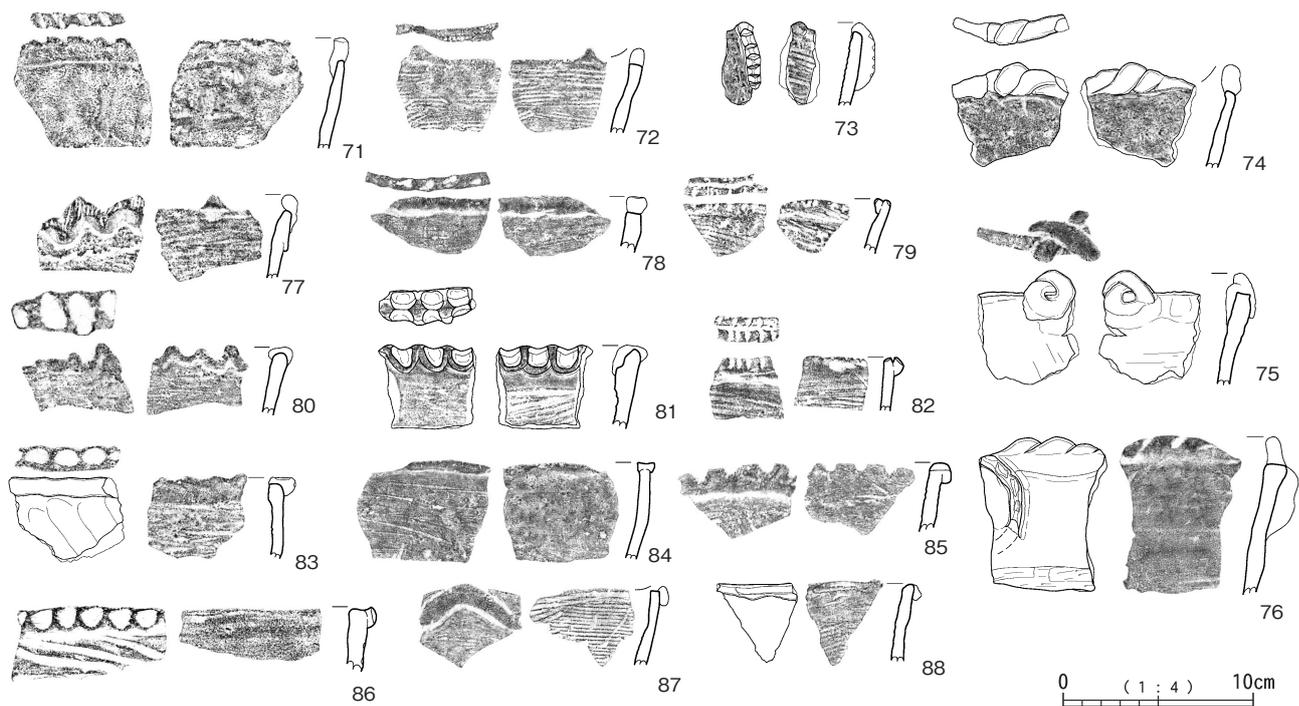


0 (1 : 4) 10cm

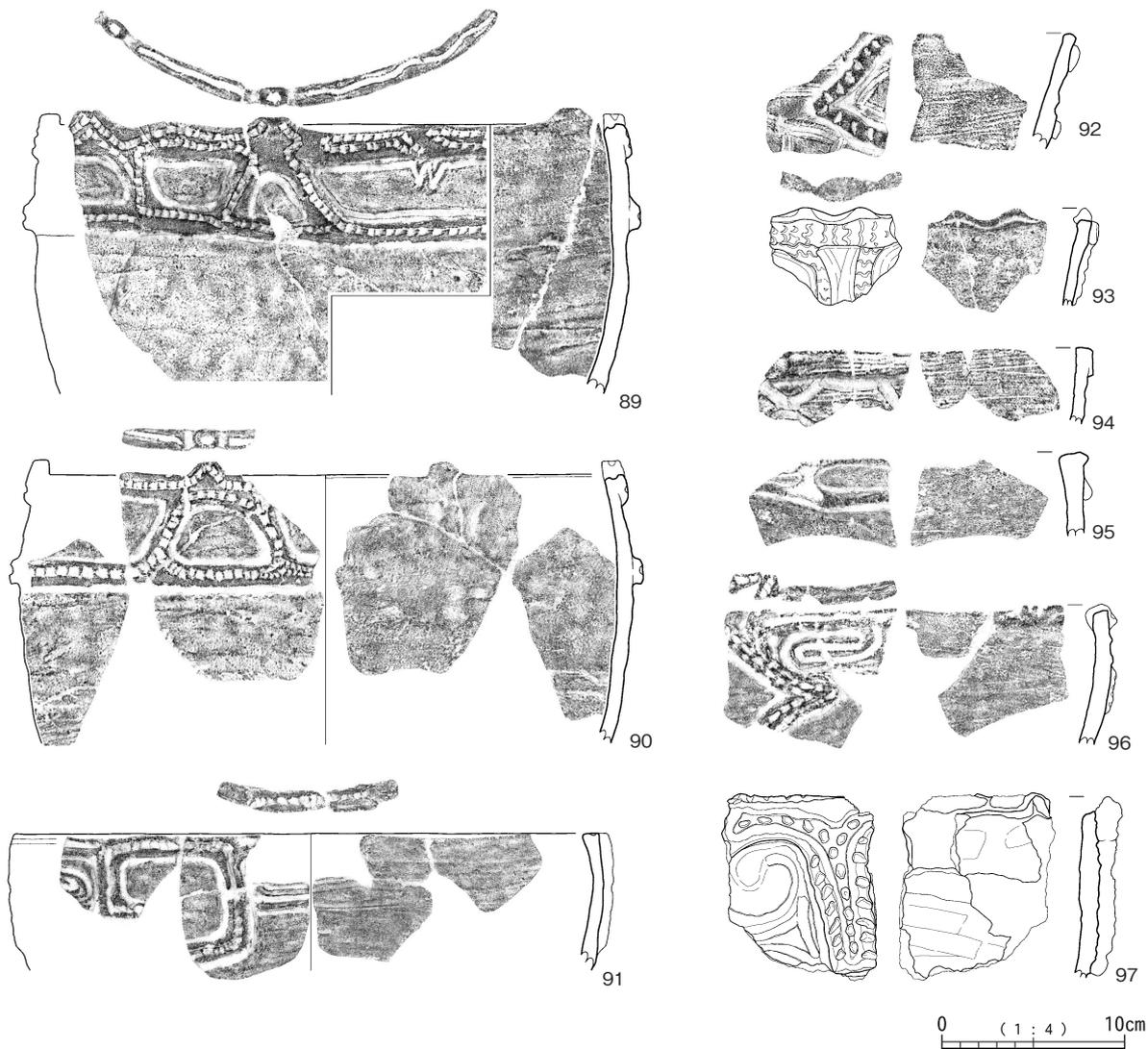
第20図 2類 春日式土器 (1) 2-1



第21図 2類 春日式土器 (2) 2-2



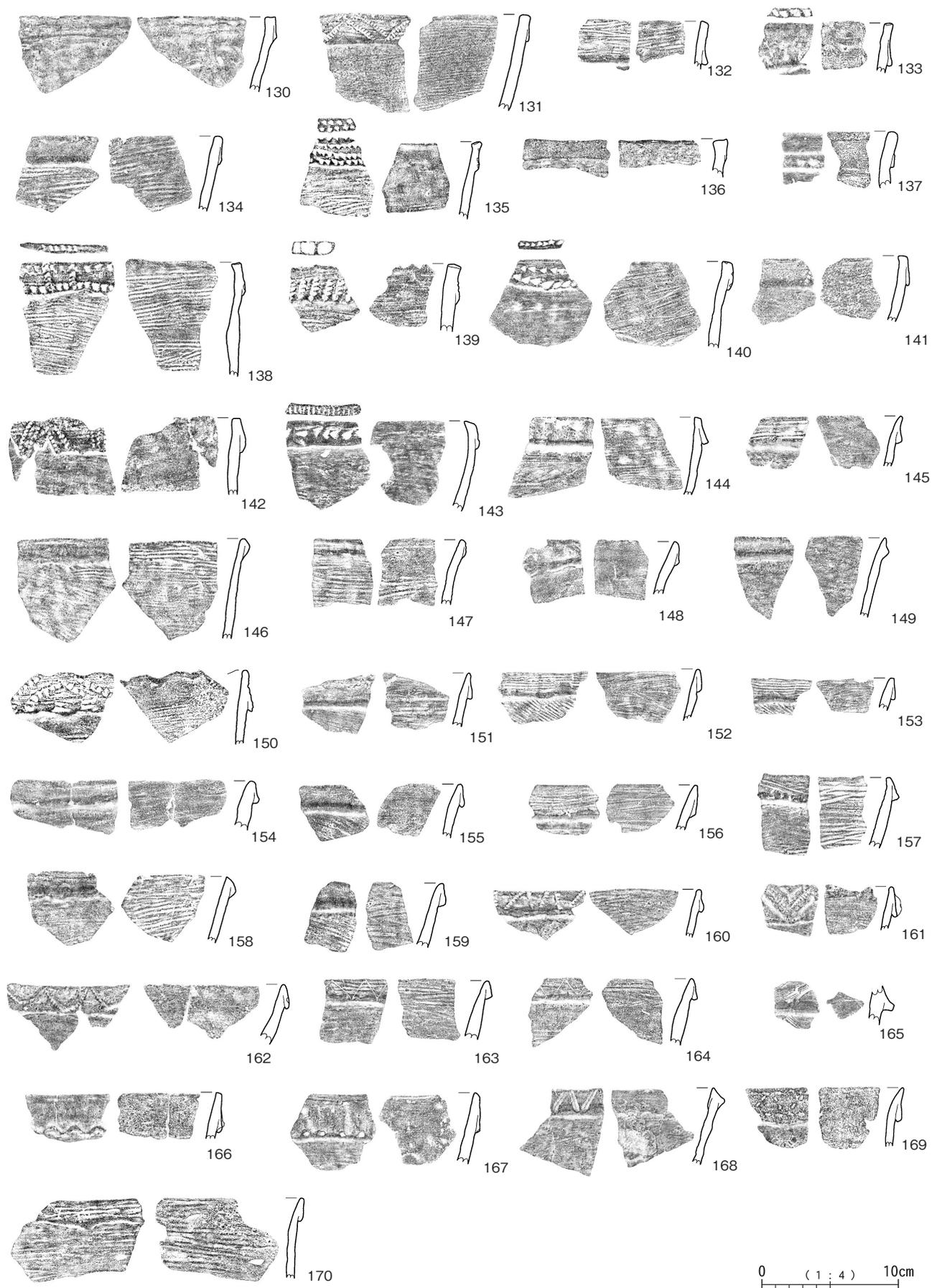
第22図 2類 春日式土器 (3) 2-3



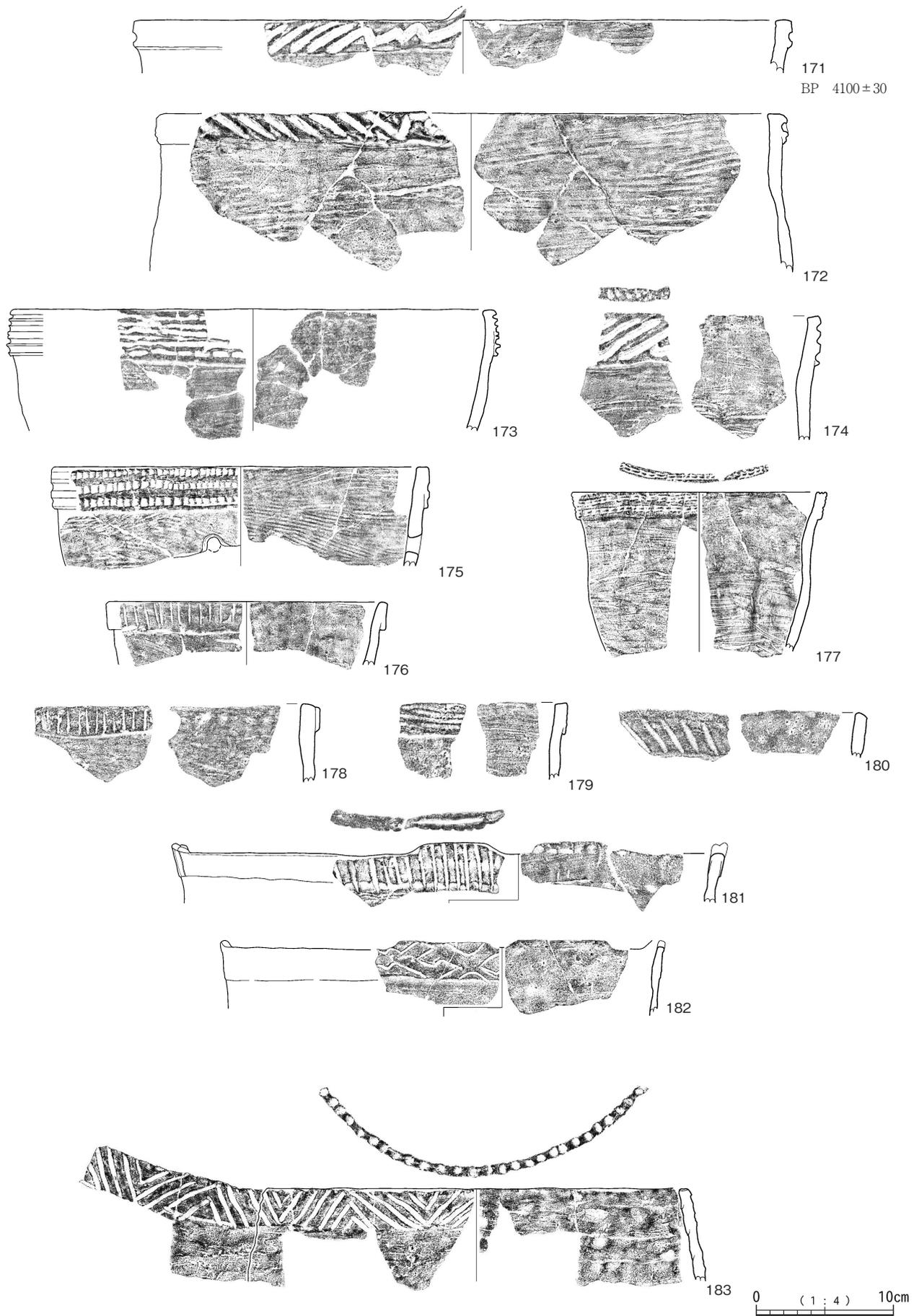
第23図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (1) 3-1



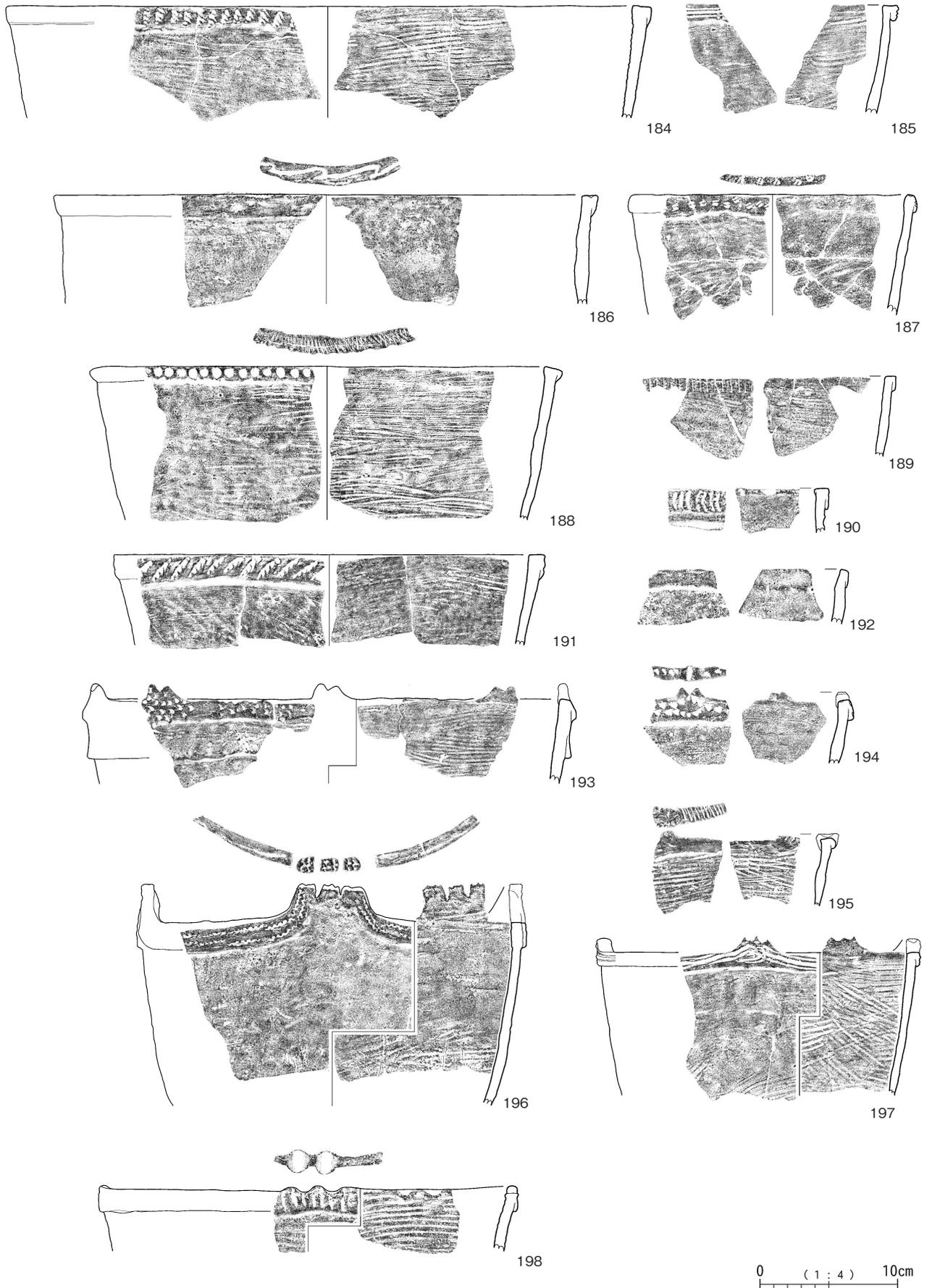
第24図 3類 中尾田皿類土器 (2) 3-2



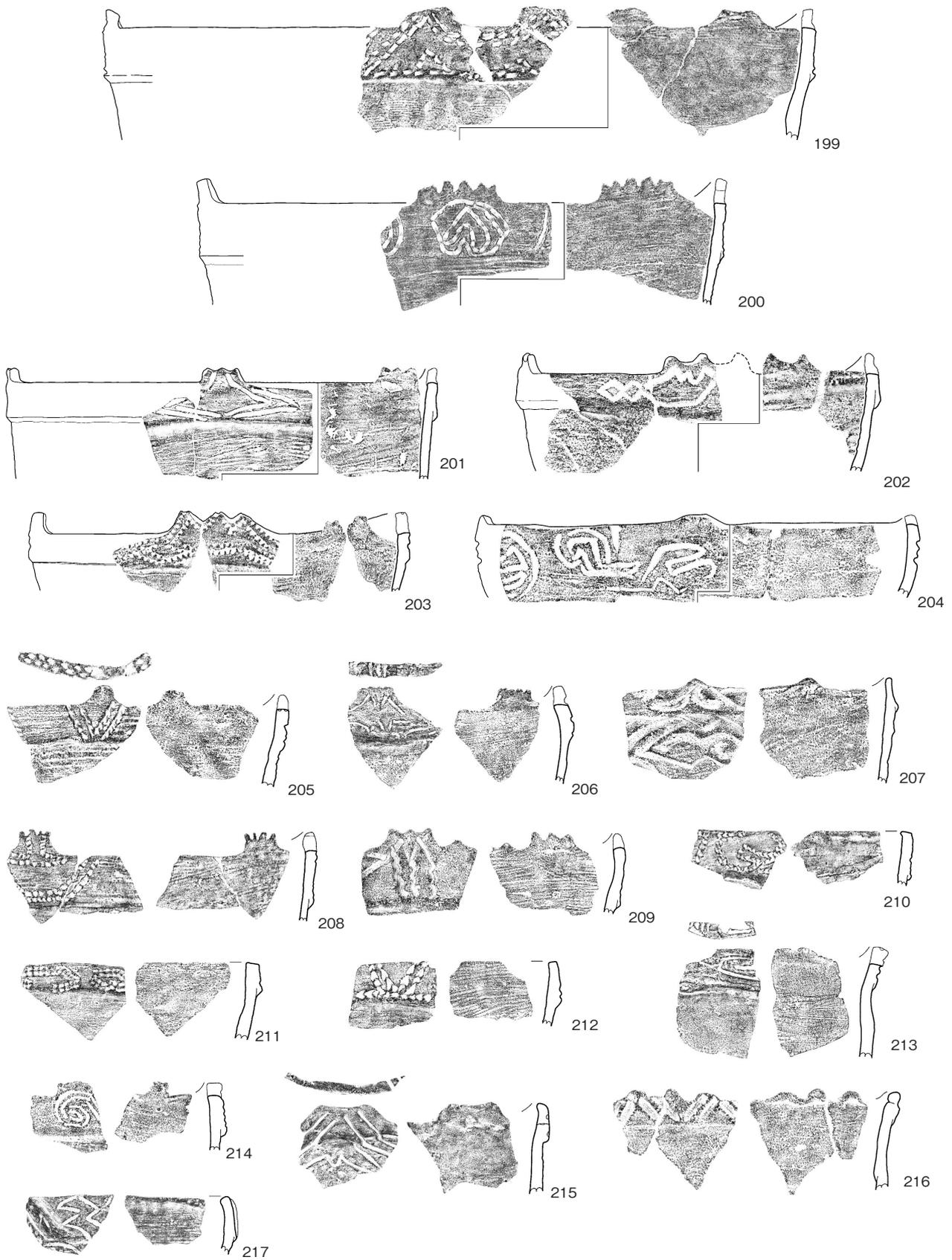
第25図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (3) 3-2



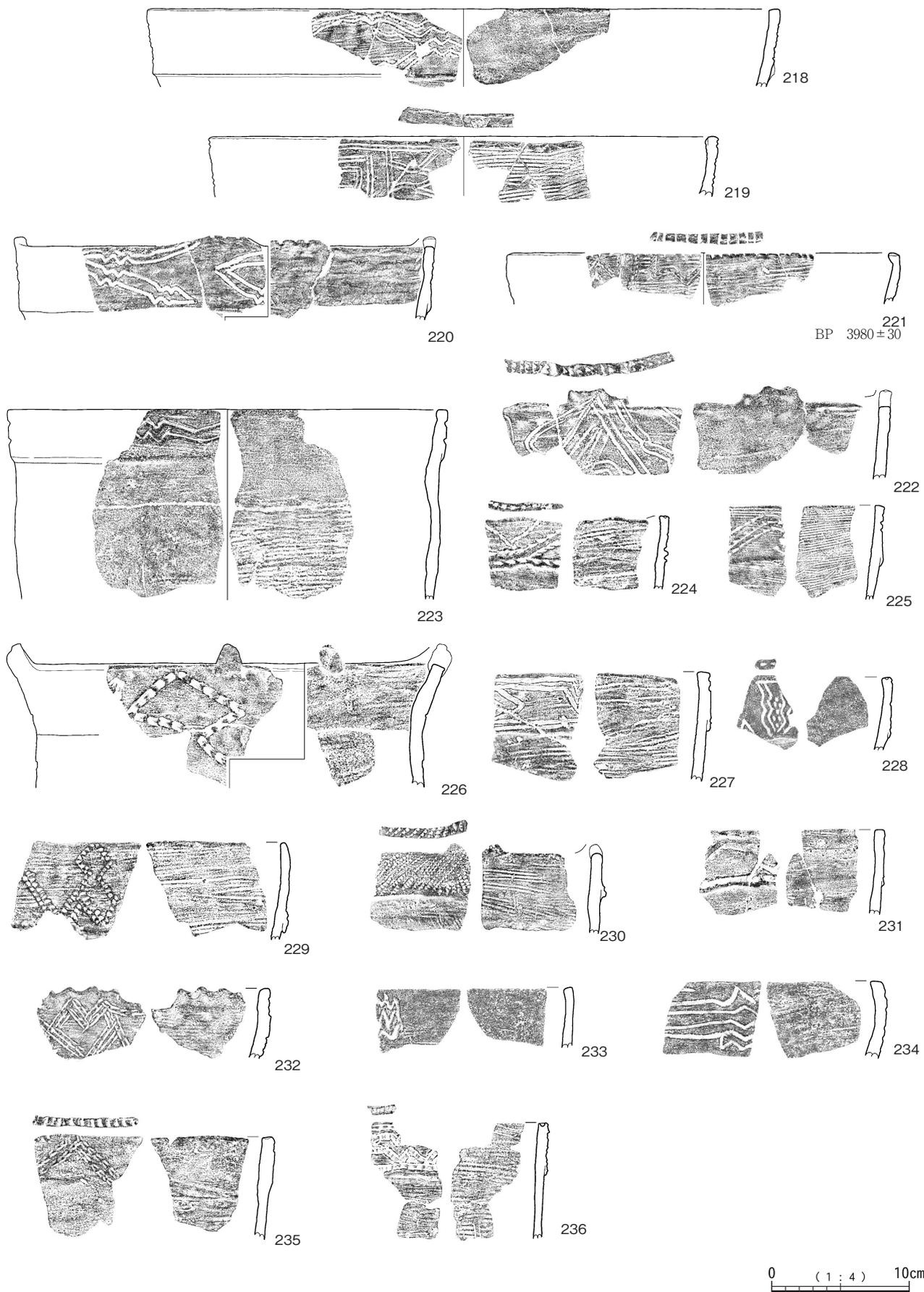
第26図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (4) 3-2



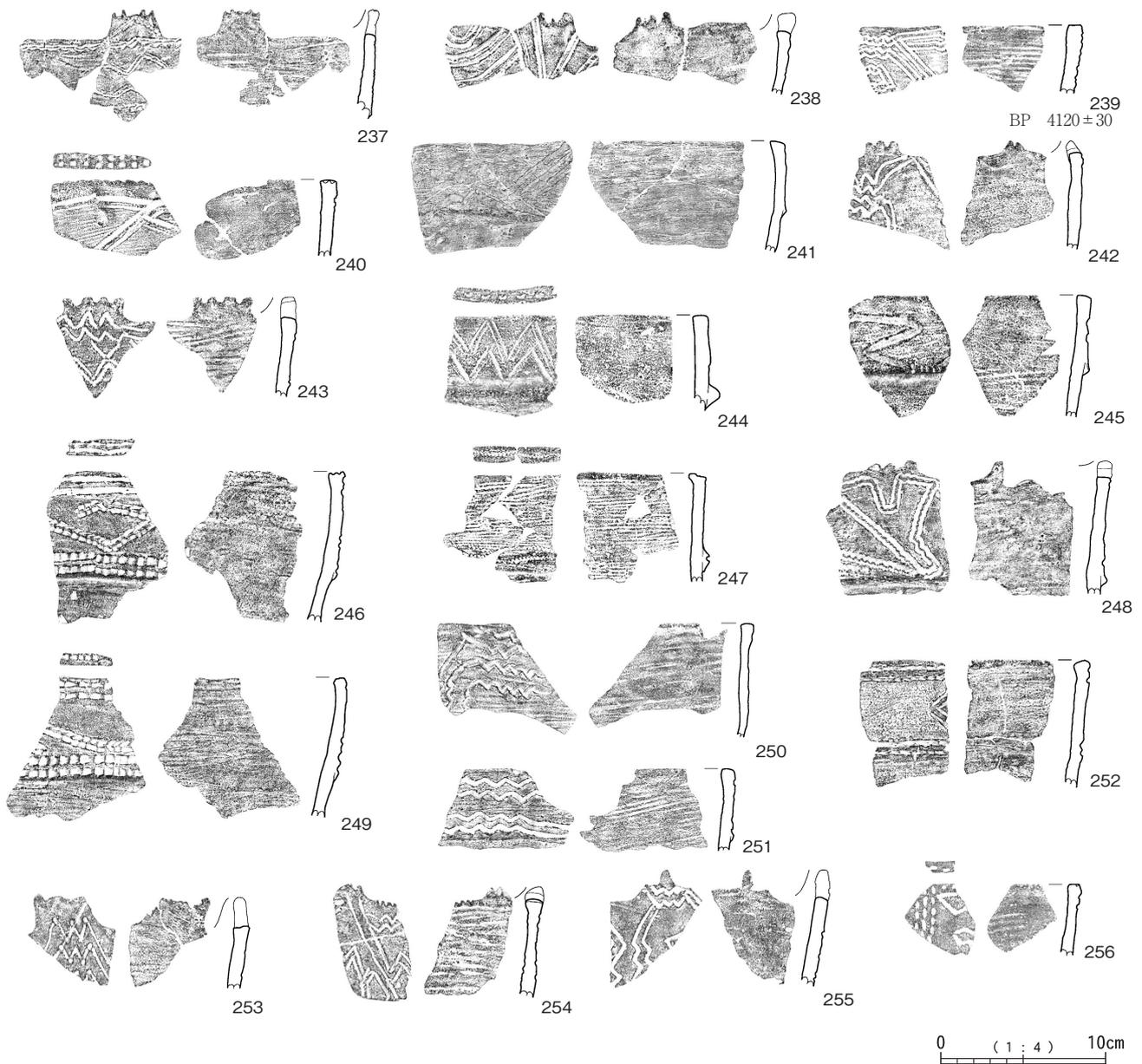
第27図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (5) 3-2



第28図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (6) 3-3



第29図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (7) 3-3



第30図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (8) 3-3

れる。47は非常に焼成がよく内外面に明瞭な条痕を残す。口縁部が内湾する（キャリパー形？）ことから本類として報告する。

2-2類 突帯貼付（轟木ヶ迫～南宮島段階）

48～70は、轟木ヶ迫～南宮島段階相当と考えられる一群で、胎土には滑石は含まれない。細いもしくは幅広の粘土紐を貼り付け、突帯で口縁部周辺に文様を作出する。突帯には押引文や刻目が施文される。

48～50は細く丁寧な突帯貼付文で、轟木ヶ迫段階の範疇に入る可能性もある。54・56・57は幅広で扁平の突帯を貼り付け、貝殻腹縁による押引文や刺突文が施文される。

58～67は細い粘土紐を口縁部下に貼付し、貝殻や工具による刺突を施すものである。突帯貼付痕は明瞭で粘土

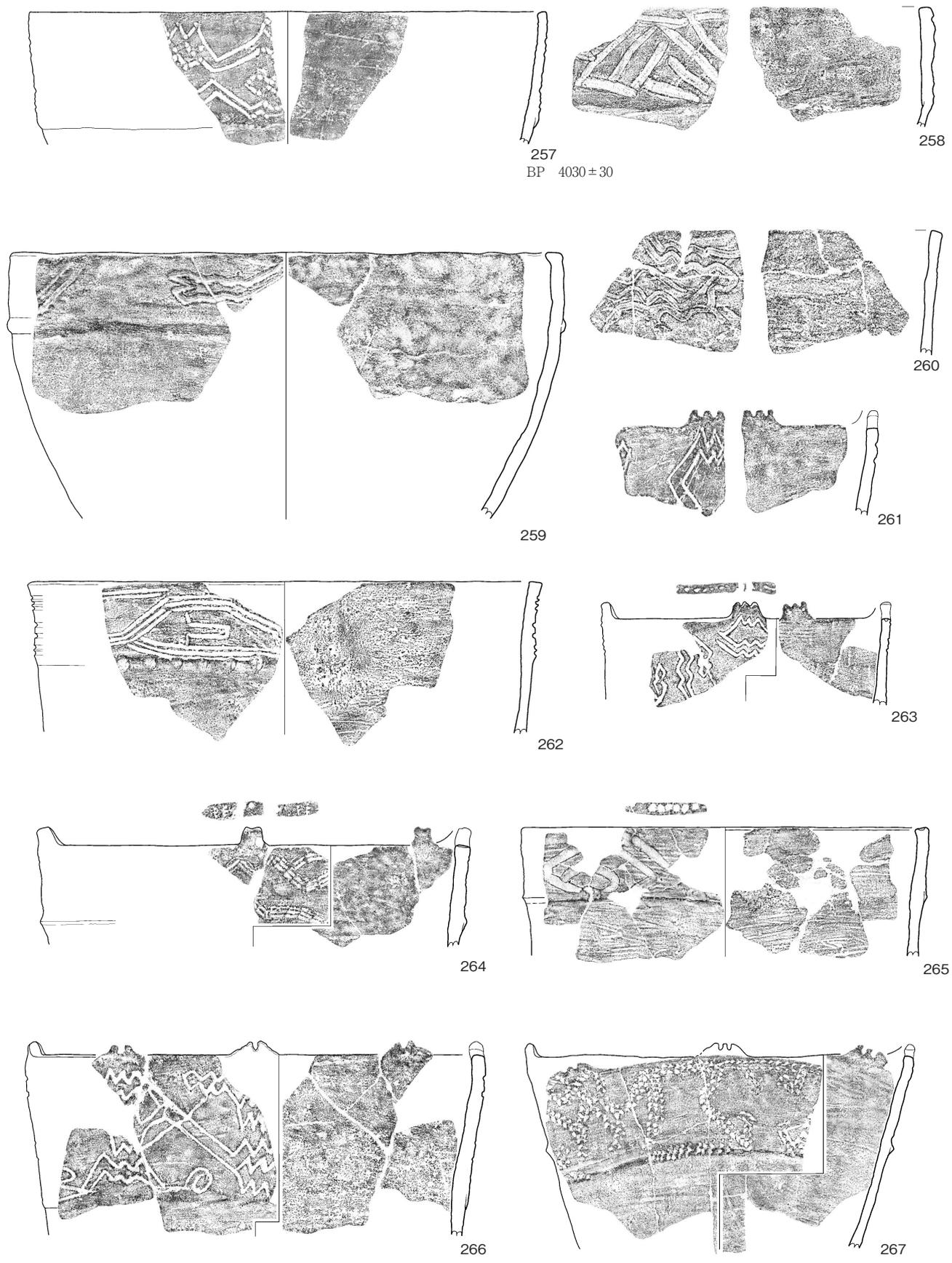
紐の形をそのまま残し、断面は丸い。内外面ともに貝殻条痕を明瞭に残る。68・69は口唇部にかけて細い粘土紐を貼り付けて連点文をつける。

2-3類 口唇端部突帯貼付（南宮島段階）

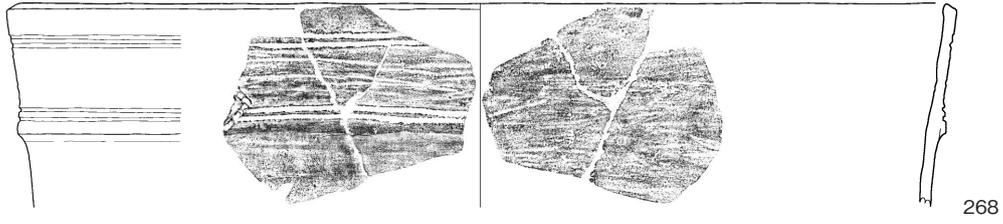
71～88は口唇端部に突帯を貼り付けるものである。貼り付け痕は明瞭に残し、突帯には連点文や貝殻腹縁による刺突文のほか、波状や粘土紐を捻り装飾するものなどがある。

3類 中尾田Ⅲ類土器 (89～288)

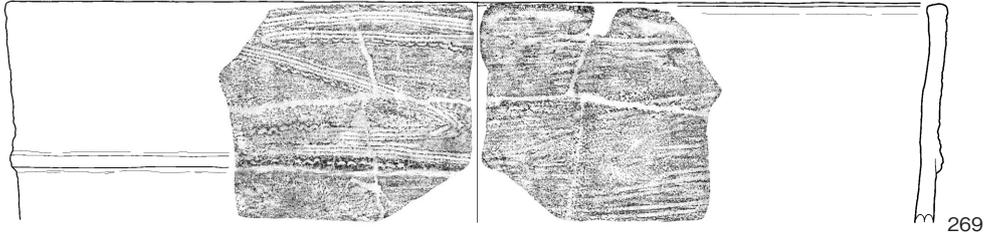
口縁部を肥厚させて文様帯とする一群である。口縁部は粘土帯を貼り付け、または折り返して肥厚させ、貼付痕・折り返し痕が明瞭に残る。文様帯となる肥厚部分には刺突文や貝殻腹縁による押引文、ヘラ状工具による沈



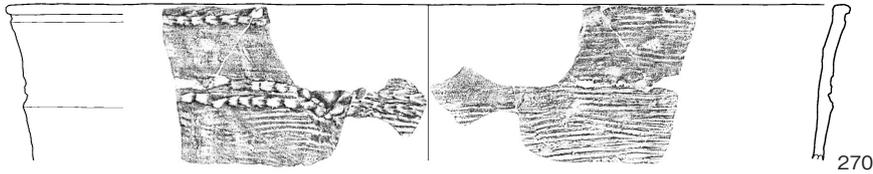
第31図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (9) 3-3



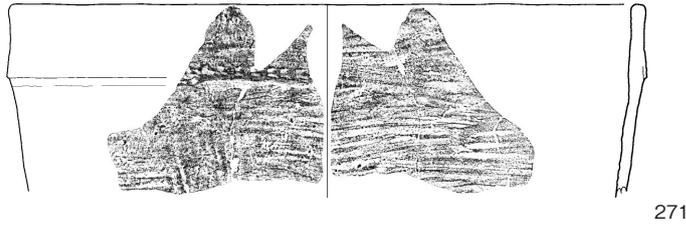
268



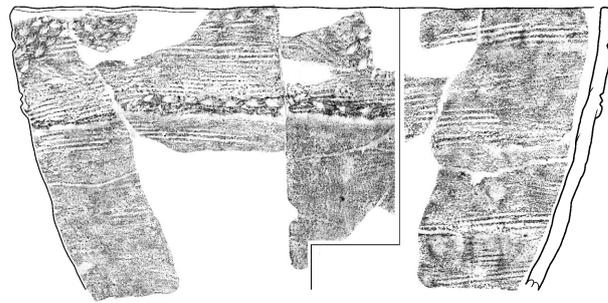
269



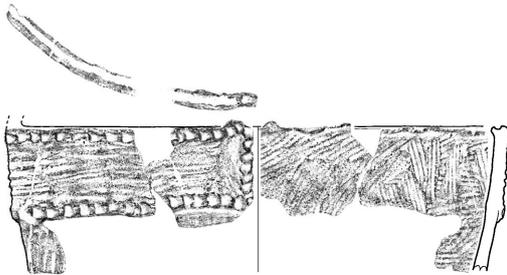
270



271



272



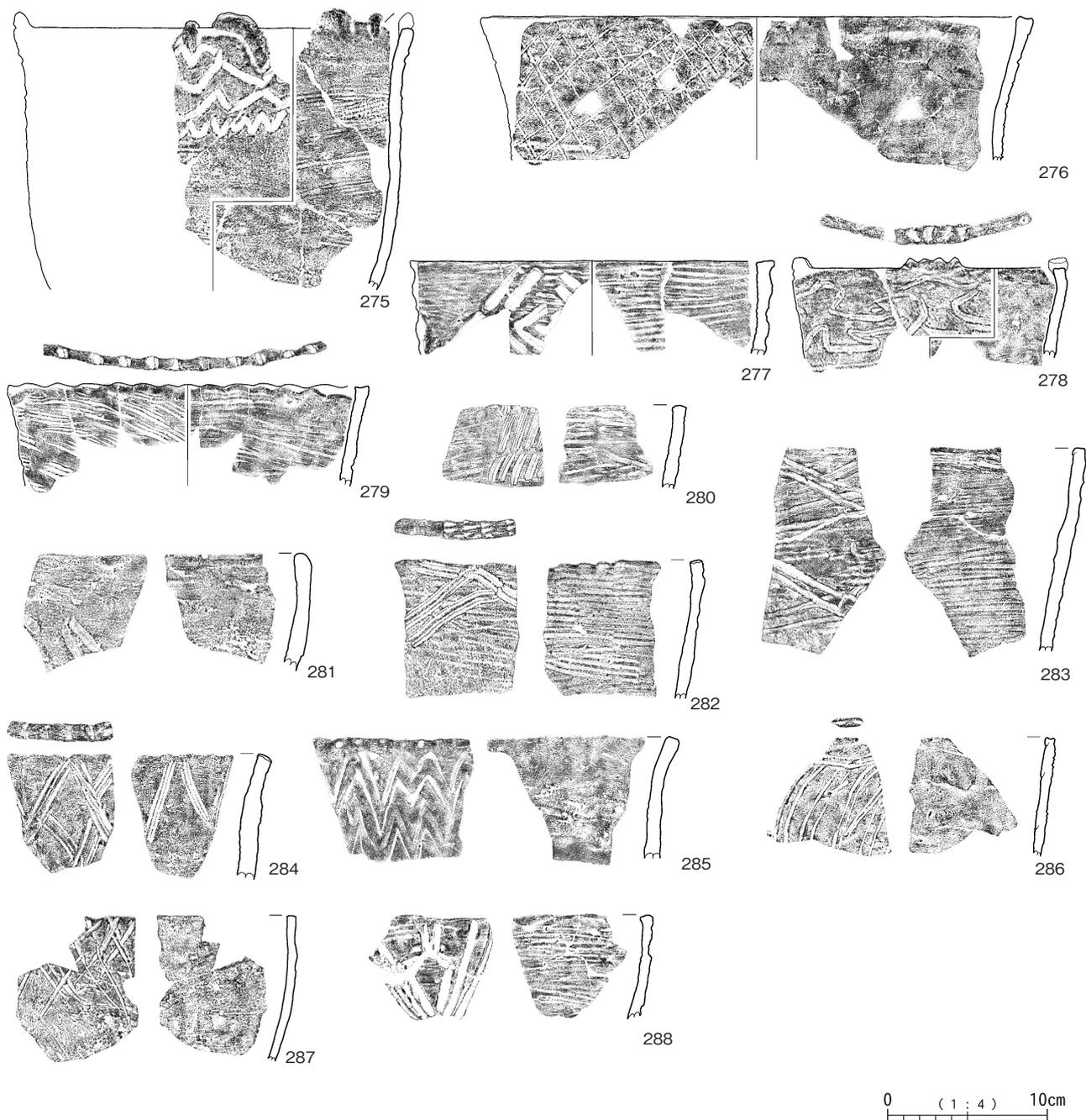
273



274

0 (1:4) 10cm

第32図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (10) 3-3



第33図 3類 中尾田Ⅲ類土器 (11) 3-4

線による鋸歯文、平行線文、沈線（幾何学文）などが施文される。口縁部は直口もしくはやや外反し、器形は砲弾形でやや胴部が張り、丸みを帯びる。

3-1類 突帯+沈線文

89~96は口縁部に四角形状の突帯を貼付して突帯に押引文・連点文を施文する。さらに突帯を巡るように沈線文を施し、文様帯を構成する一群である。

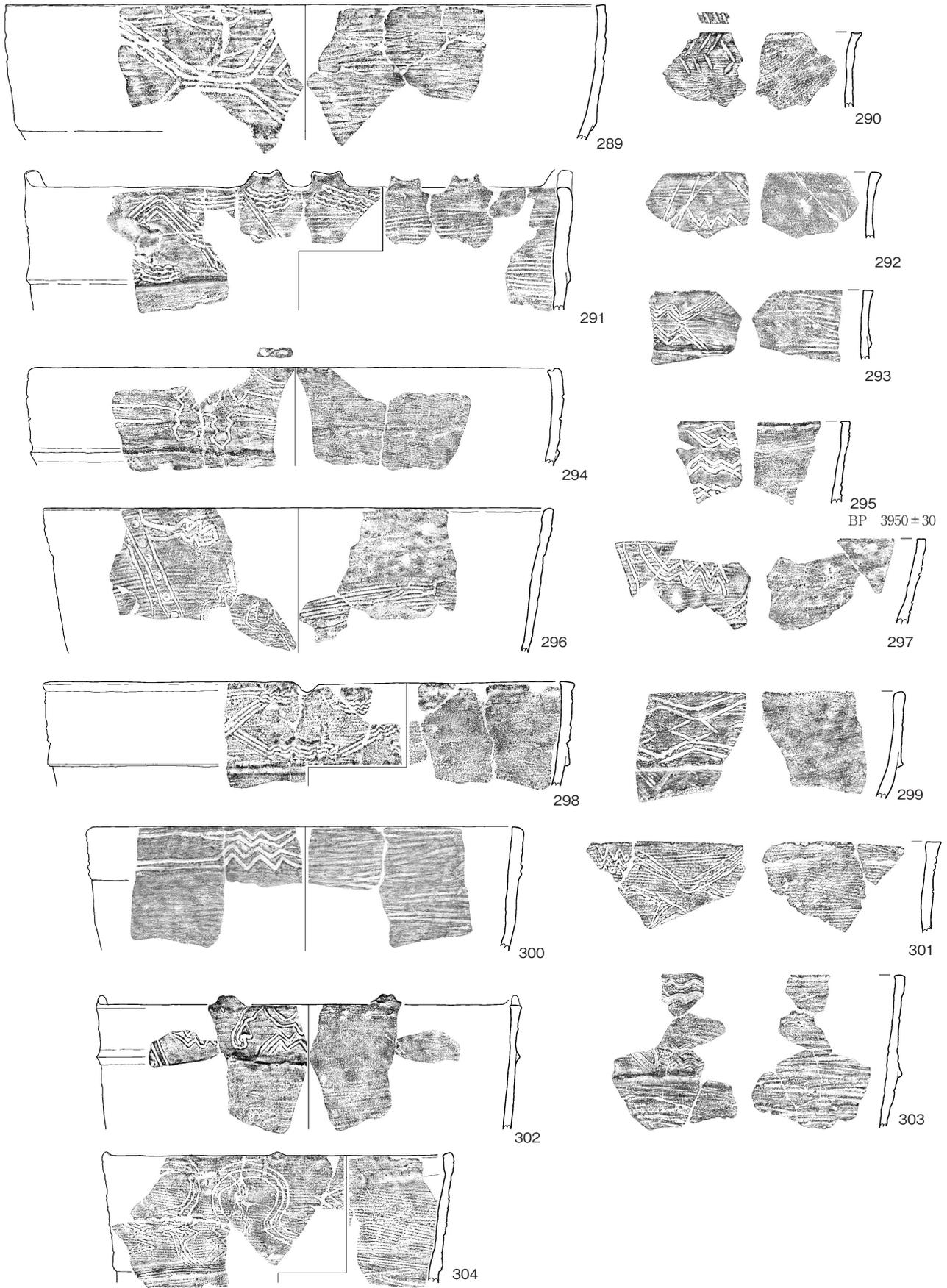
89と90、91と96は同一個体の可能性が高い。89・90は幅広で厚い粘土帯を貼り付け、口縁部下の文様帯をつくる。突帯部分にはヘラ状工具による押引文を施文し、突帯内側に沈線文を巡らす。91・96は突帯間に波状（渦巻

状）の沈線文をもつ。

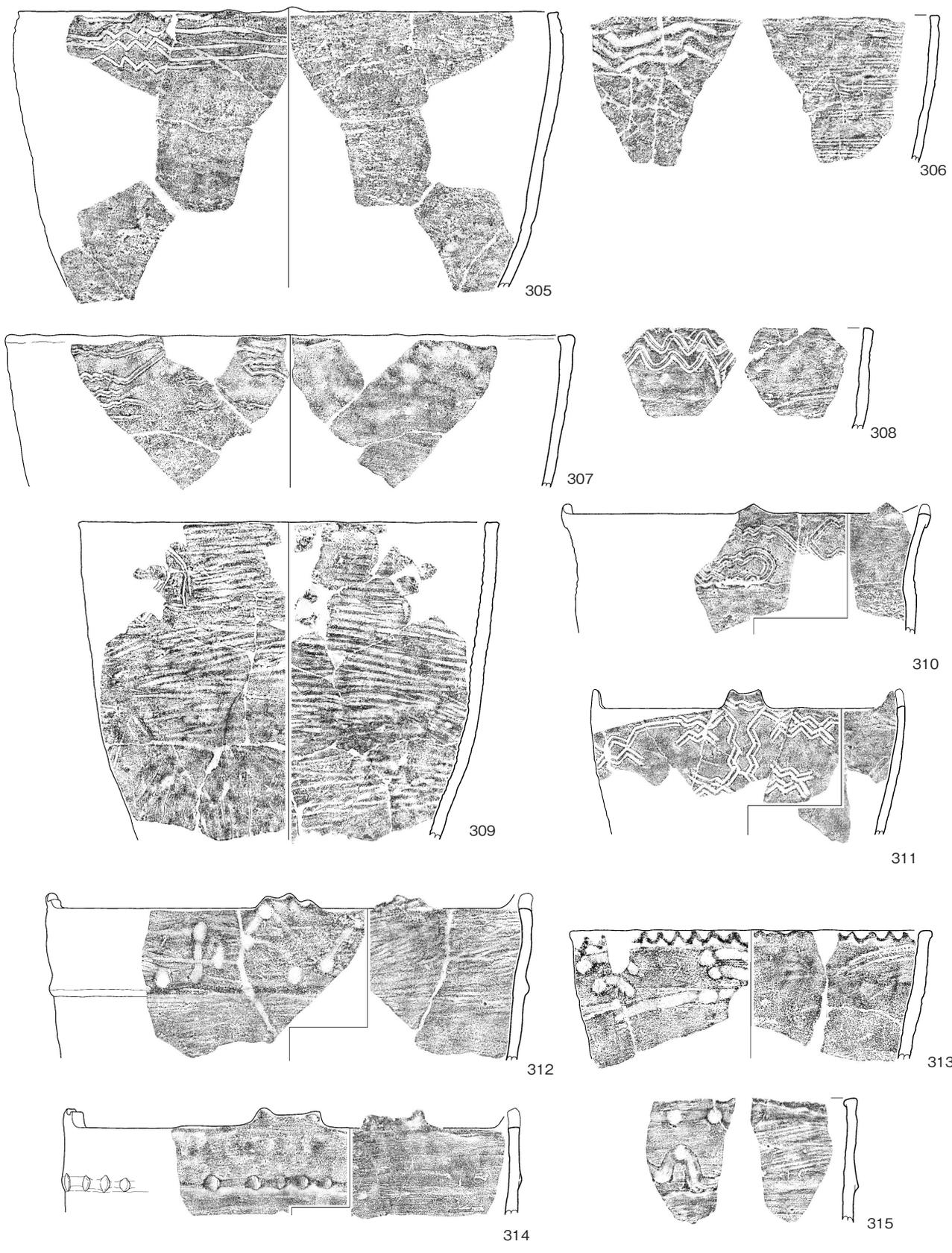
92~96はやや細い突帯を持ち、突帯周りに沈線文が施文される。97はT字状の幅広の突帯に沈線文と連点文を施文し、外面器壁には沈線文をもつ。突帯と沈線の組み合わせのものとして本類として報告するが、中期後半の範疇に入るものと考えられる。

3-2類 口縁部肥厚（幅狭）

98~170は口縁部を粘土帯で肥厚させ、幅狭の文様帯を構成させるものである。貼り付け痕は明瞭に残り、段を成す。器面調整は横方向の貝殻条痕が明瞭に残るものが多い。111には外面全面に煤が付着している。

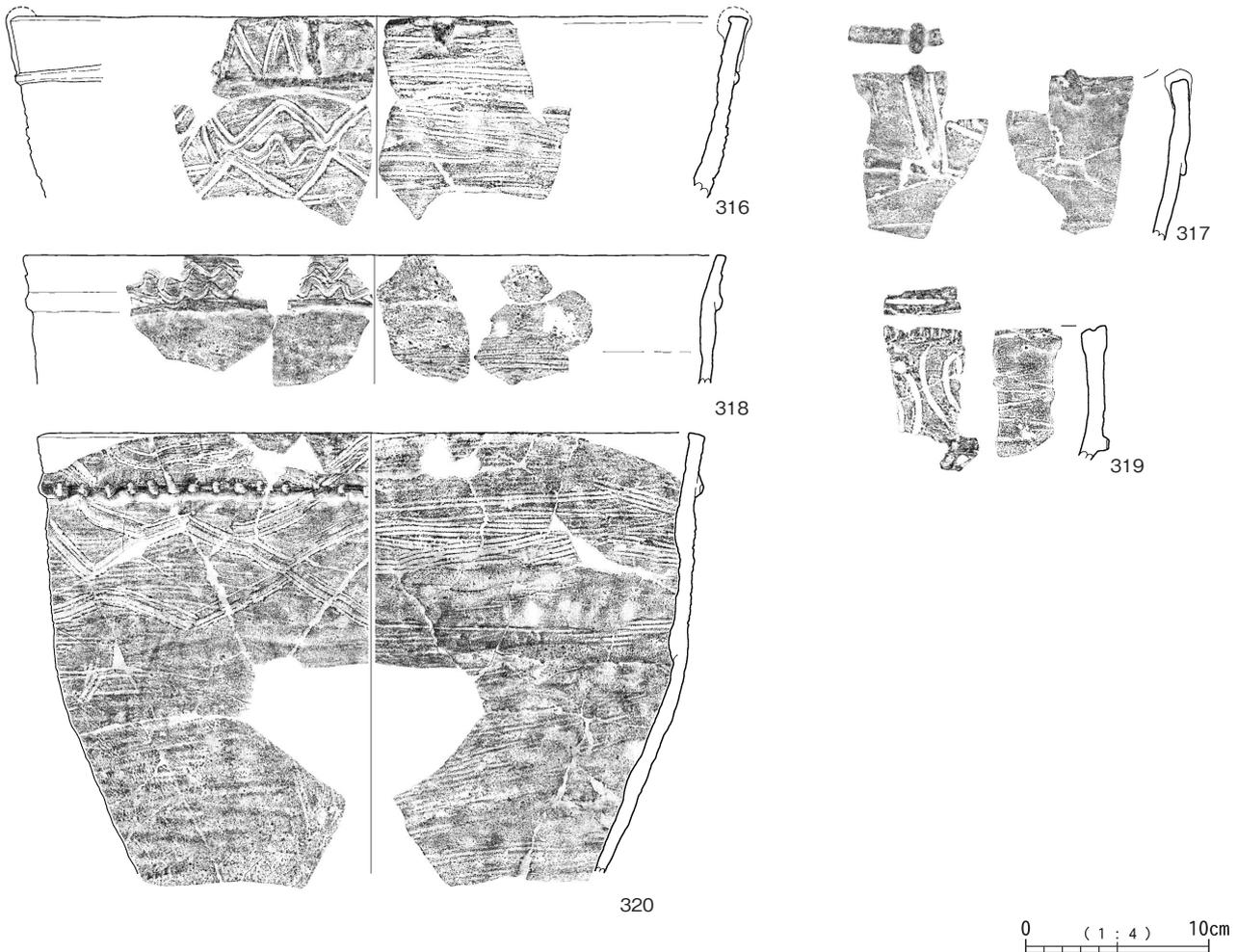


第34図 4類 大平式土器 (1) 4-1



0 (1:4) 10cm

第35図 4類 大平式土器 (2) 4-2・4-3



第36図 4類 大平式土器 (3) 4-4

98~126は一見口縁部下に突帯を貼り付けているように見えるが、口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁部下のみ突帯状の段を成形し、文様帯を作出する。文様は無文もあるが、突帯状の部分に刻目を施文するものも多い。

130~144は口縁部を肥厚し、断面四角形になるものである。肥厚部分の文様帯には貝殻腹縁による鋸歯文や刺突文、押引文が施文される。

145~170は口縁部を折り返し、口唇端部が先細りで断面三角形状を呈すものである。貝殻腹縁や沈線による鋸歯文などが施文される。

171~183は、口唇部を幅広で厚く肥厚させ、断面四角形のものである。文様帯には深い短斜の凹線や押引文などが施される。175は胴部に補修孔と思われる穿孔がある。183は口縁部下位の貼り付け痕が丁寧にナデ消し、沈線による鋸歯文が施文される。内面には粘土帯積み上げ痕と指頭圧痕が明瞭に残る。

184~198は幅狭の断面四角形の口縁部を呈し、明瞭な段を持つものである。184~192は直口縁で縦方向の貝殻刺突などが施文される。193~198は山形の突起をもった波状口縁になるものが多く、文様も押引文や沈線文など

が施される。

3-3類 口縁部肥厚 (幅広)

199~274は幅広の文様帯をもつものである。文様帯との境は粘土帯を張り付けて肥厚させた接合痕によって段を成す。文様はヘラ状工具による細沈線文や幅広の沈線文・押引文・貝殻刺突等で山形・菱形・鋸歯・亀甲文などを施文する。

器形は砲弾形と山形の突起をもつ波状口縁のものがある。砲弾形の器形的な特徴や文様の構成は4類 (大平式) と非常に類似する。器面調整はナデ調整と横方向の貝殻条痕を明瞭に残す2つのパターンがみられる。口縁部断面は四角形状を呈し、突起や口唇部に刺突文・連点文などが施文されるものもある。

215は口縁部下にも沈線文が広がる。226は他と比して口縁部が外反しており器形が異なるが、段を境に文様帯をもつものとして本類として報告する。262は段の部分に刺突を施す。266は内面に赤色顔料が明瞭に残る。269は沈線と貝殻刺突で沈線文風に施文し、曲線状の文様を施文する。

270~274は沈線文ではなく、口縁部と段に押引平行文



第37図 5類 並木式土器 (1) 5-1・5-2

を施文するものである。内外面の貝殻条痕の調整痕が明瞭に残る。

3-4類 全面施文

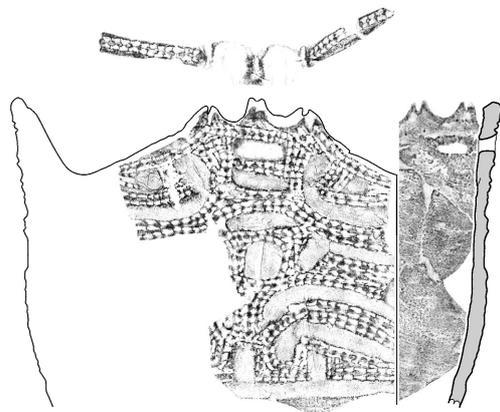
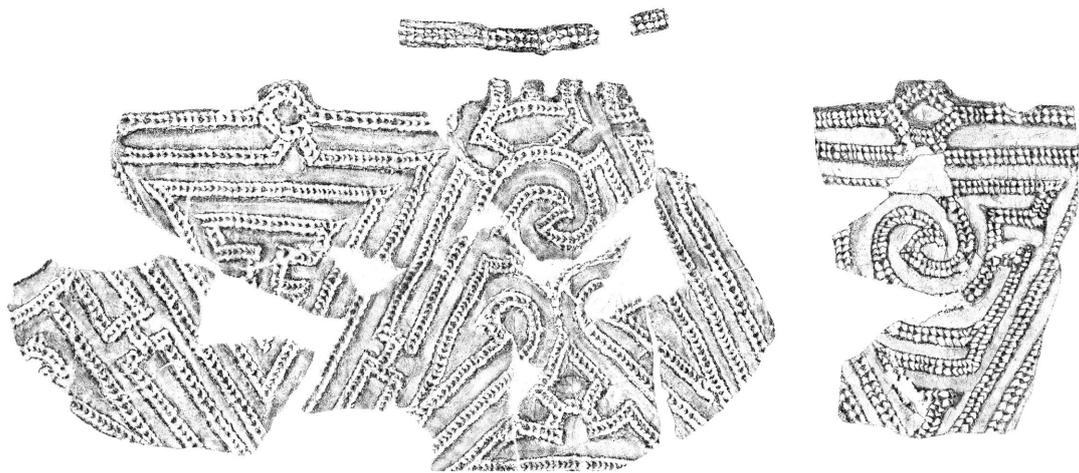
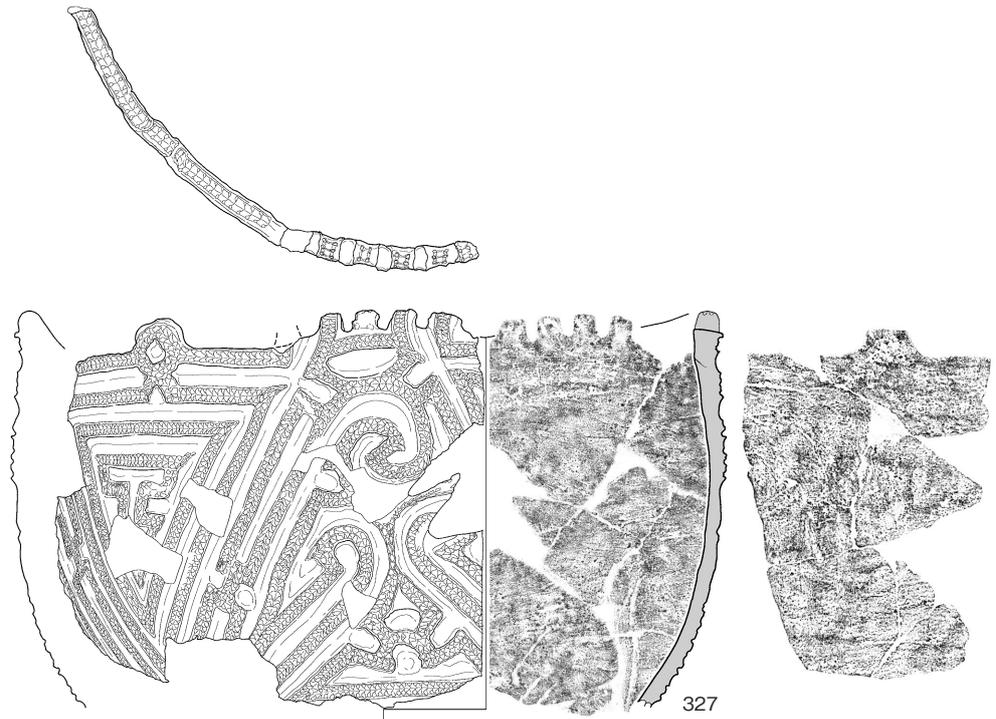
形態的には口縁部は肥厚せずに、砲弾形もしくはやや外反するもので、外面に沈線文などで山形文や格子文などが施文される。形態や施文モチーフ、細沈線文等の特徴から本類として報告するが、一部は後期相当のものの可能性がある。275は2-2類にみられるような細い粘

土紐を口唇部に貼り付け、外面には沈線で山形文が施文される。276は浅細沈線で斜格子文が施文される。

278や284などは沈線文内に工具の筋痕が残るものもある。

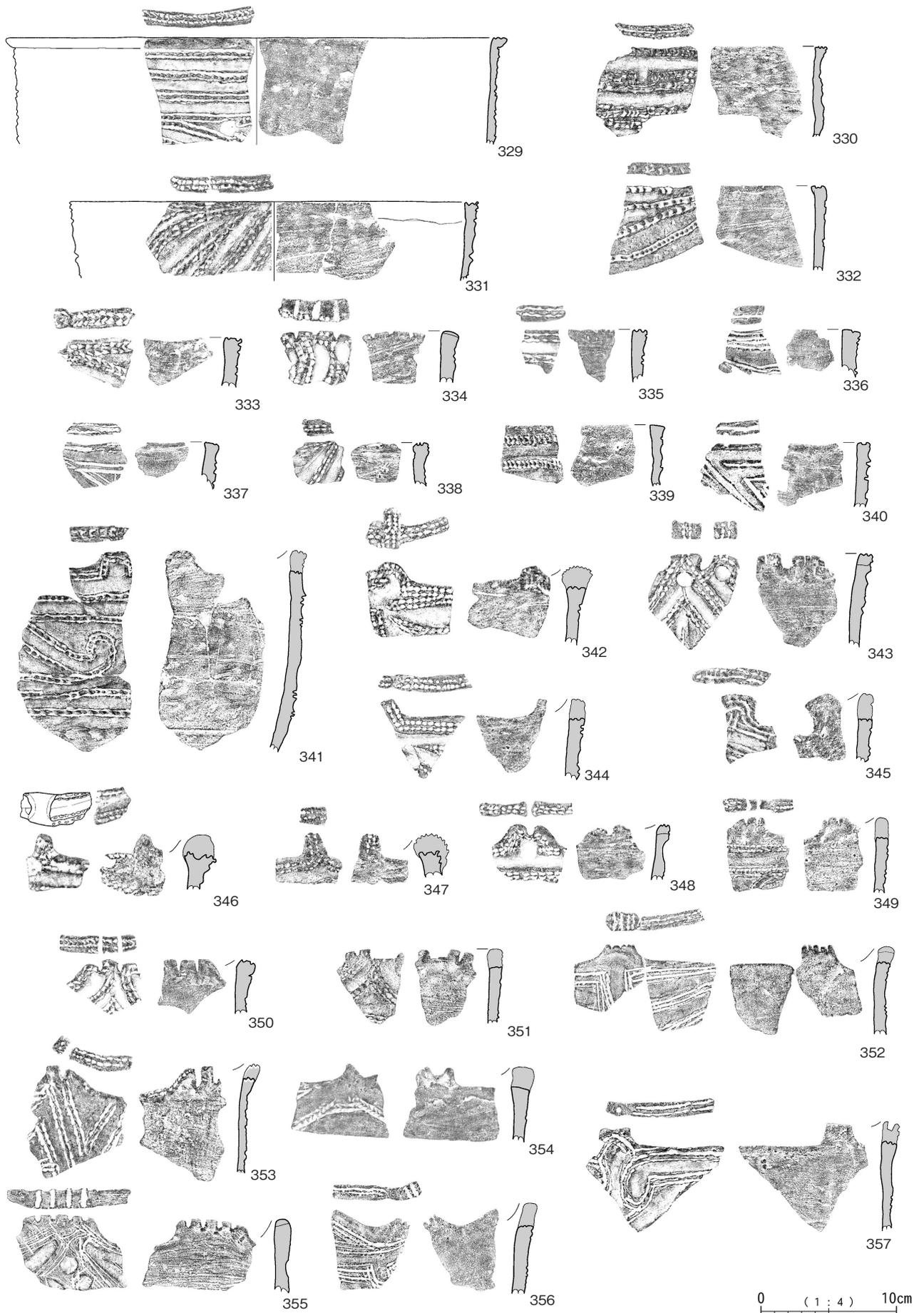
4類 大平式土器 (289~320)

砲弾形の形状を呈し、口縁部上位を肥厚させて段を成し、幅広の文様帯をもつ。4類の文様の特徴として、ヘラ・櫛状工具によって細沈線で山形・菱形・鋸歯・亀甲

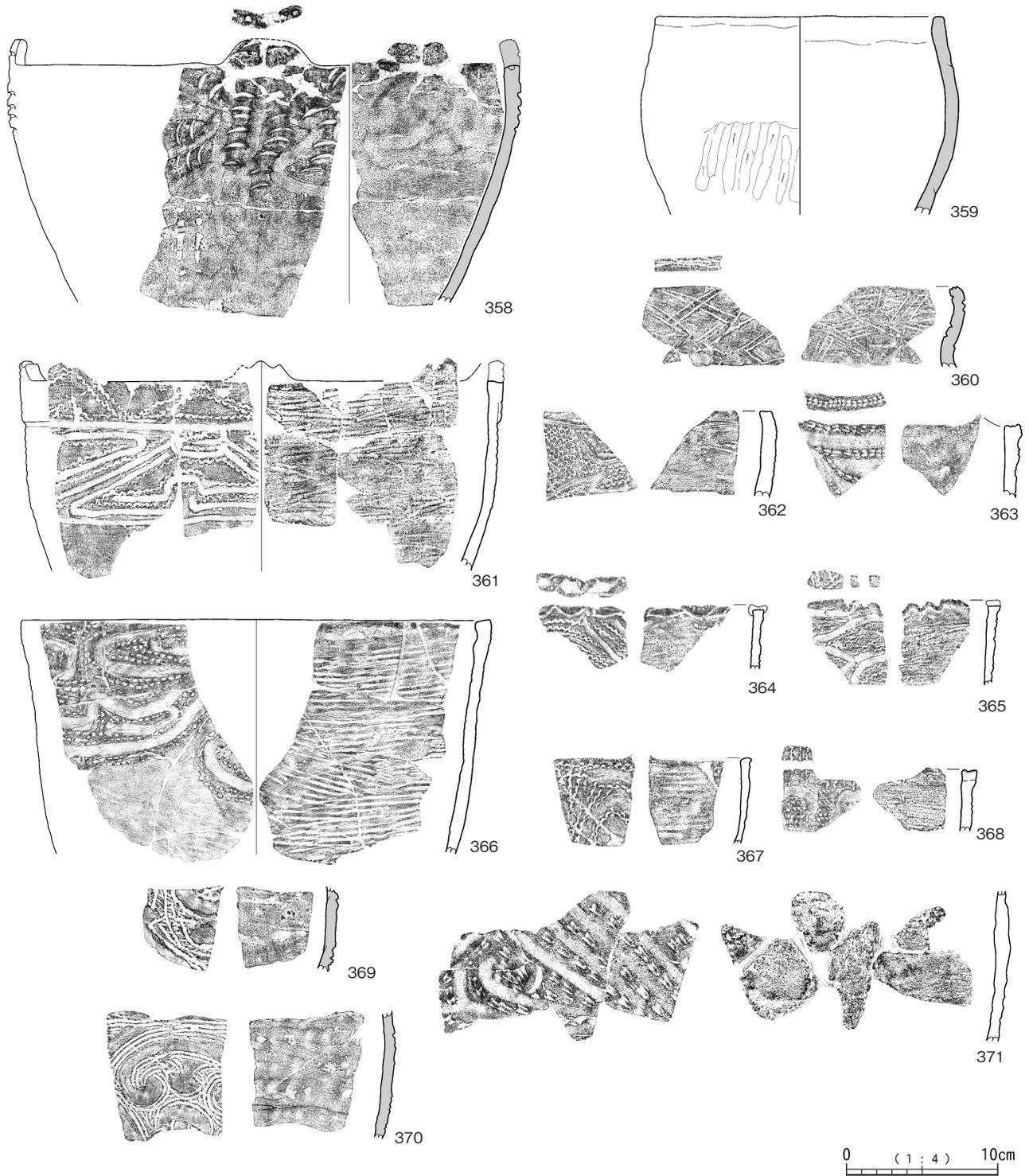


0 (1:4) 10cm

第38図 5類 並木式土器 (2) 5-2



第39图 5類 並木式土器 (3) 5-2



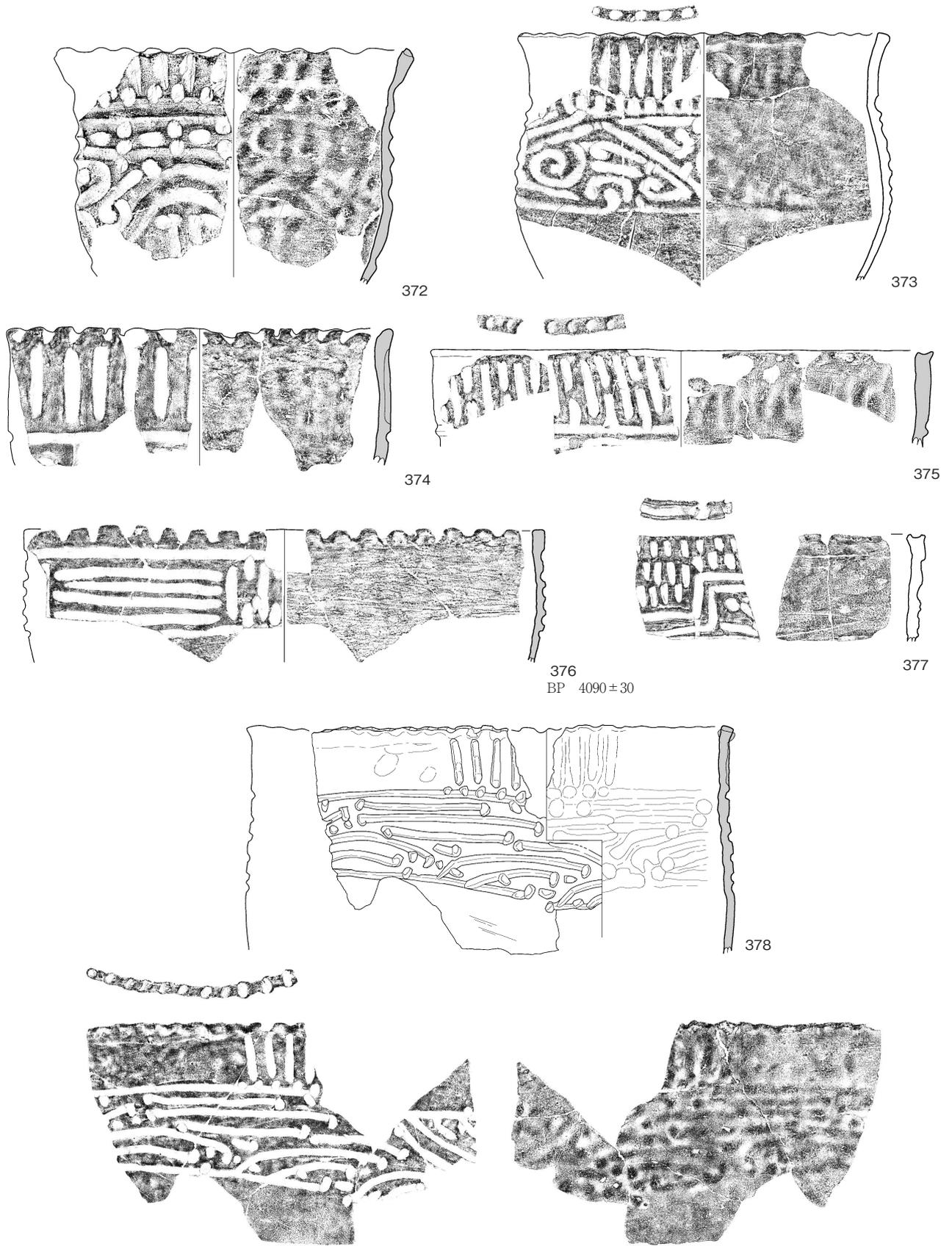
第40図 5類 並木式土器 (4) 5-2

文などが施文される。口縁部には山形突起をもつものもある。

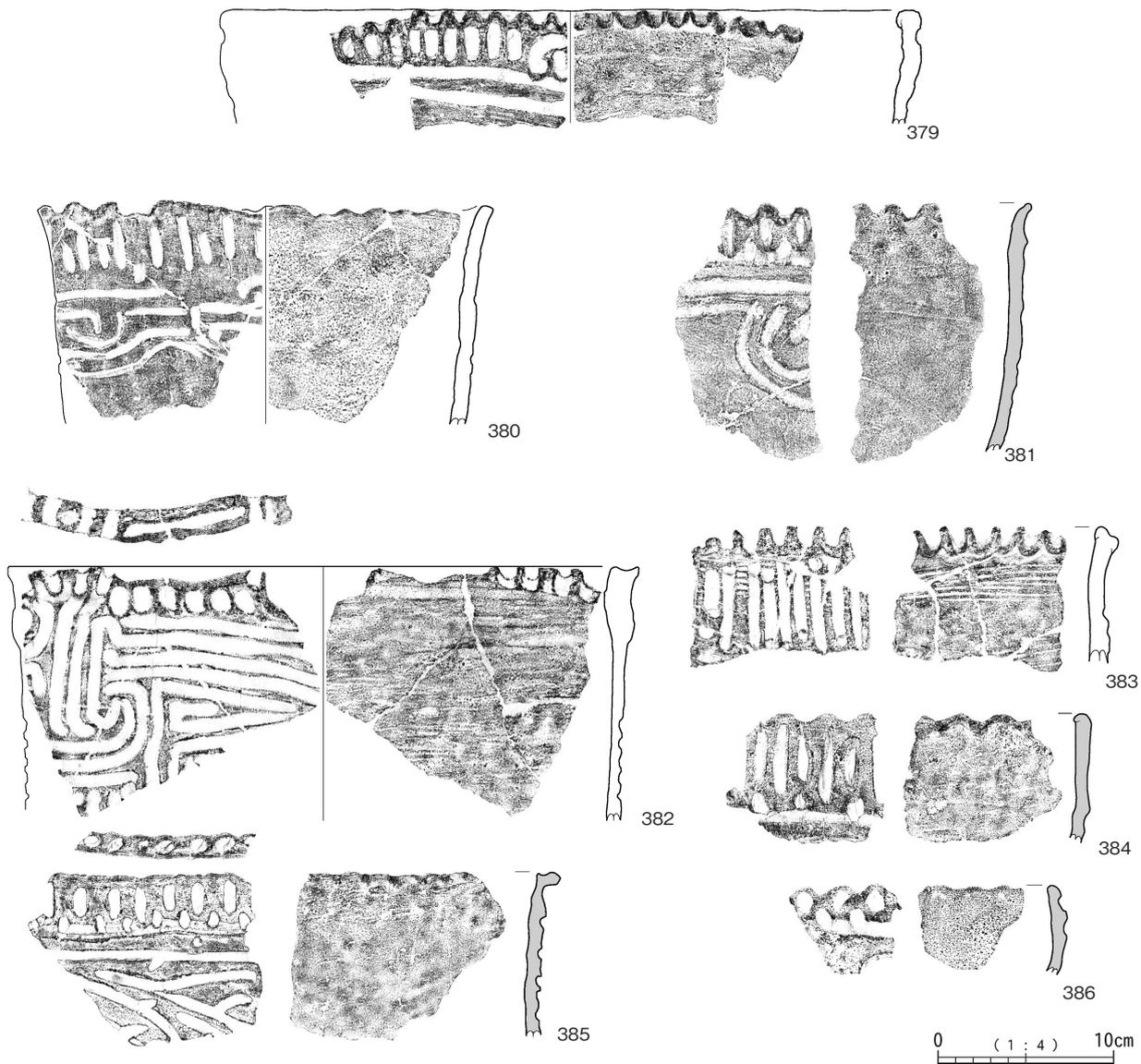
口縁部下位に段をもつもの(4-1類)、段を持たない・不明瞭なもの(4-2類)がある。段を持つものは段を区画として段上位を文様帯としており、段が不明瞭なものも概ね口縁～胴部上位まで文様帯としている。また、段を持たず口縁部下位に突帯を貼り付けて、文様帯との境とするもの(4-3類)もあるが、境となる突帯

下にも文様が広がるものもある。

なお、4類の形態的特徴を持ちながら、曲線の凹線文を施文するもの(4-4類)もあり、他型式との影響がみられる変容的なものもある。器面調整は横方向の貝殻条痕のちナデ調整が基本で、貝殻条痕が明瞭に残るものが多い。



第41图 6类 阿高式土器 (1) 6-1



第42図 6類 阿高式土器 (2) 6-1

4-1類 口縁部下位に段

289~304は口縁部下に段をもち、幅広の文様帯をもつもので、いわゆる大平式中段階に相当するものである。口縁部下位に粘土紐を貼り付けて、段を作出しており、段の粘土帯の接合痕は丁寧にナデ消している。口縁部は断面四角形で端部はあまり丸くならず稜をもつ。

文様は2~3条単位の鋭い沈線による鋸歯文や幾何学文が施文される。

304は器壁はやや薄く、器面調整は内外面ともに横方向の貝殻条痕を明瞭に残す。

4-2類 段が不明瞭・なし

口縁部下位に段をもたずに2~3条の細沈線で山形文などを施文する。4-1類と比すると、文様単位はもつが、やや崩れたものもある。305は、器壁がやや厚く、胎土には角閃石や石英が目立つ。外面には煤が付着している。309は焼成が良く、内外面ともに貝殻条痕が明瞭

に残る。310は口縁部が外反し、屈曲部を境に3本単位の沈線で波形・山形文が施文される。胎土には角閃石が目立つ。311は焼成が良く、2本単位の沈線で山形文を一定の区画で施文される。

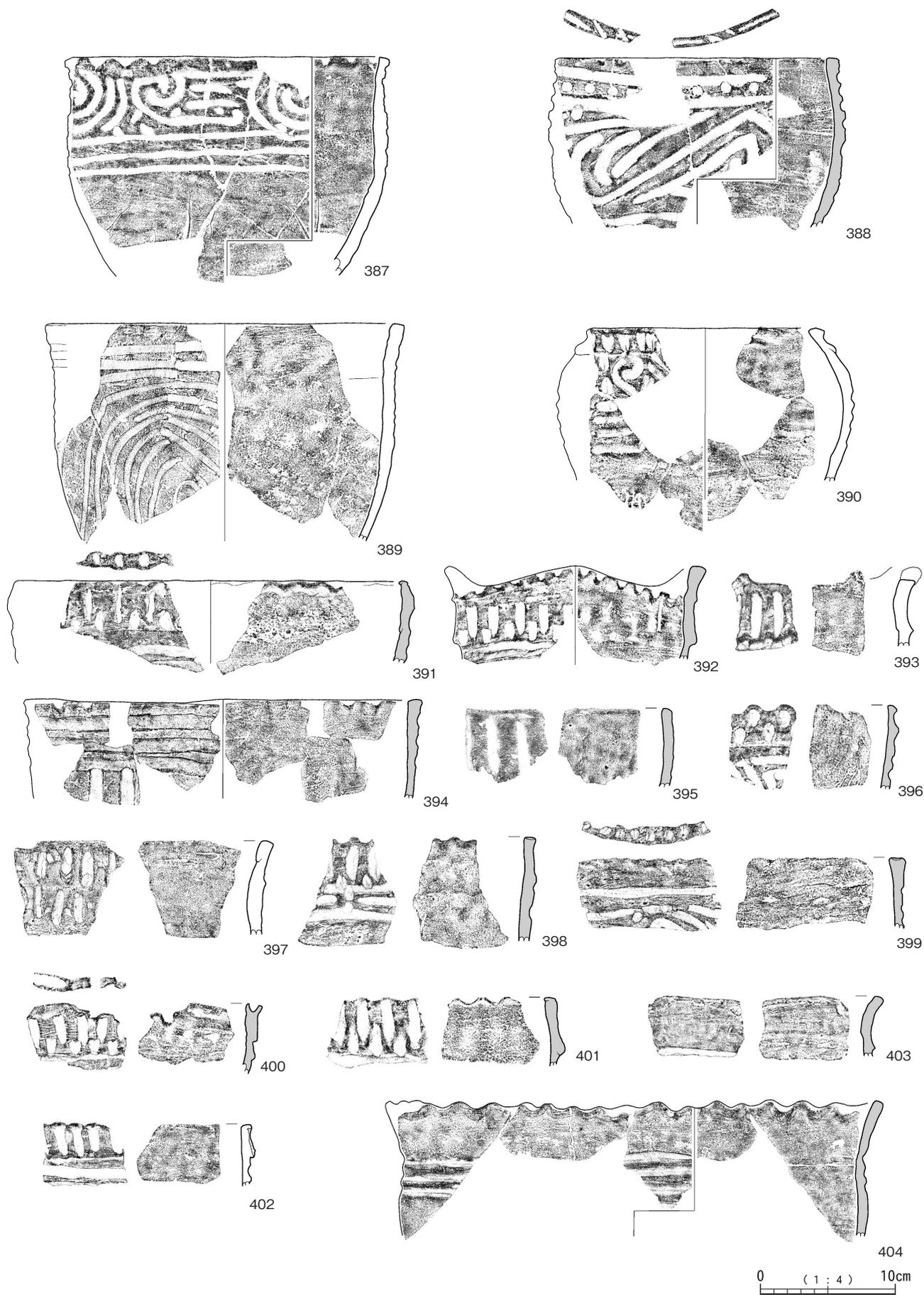
4-3類 凹線文

文様が細沈線文ではなく、幅広の太形凹線文のものである。口縁部下位に段をもつ、または段はもたずに凹線によって文様帯との境を構成する。312・313のように文様の末端に鉤手状に短凹点が入る。

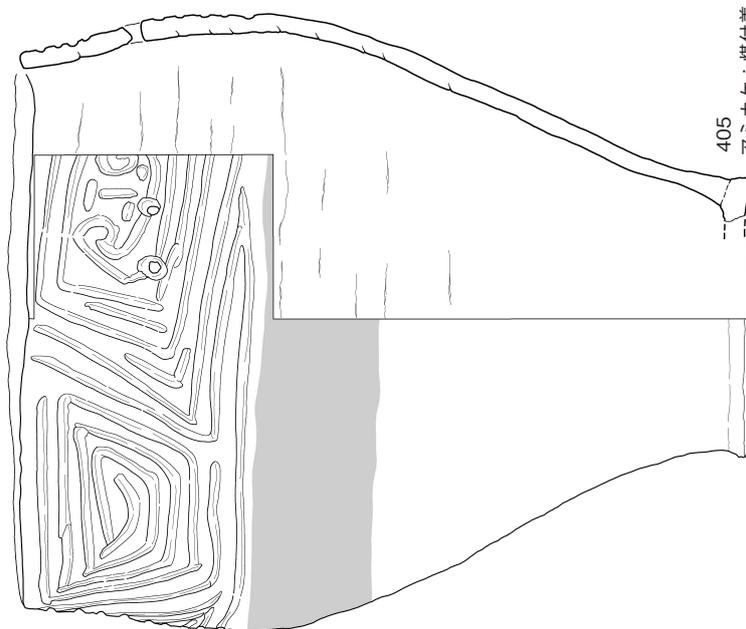
312は胎土がやや粉っぽく、内面には煤が薄く付着している。314は段部分に刻目がつき、内面には赤色顔料が付着している。

4-4類 突帯

口縁部下位に段ではなく、明瞭な突帯を作出するものである。突帯から上位を文様帯とする317~319と、突



第43図 6類 阿高式土器 (3) 6-1

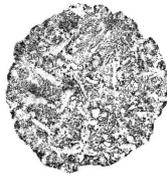


0 (1:4) 10cm

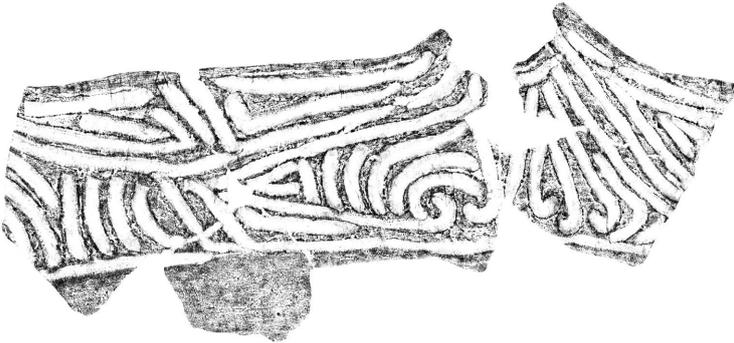
第44図 6類 阿高式土器 (4) 6-2



406

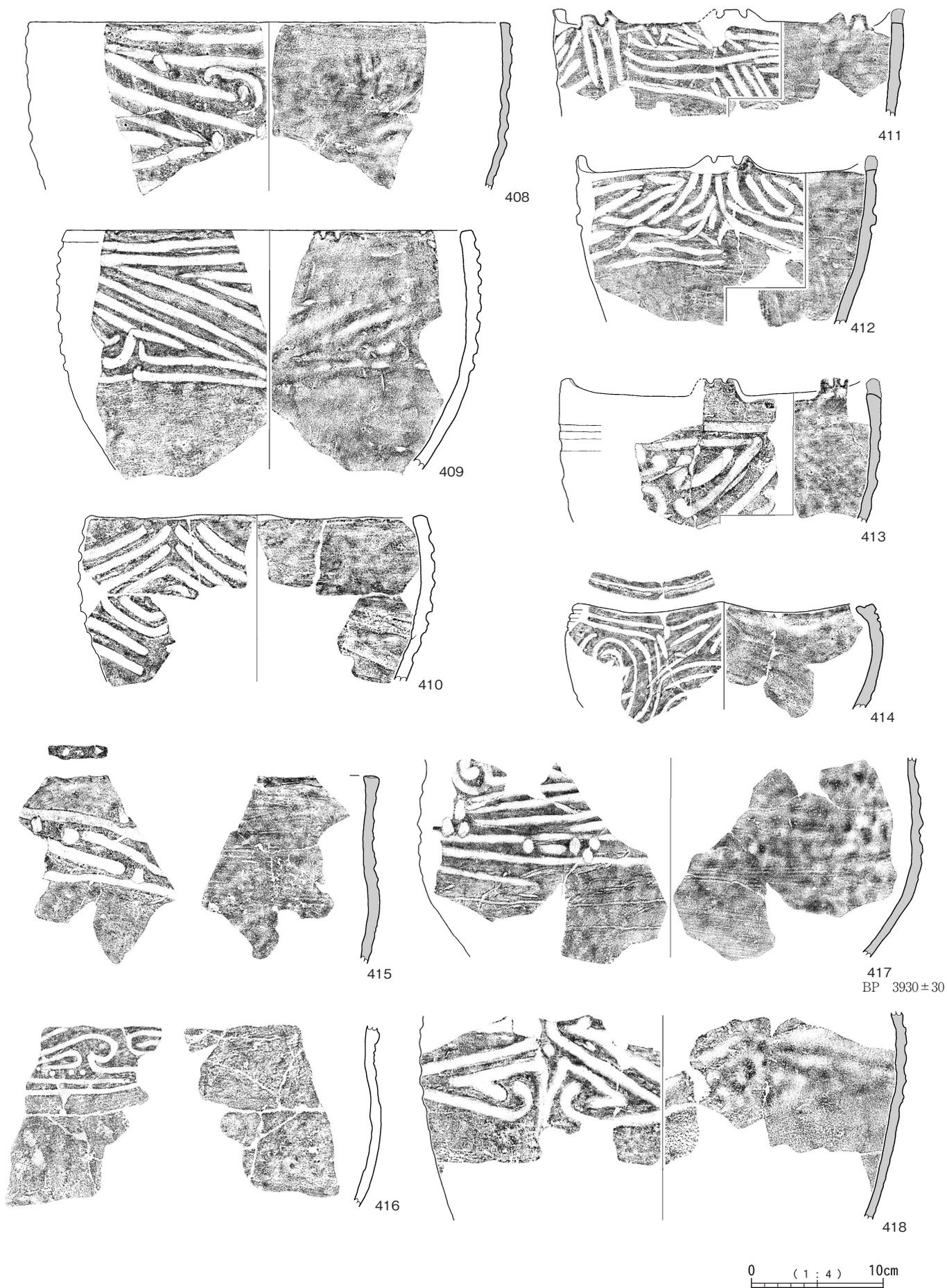


407

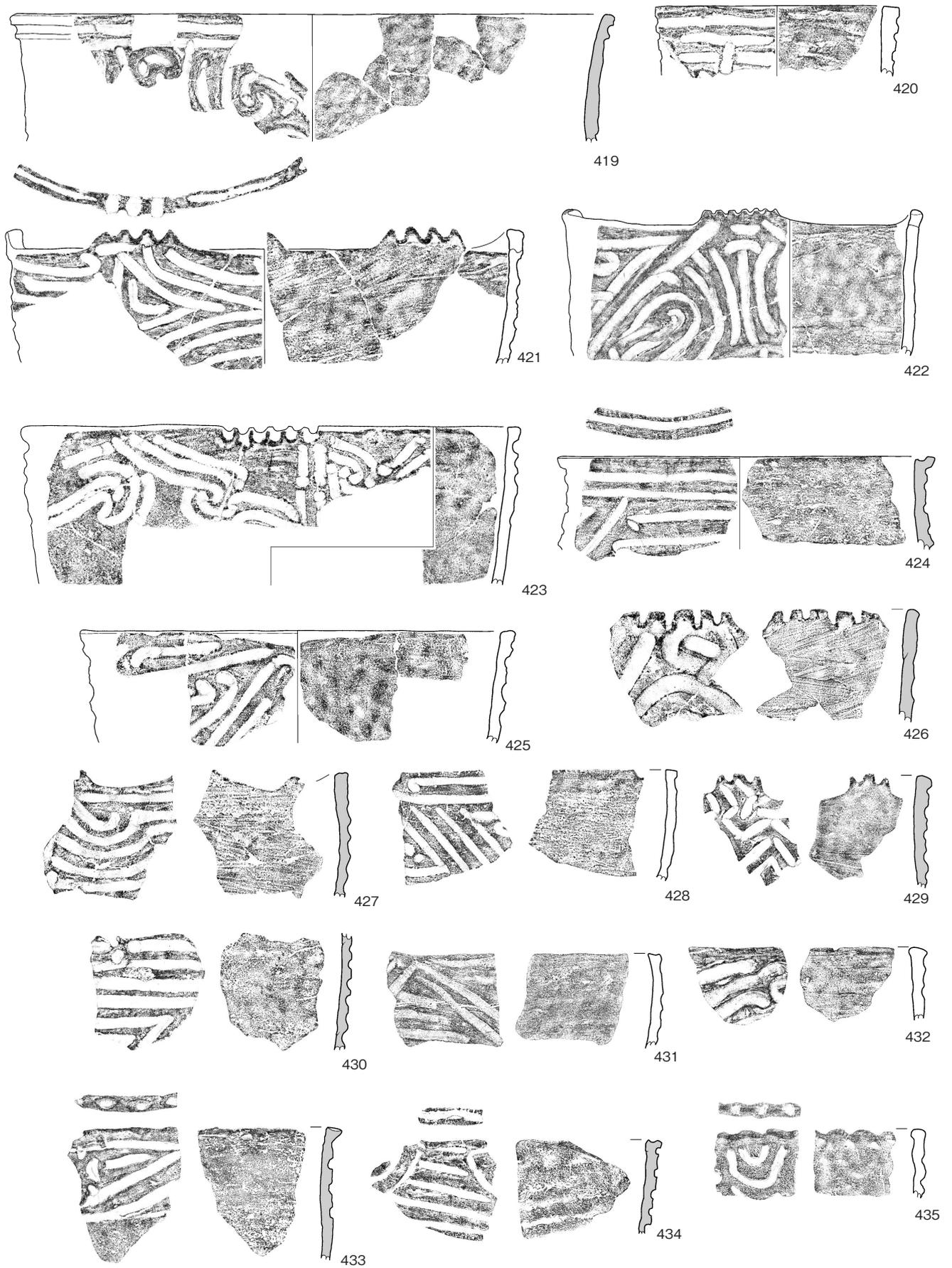


0 (1 : 4) 10cm

第45図 6類 阿高式土器 (5) 6-2

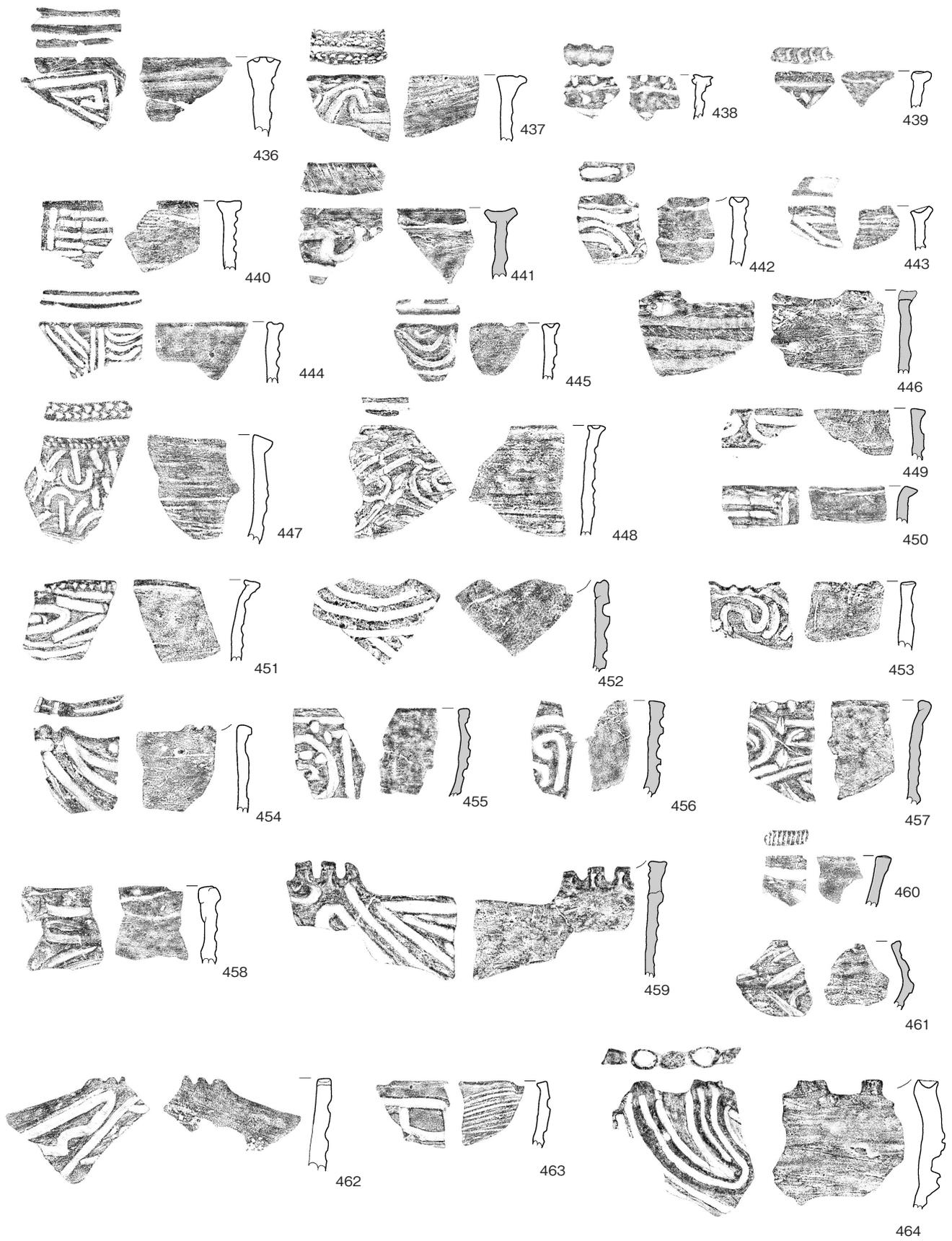


第46図 6類 阿高式土器 (6) 6-2

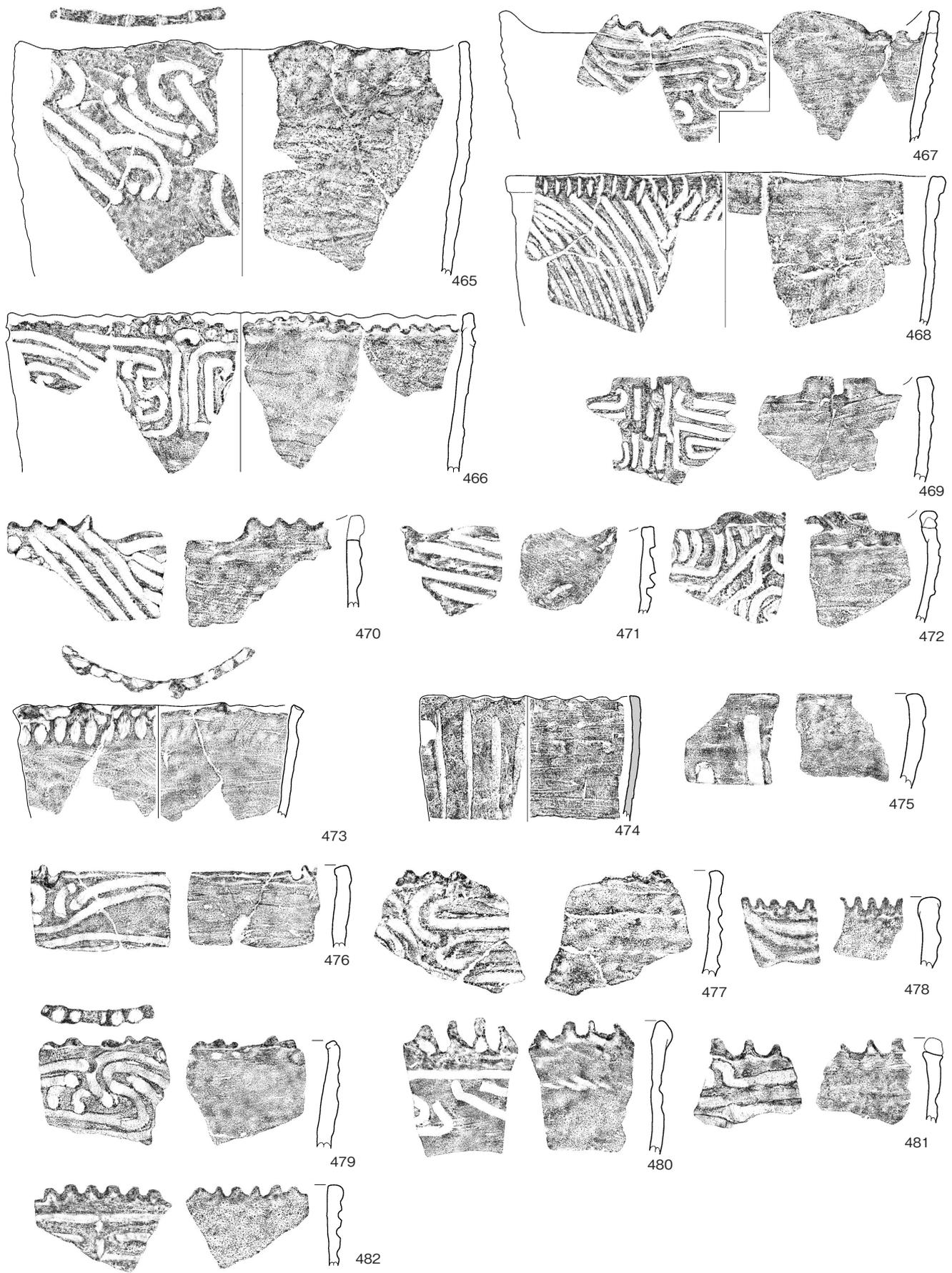


0 (1:4) 10cm

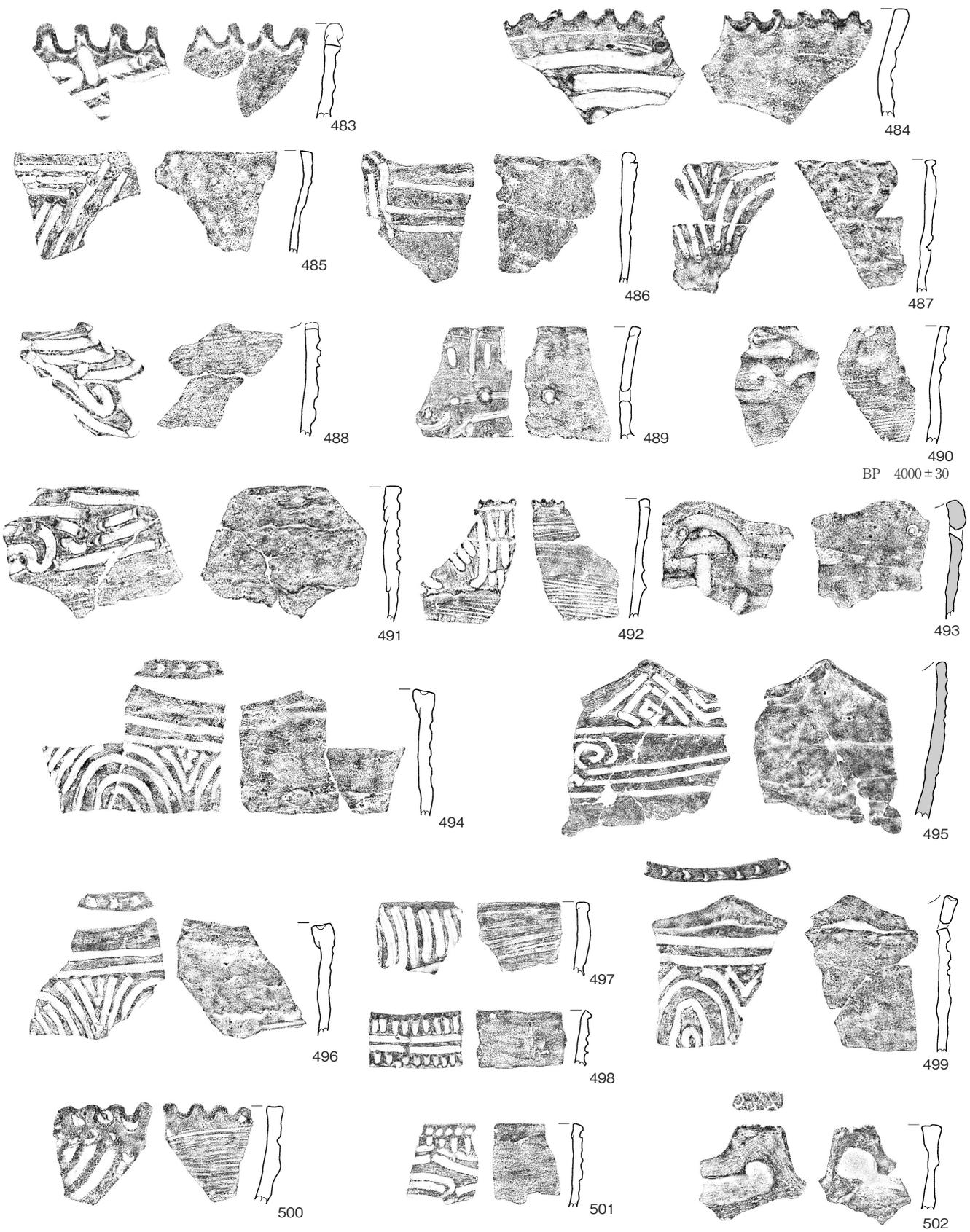
第47图 6类 阿高式土器 (7) 6-2



第48图 6類 阿高式土器 (8) 6-2

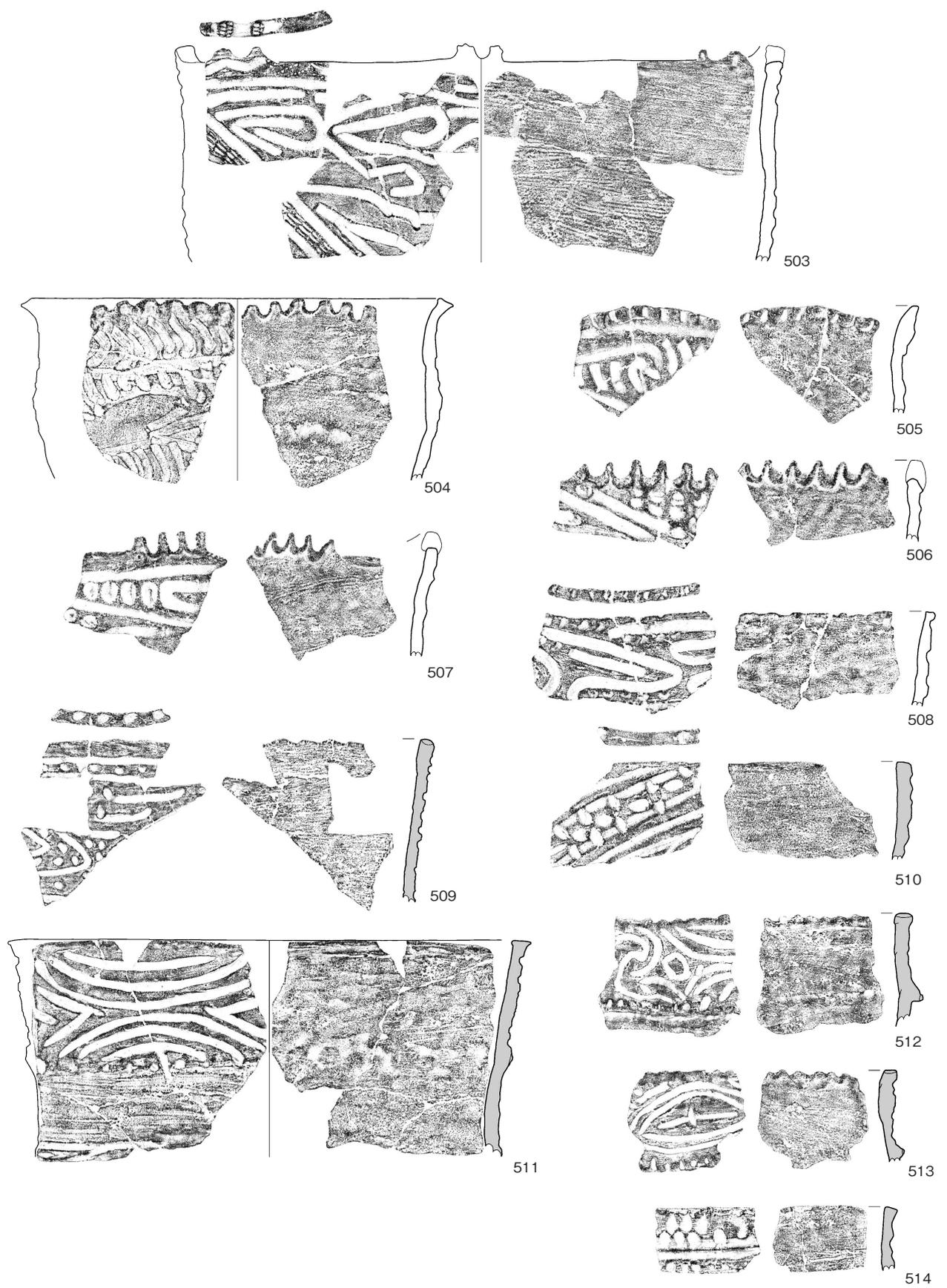


第49图 6類 阿高式土器 (9) 6-2



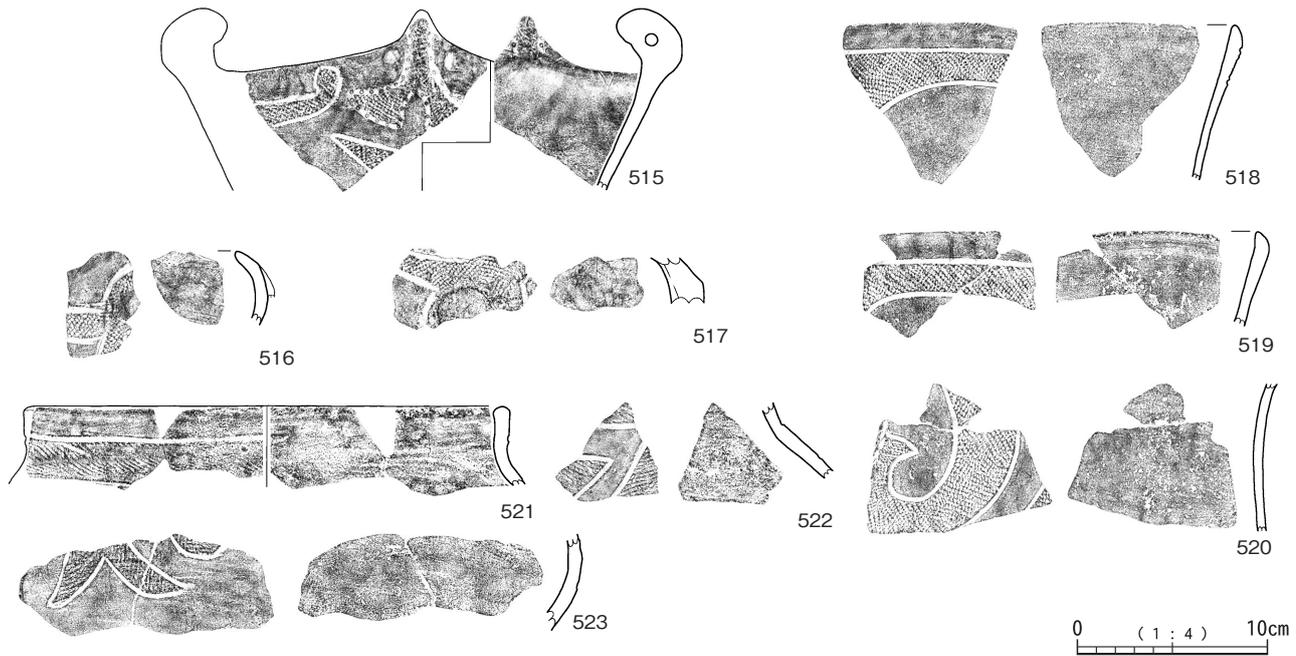
0 (1:4) 10cm

第50図 6類 阿高式土器 (10) 6-2



0 (1 : 4) 10cm

第51図 6類 阿高式土器 (11) 6-2



第52図 7類 中津式土器（磨消縄文）

帯下まで文様が広がる316・320もある。3類（中尾田Ⅲ類）の範疇に入る可能性もあるが、形態や文様、器面調整（明瞭な横方向の貝殻条痕）から本類として報告する。

5類 並木式土器（321～371）

2本単位の押引文の間に凹線文を施文する一群である。滑石混入が多い。口縁部下に文様帯が1帯構成の5-1類と、文様帯が胴部まで広がり、押引文や刺突文（貝殻刺突含む）と凹線文が施文される5-2類がある。

5-1類 文様1帯構成

口縁部下に1帯構成の文様帯をもつものである。文様は横位展開で、刺突文・押引文と凹線文で曲線的な文様を施文する。321は突帯に刺突文を施した渦巻状の文様を構成し、渦巻文間には沈線文と刺突文で施文する。突帯で文様を構成する例は南さつま市金峰町上焼田遺跡や熊本県黒橋貝塚で類例がある。

322・323は滑石混入で緻密な押引文と凹線文で施文される。324は貝殻刺突文と凹線文を施文している。5-2類の範疇の可能性もあるが、口縁部下に文様帯をもつものとして本類で報告する。

5-2類 文様区画構成：胴部上～中位施文

2本単位の押引文と凹線文で構成され、胴部中位まで施文されるのがみられる。押引文は先端が扁平な工具や先端が二又状の工具、先端が鋭利な工具（細線）などで施文されるほか、貝殻刺突で施文するものもある。滑石混入も多い。

325～327は滑石混入品で、327は2種類の突起をもち、突起を基準に曲線とスパード文の区画と三角文とスパー

ド文の組み合わせで文様を構成する。非常に施文が緻密である。

327～328・341は胴部中位まで文様が施文される。山形の突起をもち、口唇部がやや平坦で連続刺突文が施される。329～353は、口唇部に山形の突起をもつものが多い。

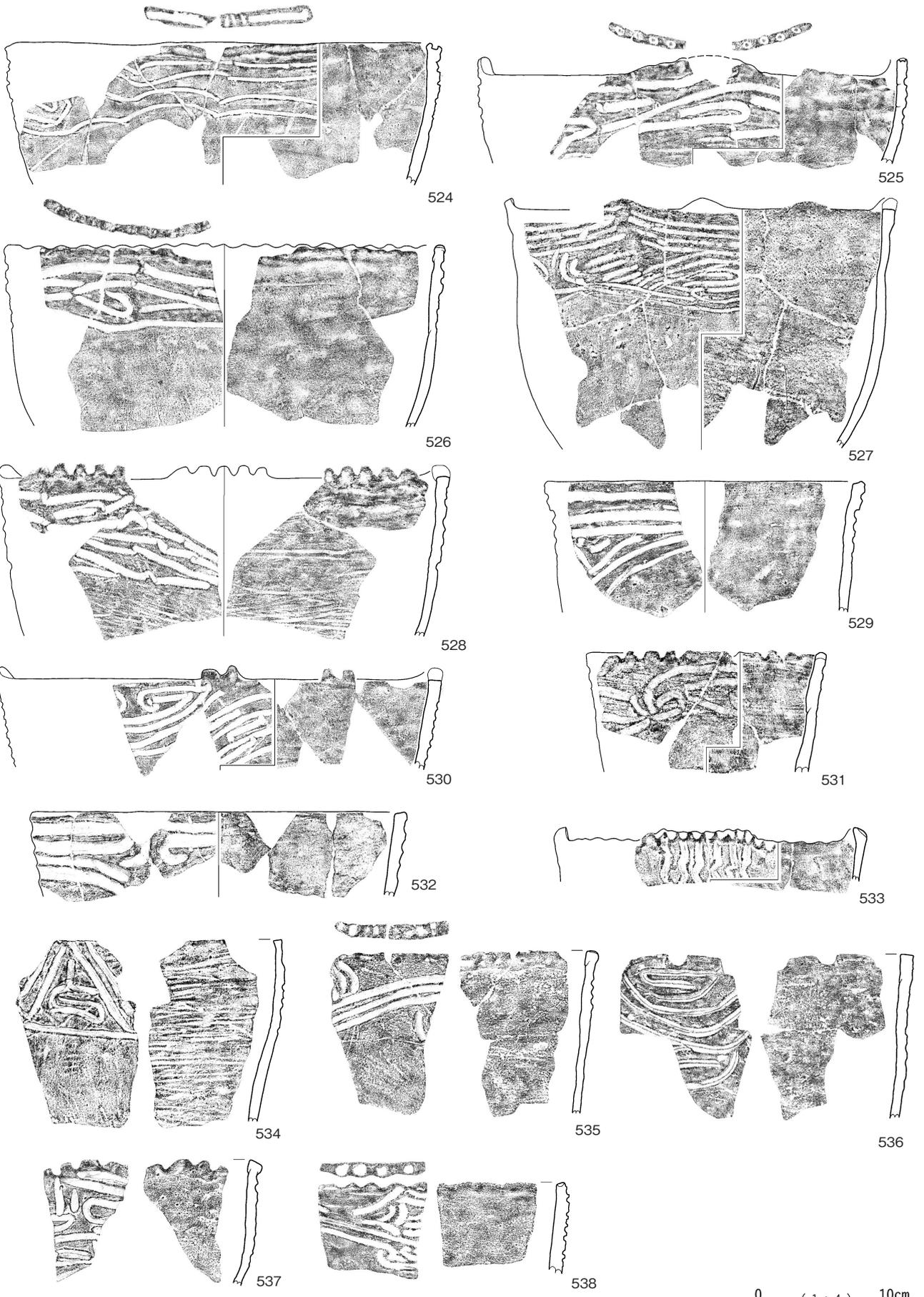
358～371は、並木式の変容形と考えられるものである。胎土は他と比べやや粗い。359は内湾する形態で無文の滑石混入土器である。358は爪形文と凹線文の組み合わせで、361は器形的には口縁部を肥厚させる3類（中尾田Ⅲ類土器）だが、貝殻刺突と凹線文であるため、本類として報告しておく。

361や366、367は他とは異なり、内面に横位の貝殻条痕が明瞭に残る。370は、短細沈線と凹線文が施文され、内面には外面の凹線による押圧痕が残る。

6類 阿高式土器（372～514）

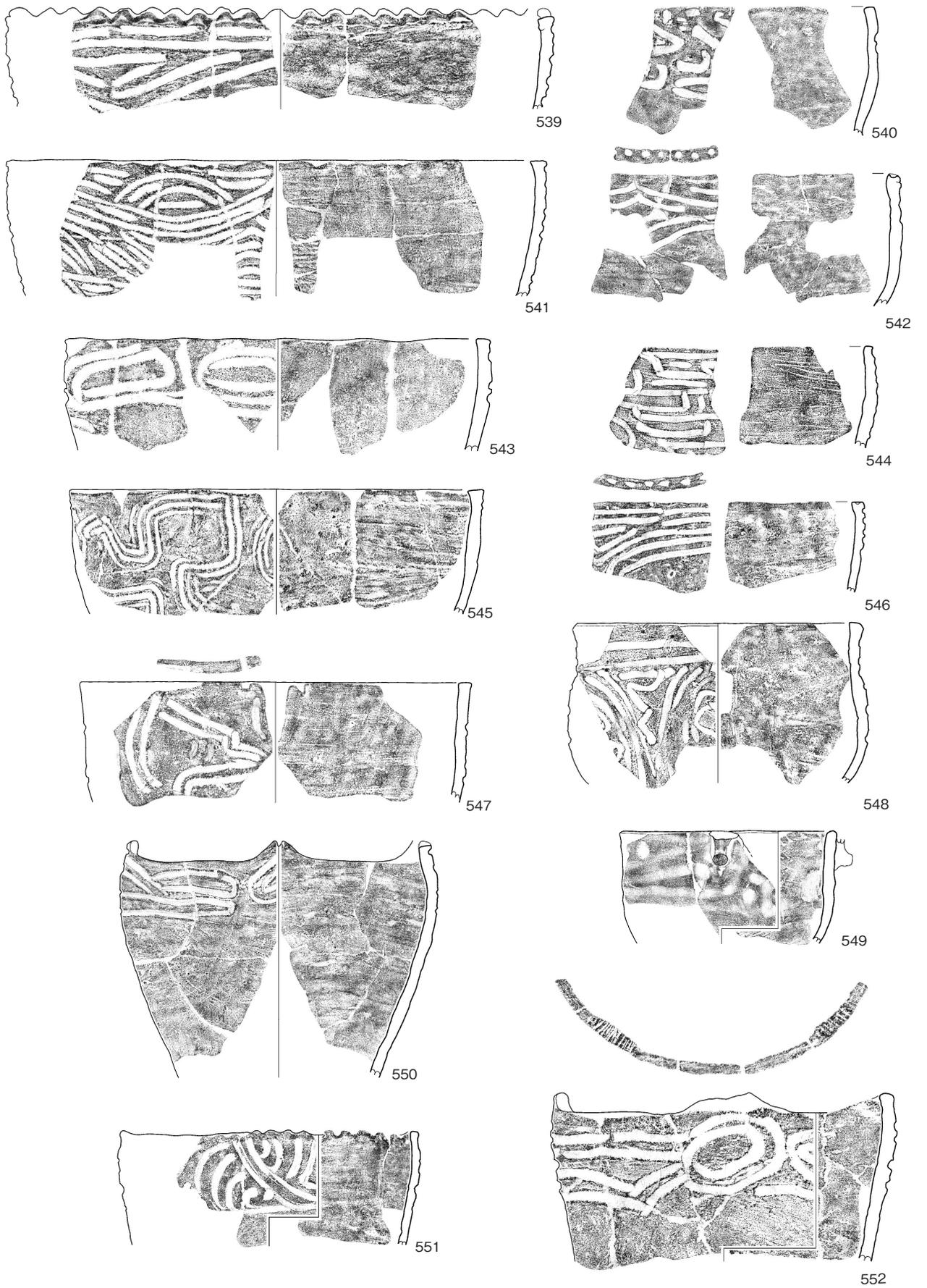
口縁～胴部もしくは全面に太形凹線文の施文が特徴的な一群である。凹線文は指頭や太いヘラで施文したような太く深いものや断面が深く断面四角形、楕円形をなすような棒状工具やヘラ状工具での施文もみられる。外面の文様施文により、内面には凹凸（押圧痕）が残るものが多い。

文様構成は縦位短凹線文と横位の平行文や鉤手状入組文、渦巻文などの複雑な曲線的・直線的な文様が施文される。胎土には滑石混入や、角閃石が目立つものも多い。器面調整は基本的には丁寧なナデ調整でミガキのように光沢をもつものがある。文様帯幅と文様区画から2種類に分類した。

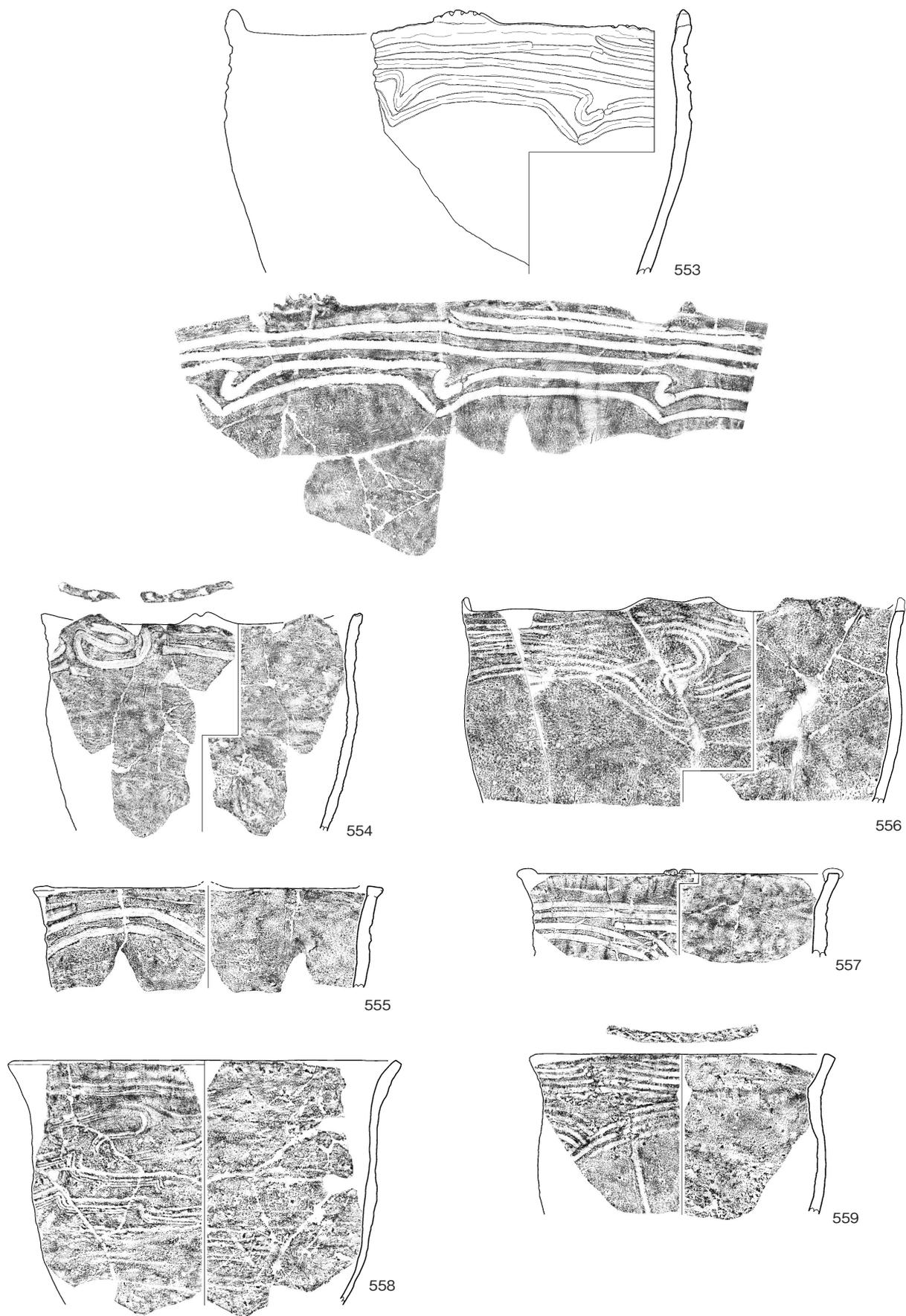


0 (1 : 4) 10cm

第53図 8類 宮之迫式土器 (1) 8-1

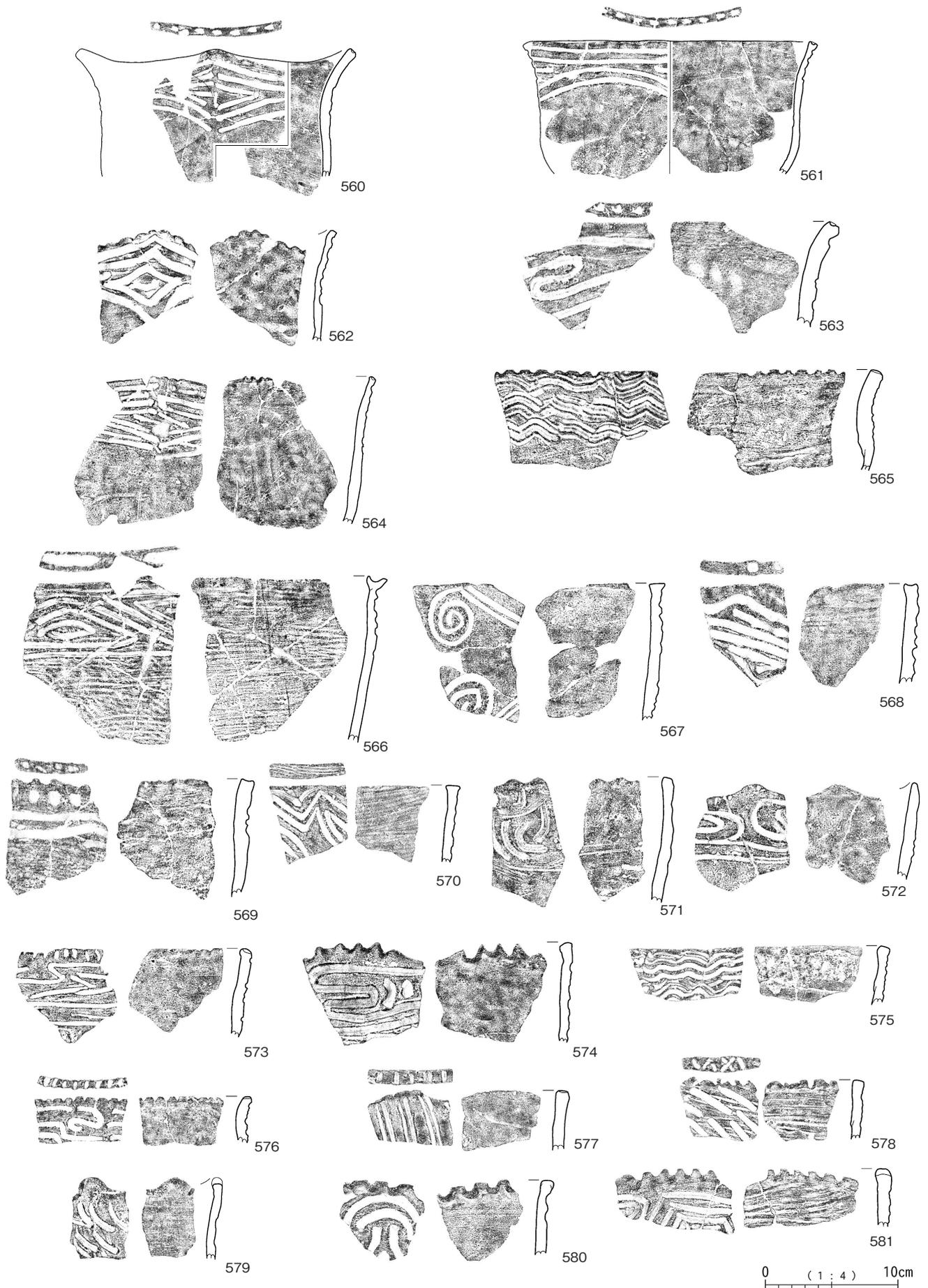


第54図 8類 宮之迫式土器 (2) 8-1

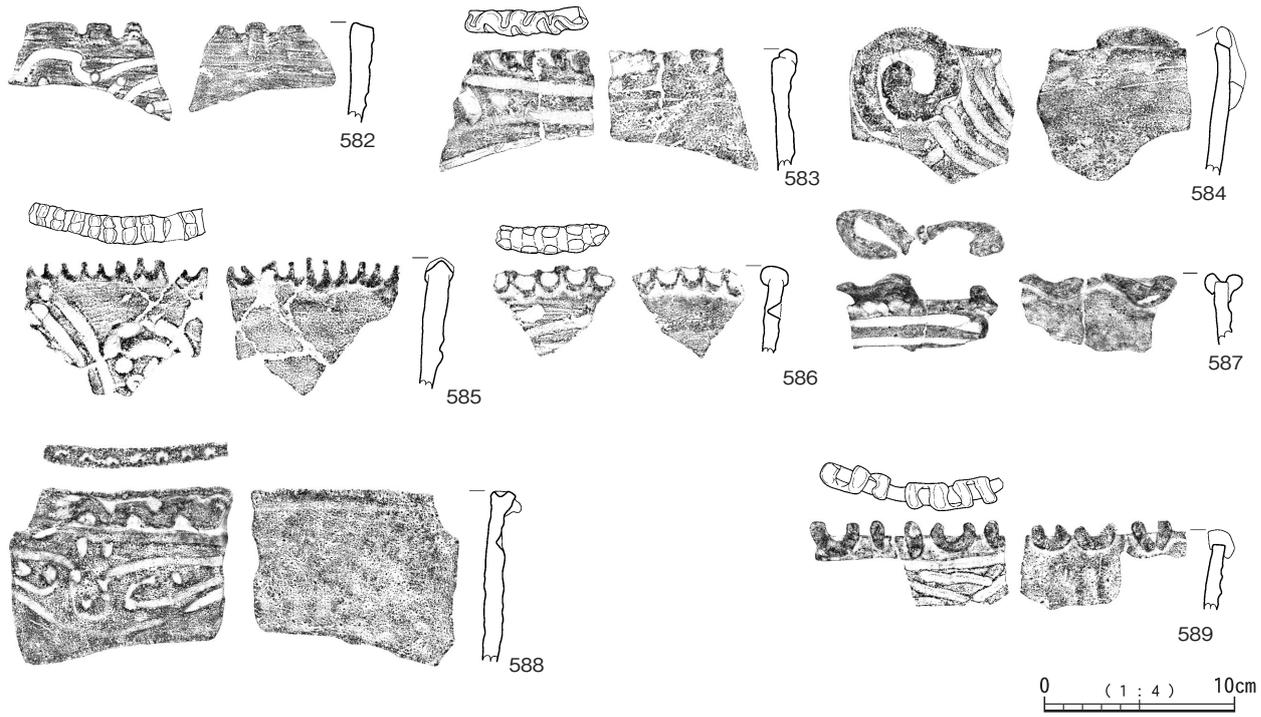


0 (1 : 4) 10cm

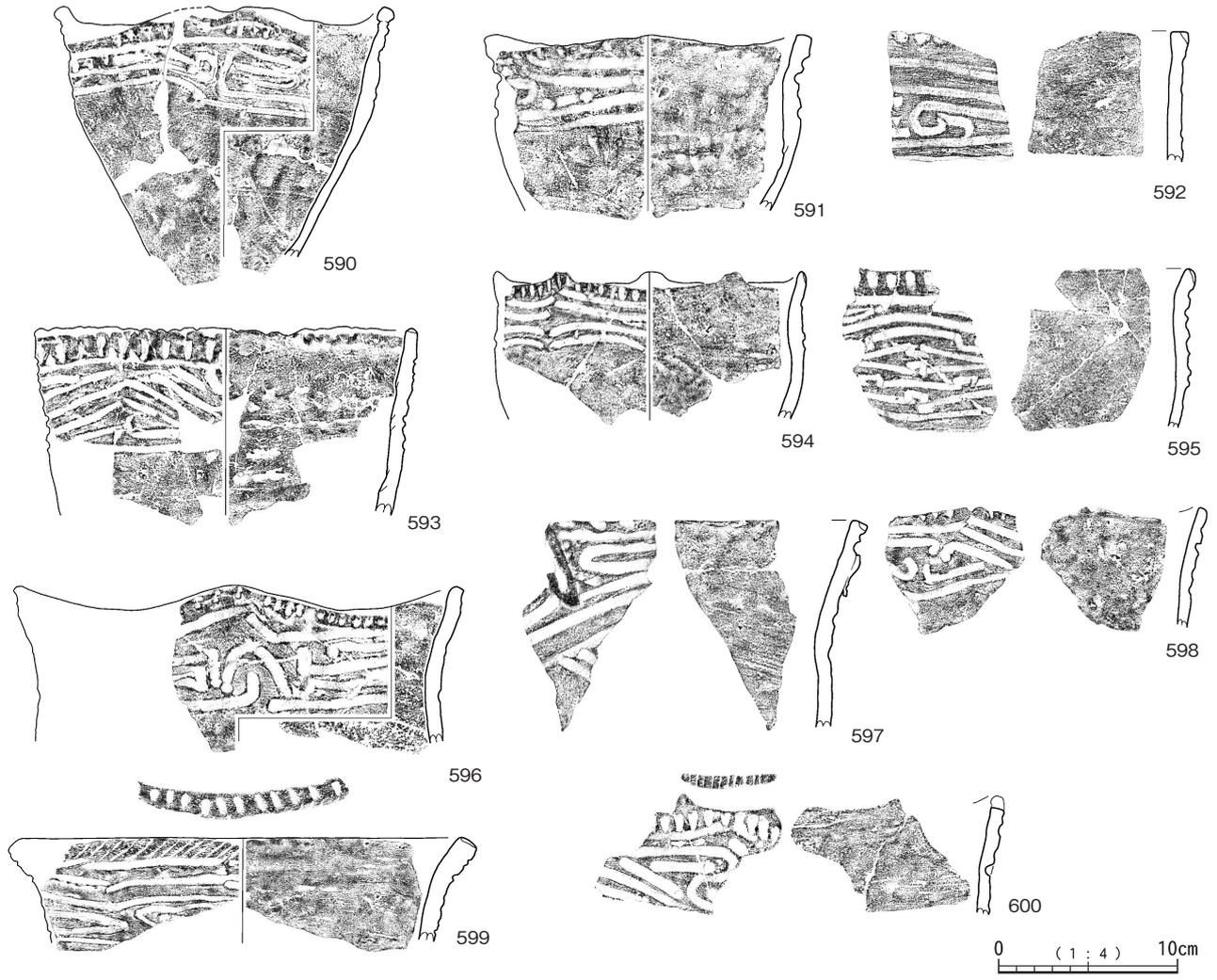
第55図 8類 宮之迫式土器 (3) 8-1



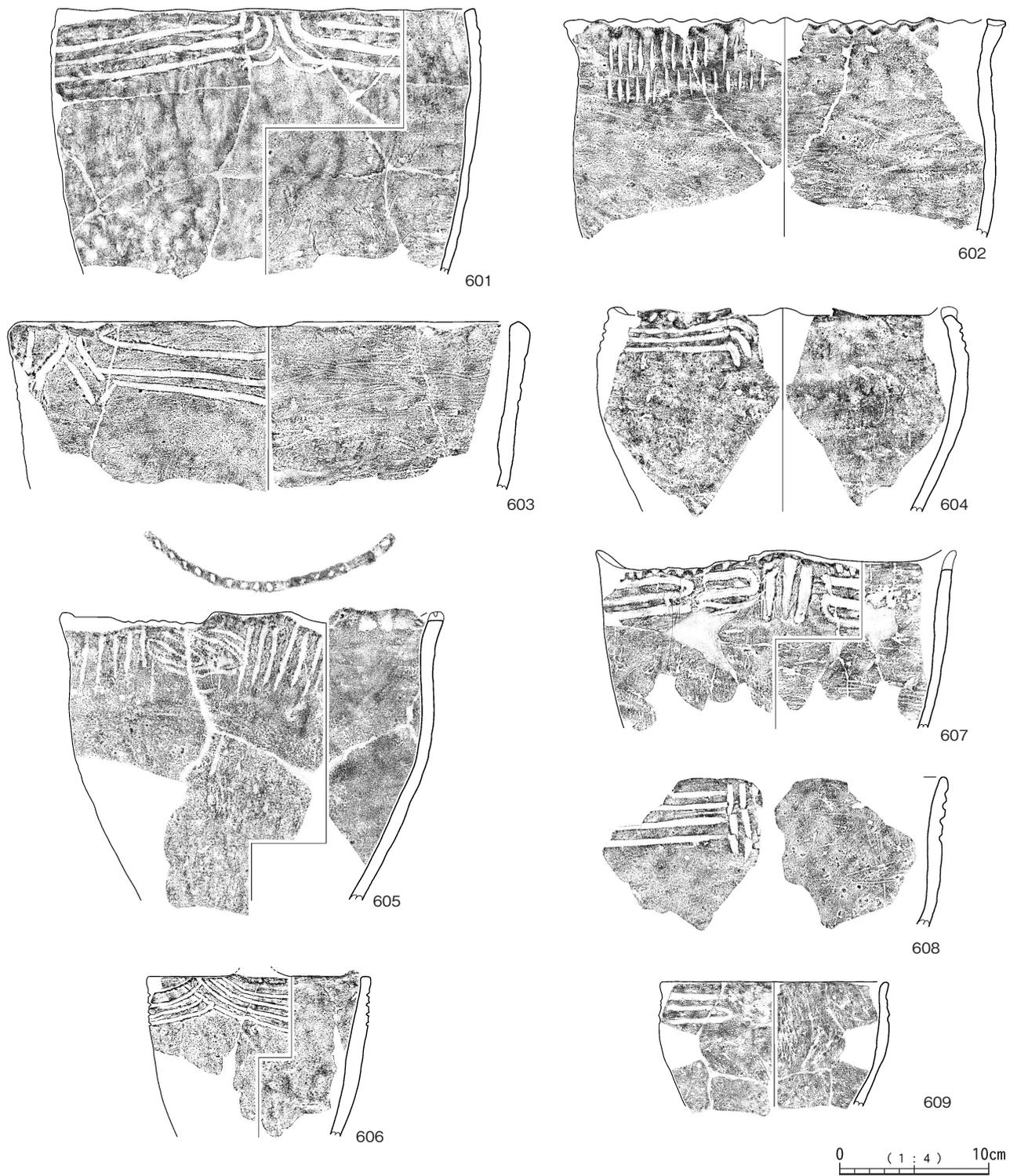
第56図 8類 宮之迫式土器 (4) 8-1



第57图 8類 宮之迫式土器 (5) 8-1



第58图 8類 宮之迫式土器 (6) 8-2



第59図 8類 宮之迫式土器 (7) 8-3

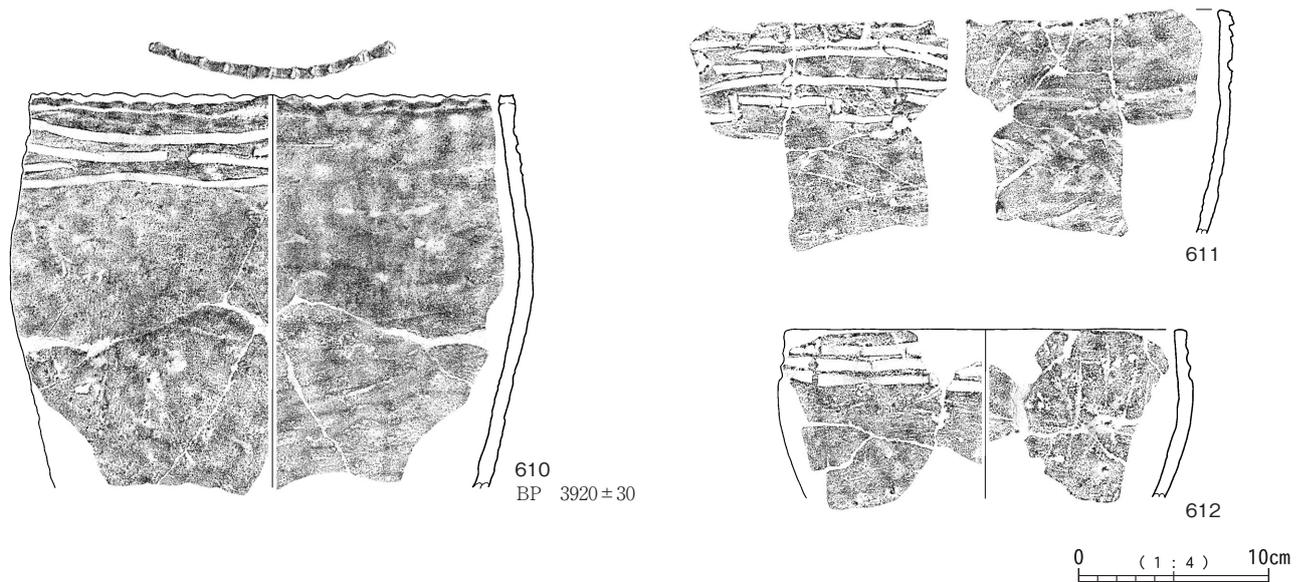
6-1類 胴部上半+文様帯2分割

胴部上半～中位に文様が施文され、文様帯を上下に2分割しているものである。文様帯は縦位の凹線と渦巻状の曲線的な幾何学文や波文、横平行文などが施文される。

形態は基本的には砲弾形だが、胴部最大径が張るもの(372・373)もある。口唇部は深い大ぶりの圧痕で細かい波状を呈すものが多い。378は文様帯の上位には短縦

位凹線を数本と無文部分で文様を構成している。下位の文様は凹線端部が鉤手状になり、深い施文のため内面は施文の押圧痕が明瞭に残る。383は器面調整の貝殻条痕が明瞭に残す。

387・388は器形が丸みを帯び、器面調整が非常に丁寧なナデで光沢をもつ。390は口縁部が大きく内湾し、鉢形を呈す。391～397は文様帯上位に縦位の短凹線をめぐ



第60図 8類 宮之迫式土器 (8) 8-4

らす。398～402は口縁下に凹線文施文時の押圧により内面が凹凸が目立つ。404は上位の文様を無文にし，下位には横平行文を施文する。

6-2類 口縁部上半+文様帯1分割

胴部上半に凹線文を施文するが，基本的に文様帯は1つで口縁部の突起や文様で区画をもち，全体の文様を構成する。6-1類と同様に滑石が入るものも多く，深い凹線文で渦巻文や四角形文等を施文する。

405はほぼ完形品で底部のみ欠損している。台形状の四角文の中心に鉤状文様をもち，それを上下交互に施文し，文様帯を巡らす。施文単位や施文の切り合いがわかる良好な土器である。口縁部上位には2つ補修孔が穿孔されている。内面は粘土帯接合痕が確認できる。

406は胴部は窄み屈曲する器形で，内外面には指頭圧痕が明瞭に残る。やや細目の沈線で鉤状の文様を施文し，底面には網代痕がみられる。霧島市の前原和田遺跡で類例がある。407は波状口縁部でヘラ状工具で深く鋭い凹線文を施文する。

408～449は胴部最大径が張り，丸みをもつ器形のものである。414は鉢形である。436～453は口縁部断面が三角形を呈すもので。口唇部に刺突文や沈線文などを施す。464はU字状の厚い沈線を施文した突帯を張り付け，口唇部には深い凹点をもつ。461は滑石を含み，屈曲する器形から小型の鉢の可能性もある。

465～512は阿高式新段階もしくは後続する8類（宮之迫式土器）の可能性もあるが，凹線文の幅や深さなども考慮し，本類の範疇に入るものとして報告する。

503～510は凹線文の凹線の間には貝殻押引文や連点文を施文する擬似縄文的な文様をもつものである。511・512は胴部上位に突帯を巡らし，文様帯を構成するものである。

7類 中津式土器 (515～523)

いわゆる磨消縄文手法で施文される中津式に相当する一群である。沈線文と充填縄文で曲線的な文様が施文される。器面調整はミガキに近い丁寧なナデで非常に薄手である。胎土も精緻でにぶい黄橙色を呈し，他の土器とは異なる。搬入品の可能性が非常に高い。

515は大きな山形の波頂部をもつ深鉢で，波頂部には穿孔をもつ。518・519は口縁部がハの字状に広がる器形で，516～523は胴部が丸くなる鉢形を呈する。

8類 宮之迫式土器 (524～829)

6類（阿高式）に後続すると考えられる，従来岩崎上層・下層式土器，綾式土器，宮ノ前式土器，中原式土器，宮之迫式と呼ばれてきた土器群である。本報告では宮之迫式土器として報告する。形態・文様のバリエーションが多く，文様構成を基準に9分類に細分した。

各類に共通して，形態的に①口縁部が直線的に立ち上がるもの，②内湾し丸味を帯びるもの，③外反するものの3種が存在する。

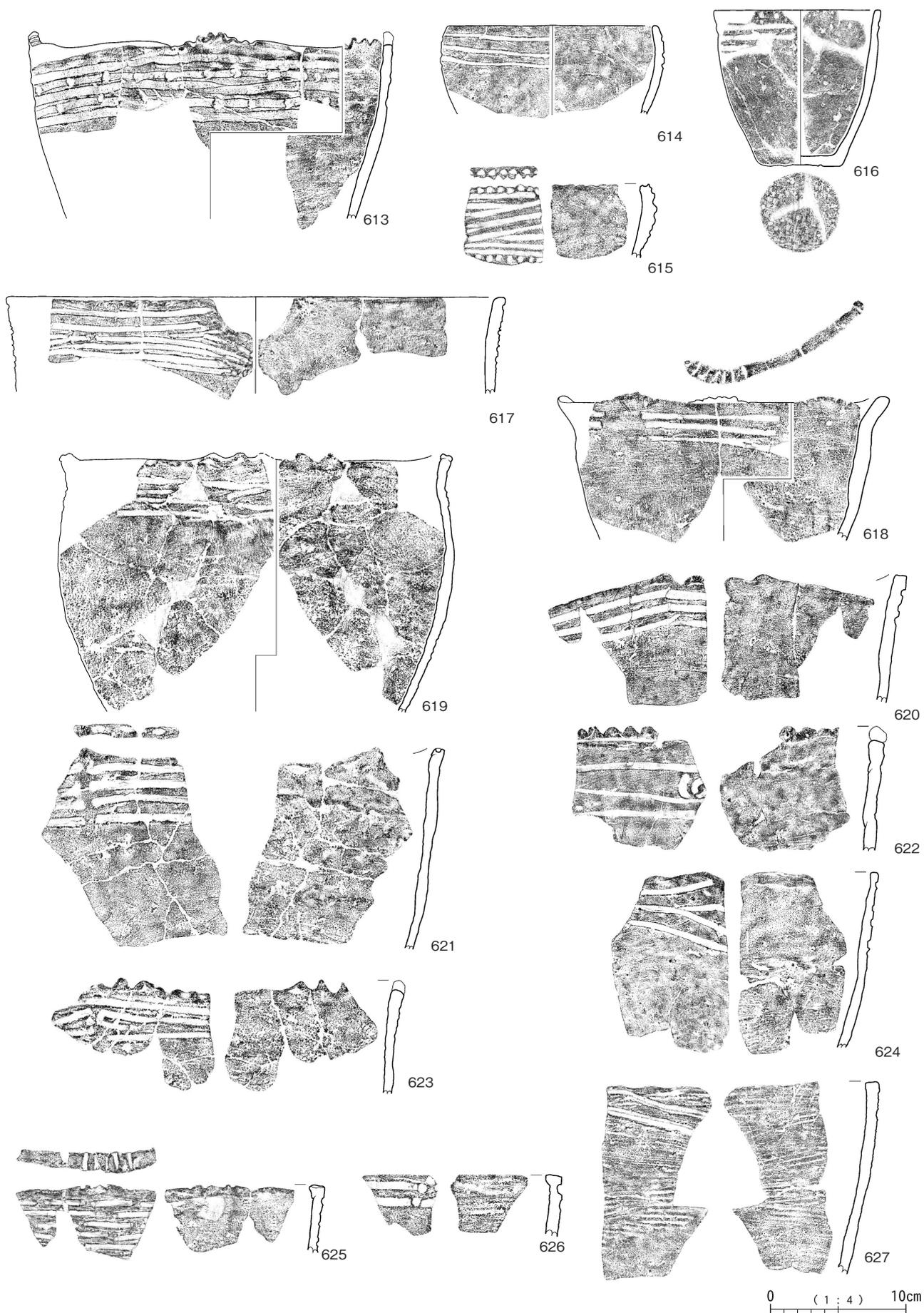
器面調整は内外面ともにナデ調整が基本であり，貝殻条痕を明瞭に残すものは少量であった。文様がヘラ状の工具で6類（阿高式）よりは細目で深い凹線文で文様間が広がる。

胴部上位に文様帯をもち，文様帯が1分割単位のもの，上下で2分割する（上位：縦短凹線+下位：平行文や波文）の文様構成をもつものがある。

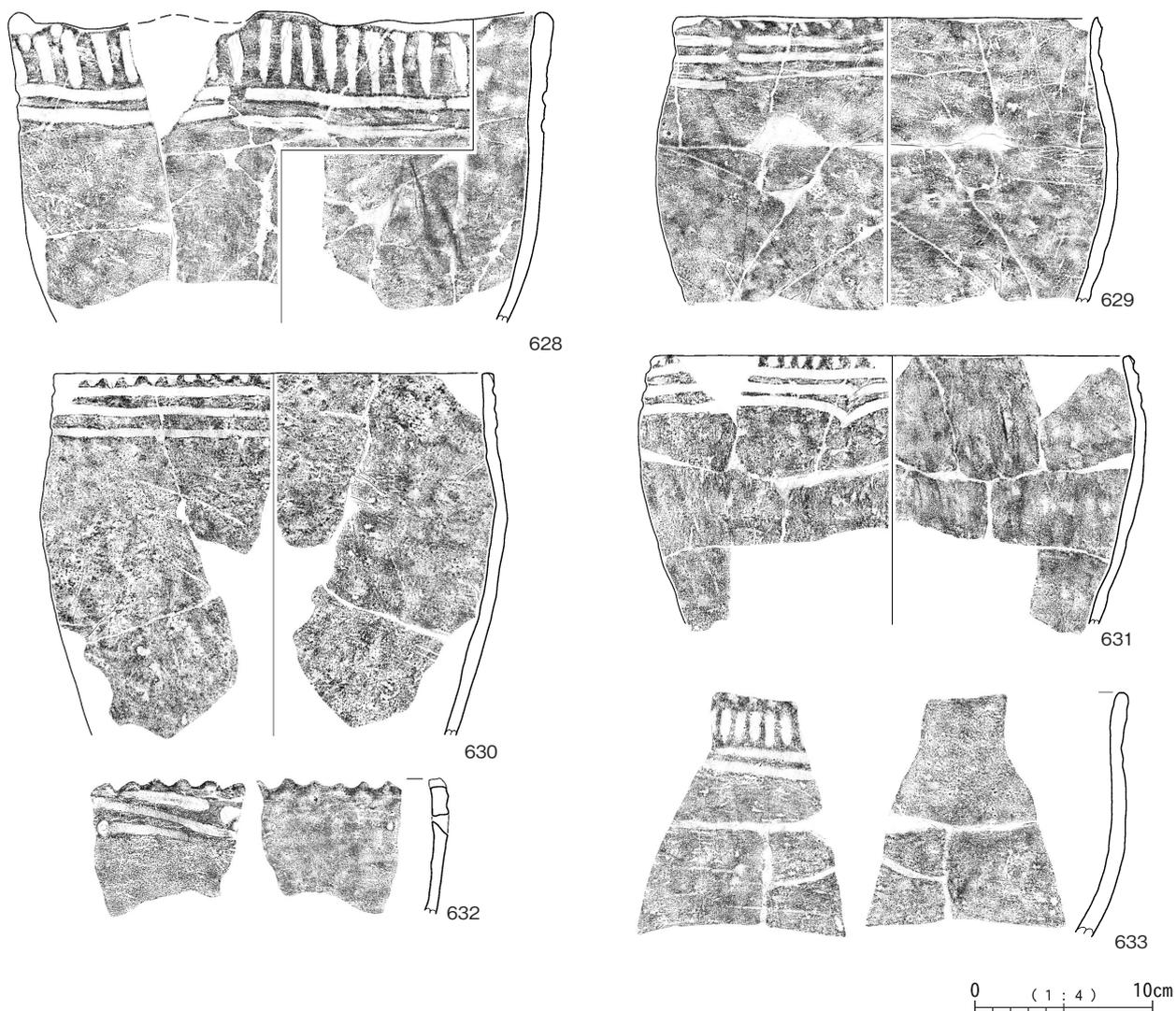
8-1類 凹線文系

胴部上位にヘラ状工具や棒状施文具で細目の凹線文で波状文や幾何学文などをもつものである。

幾何学文は7類の区画化された文様構成と比べると，やや崩れており明確な区画構成はもたないものが多い。



第61圖 8類 宮之迫式土器 (9) 8-4



第62図 8類 宮之迫式土器 (9) 8-5

口唇部は平坦で刺突文や沈線文などが施文されるものがある。口縁部は山形の突起を数か所つけて波状にするものと口唇部に深い刺突を施文し、細かな波状にするものなどがある。

524～538は口縁部が垂直方向に直線的に立ち上がるもので、539～546、550～552は口縁部が内湾するタイプ、553～576はやや外反し、胴部が張る器形のものである。

548・549は丸みを帯びる器形をもち、形態的特徴では6類(阿高式)相当とも考えられるが、文様の崩れ方を考慮し、本類として報告する。

566は内外面の貝殻条痕が明瞭に残り、口縁部下位に文様帯が集約され、やや細めで深い凹線で山形文が施文される。

579～581は口唇部に粘土紐を貼り付け、波状の口縁部である。

8-2類 縦位短凹線+凹線文

口縁部下に縦位の短凹線を巡らし、その下に凹線文で幾何学文を施文するものである(文様帯2分割単位)。

凹線文は長く、凹線の終点を省略した鉤手状にするものもある(592・595など)。

縦位の凹線文が簡略し、口唇端部に深い刺突で施文したもの(592～600)もある。

8-3類 縦+横：区画文

文様帯は一带だが、文様帯を縦に分割し文様を構成するものである。縦位の凹線と数条の横位置の平行文などで文様を構成している。601は胎土にφ0.5mm大の赤色礫や軽石粒を多く含む。外面には煤が付着している。

605は胎土が赤褐色を帯び、φ5mm大の軽石粒を多く含む。表面が摩滅が著しい。

602は2段の細縦位線と空白で文様帯を構成し、口唇部を深い刺突で波状口縁を成している。604のように横位の平行文を下方方向に伸ばし、縦位の文様とみなしているものもある。

606・609は内外面ともに丁寧なナデで器面調整され、わずかに光沢をもつ。